

岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書 第87集

野 笹 遺 跡 Ⅲ

2004

財団法人 岐阜県教育文化財団

序

美濃加茂市は、木曽川、飛騨川が合流する開けた盆地にあります。古くから木曽川水運の港町として、また中山道など主要街道の宿場町として栄えてきました。現在も、岐阜・名古屋・東濃・飛騨を結ぶ交通の要所となっており、鉄道や国道などの幹線交通路が集まっています。恵まれた地理的環境は、旧石器時代から現代に至るまで、連綿とした人々の生活をはぐくみ、多くの遺跡となって残っています。

野籠遺跡は、一般国道248号道路改良工事に伴う発掘調査で、木曽川の河岸段丘上に広がる縄文時代から現代にかけての長い時代にわたる生活の跡が次第に明らかになってきました。平成8・9年度の調査では、縄文時代から中世にかけての集落跡が見つかり、特に古墳時代後期の竪穴住居跡は23軒に及びました。平成11・12年度の調査では、古墳時代の住居跡4軒、溝数条をはじめ多くの遺構と、横穴式石室を持つ円墳1基が見つかりました。

このたびの調査では、平成8・9年度に確認された、坂を持つ中世の大溝の続きが見つかりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成16年3月

財團法人 岐阜県教育文化財団

理事長 日 比 治 男

例 言

- 1 本書は、岐阜県美濃加茂市野竹町2丁目字紙屋に所在する野竹遺跡（岐阜県遺跡番号21211—08845）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道248号道路改良工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部可茂建設事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター（平成14年度までは財團法人岐阜県文化財保護センター）が実施した。
- 3 発掘調査は、平成14年度に、整理作業は平成15年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章と第3章は藤岡比呂志、それ以外は近藤正枝が行った。また編集は近藤が行った。
- 6 発掘調査における地形測量・空中写真測量、作業員雇用、現場管理、掘削などの業務と、遺物の洗浄・注記は、大日コンサルタント株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、STUDIO SKYに委託して行った。
- 8 石器の実測・観察表作成・文章執筆は、株式会社アルカに委託して行った。結果は第4章中に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）
可見光生 千藤克彦 藤村俊 松岡千歳 三島美奈子 渡辺博人
美濃加茂市教育委員会 美濃加茂市野竹町2丁目自治会
- 10 本文中の方位は、国土地理院系の座標北を示している。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センターで保管している。

凡例

- 1 出土遺物の実測の縮尺は、石器が2/3、1/3、陶器・磁器が1/3である。
- 2 遺構の略号は下記のものを用いた。

柱穴・小穴	P	自然流路	NR
-------	---	------	----

なお、遺構番号は1番から通番で付し、調査時のものをそのまま使用している。

目 次

序

例言

はじめに	1
第1章 調査の経緯	2
第1節 調査にいたる経緯	(藤岡) 2
第2節 発掘調査の経過と方法	(藤岡) 2
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 基本層序	8
第4章 遺構と遺物	12
第1節 遺構・遺物の概要	12
第2節 遺構と遺物	13
第3節 包含層出土遺物	(近藤・馬場・高橋) 27
第5章 まとめ	45
遺物観察表	
図版	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第16図 15溝出土遺物①	22
第2図 野筋遺跡内地区別図	3	第17図 15溝出土遺物②	23
第3図 調査前地形測量図・試掘位置図・ 調査範囲図	5	第18図 05溝出土遺物	24
第4図 周辺の遺跡分布図	7	第19図 07・08土坑平面図・断面図	25
第5図 遺構全体図	8	第20図 P09・10・12平面図・断面図	26
第6図 基本層序（1）	9	第21図 包含層出土遺物	27
第7図 基本層序（2）	11	第22図 剥離技術についての説明図	30
第8図 01溝・NR平面図・断面図	14	第23図 包含層出土石器（1）	36
第9図 墓平面図・断面図	15	第24図 包含層出土石器（2）	37
第10図 01溝出土遺物①	16	第25図 包含層出土石器（3）	38
第11図 01溝出土遺物②	17	第26図 包含層出土石器（4）	39
第12図 自然流路出土遺物①	18	第27図 包含層出土石器（5）	40
第13図 14溝、02溝出土遺物	19	第28図 包含層出土・縄文時代晚期後半～ 弥生時代の石器・その他	41
第14図 05・15溝平面図・断面図	20	第29図 01溝・自然流路遺物X軸投影分布図	46
第15図 15溝蝶平面図	21	第30図 遺物種別散布状況図	47

第31図 野佐 I・IV区	第32図 遺構変遷図	49	
01溝、05溝平面図	48	第33図 土器組成・陶器用途別グラフ	51

表目次

表1 時期区分	12	図版1 遺跡全景、作業風景
表2 遺構一覧	23	図版2 墓断面、01溝・NR 全景・断面
表3 石材別石器製作作業概要	28	図版3 11塙・14溝 全景・断面
表4 器種と剥片剥離技術の関係	32	図版4 02・03・05・15溝全景、調査区全景
表5 器種と素材剥片形態の関係	32	図版5 05・15溝、07・08土坑全景・断面
表6 石材・器種と刃部属性の関係	32	図版6 01溝出土遺物(1)
表7 石材・器種と形態形成加工の関係	33	図版7 01溝出土遺物(2)
表8 石材・刃部属性と形態形成加工の関係	33	図版8 01溝出土遺物(3)
表9 石材・形態形成加工と剥片剥離技術の関係	33	図版9 01溝出土遺物(4)
表10 器種別上器組成表	50	図版10 01溝出土遺物(5)、自然流路出土遺物(1)
表11 用途別陶器・磁器組成表	50	図版11 自然流路出土遺物(2)
表12 器種別土器組成表(質量)	51	図版12 自然流路出土遺物(3)、14・02溝出土遺物
表13 石器組成表	52	図版13 05・15溝出土遺物(1)
表14 石材別個数表	52	図版14 05・15溝出土遺物(2)
表15 土器観察表	53	図版15 05・15溝出土遺物(3)
表16 石器観察表	59	図版16 05・15溝出土遺物(4)、包含層出土遺物(1) 図版17 包含層出土遺物(2)、01溝・自然流路出土遺物 図版18 自然流路、14・15・05溝、包含層出土遺物 図版19 包含層出土石器(1) 図版20 包含層出土石器(2) 図版21 包含層出土石器(3) 図版22 包含層出土石器(4)、剥片・石核

図版目次

文章中図版1 剥離開始部の幅の計測	34
文章中図版2 石庖丁の使用痕	43

はじめに

本報告書は、既刊の『野籠遺跡Ⅰ』及び『野籠遺跡Ⅱ』の続編である。『野籠遺跡Ⅰ』で報告したI区は、遺跡の中央部にあたり、『野籠遺跡Ⅱ』で報告したII区・III区は、I区の北側に続く地区がIII区、I区の南に続く地区がII区である。本報告書で報告するIV区はI区の西に続く地区で、同一遺跡内の1地点である。したがって、「遺跡の環境」については、『野籠遺跡Ⅰ』の記述と重複するため、詳細な記述を避けることとする。報告書名のローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは分冊を意味するもので、I区～IV区のように「区」を付した方は、遺跡内の地点を表すものである。



第1図 遺跡位置図

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

当遺跡の発掘調査は、岐阜県基盤整備部建設管理局可茂建設事務所による一般国道248号線道路改良工事に伴うものである。この道路建設予定地周辺は、周知の遺跡（縄文時代）や古墳があり、比較的の遺跡分布密度の高い地域である。平成7年度に岐阜県教育委員会が道路予定地を試掘したところ、遺跡を確認し、「野籠遺跡」と命名され、当センターが平成8～9年度にI区を、平成11～12年度にII、III区の発掘調査を実施している。

一般国道248号道路改良工事の設計変更に伴い、I区の南西部隣に道路工事予定地ができたため、平成14年5月1日に試掘確認調査を行ったところ、I区で確認した大溝（S R 1）の延長部と、溝、土坑、小穴などが見つかり、遺跡が南西部に広がることを確認した。これらの結果を踏まえて、5月8日に岐阜県可茂建設事務所・県教育委員会社会教育文化課・財団法人岐阜県文化財保護センターの三者による平成14年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、本発掘が必要であると判断し、当センターが平成14年度に発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過と方法

1 調査期間

平成14年6月24日～8月20日

2 グリッド設定方法（第3図）

調査区内は、I区に隣り合うため、I区で使用した国土地理院（日本測地系）に合わせ、磁北を基準として5m×5mの方形区画（グリッド）を設定した。I区は一辺8mのグリッドであったが、IV区は調査範囲が狭いため、5mのグリッドとし、グリッド名称はIV区単独での名称とした。グリッド杭の名称は北から南へ1～6、東から西へA～Fとして、グリッドの名称は北東杭で呼称することにした。

3 層序

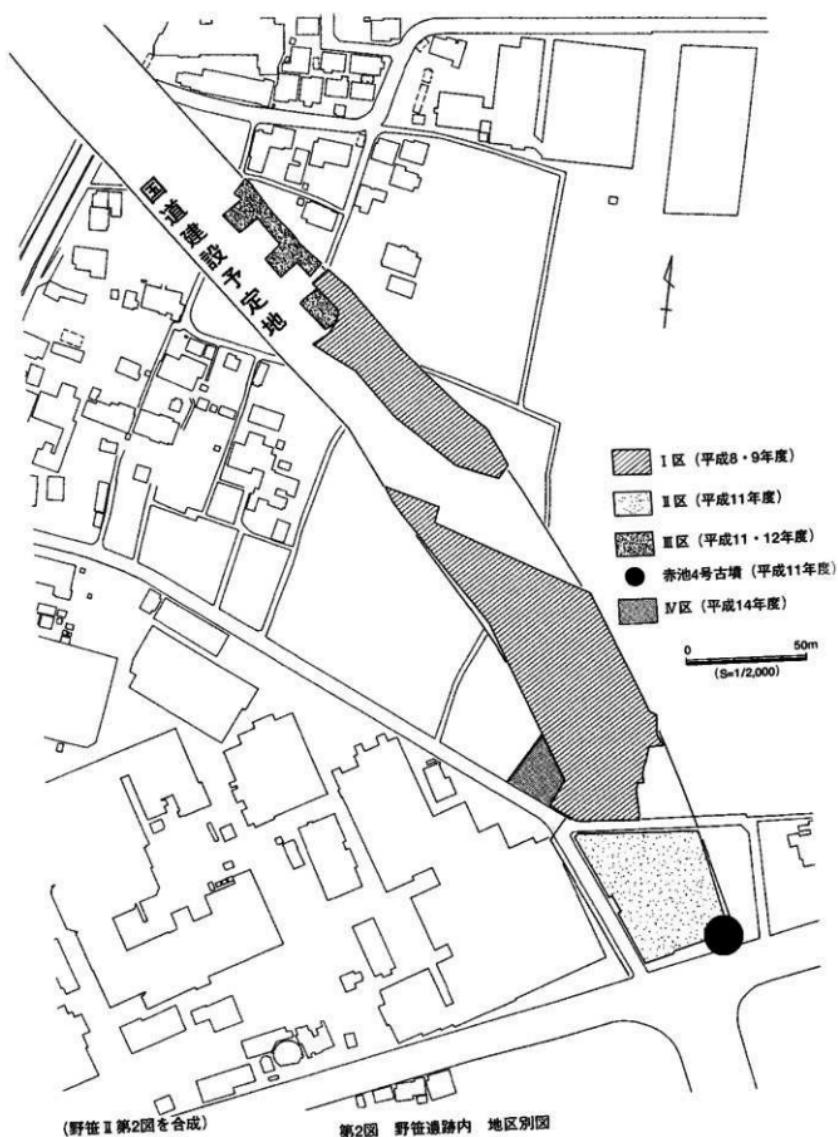
詳細は第3章で述べるが、遺物包含層を中心とする基本層序はI～IIIのローマ数字、遺構内の埋土は算用数字で呼称することとした。

4 調査対象面積

500m²

5 調査の経過

6月10日に重機による表土掘削を行った。手掘りによる遺構検出を行う途中で、搅乱が広範囲にわたって確認できたため、搅乱部分は重機で取り除いた。その後、遺構検出を手掘りで行うと同時に、調査区壁面において層位の確認と記録を行った。遺構掘削を手掘りで行い記録をとった。遺物は層位



4 第1章 調査の経緯

別、グリッド別に一括で取り上げ、遺構出土遺物はトータルステーションによって取り上げた。遺構掘削後に空中写真撮影による測量を行い、01溝下の自然流路を掘削し、遺物の取り上げを行った。調査の詳細については、調査日誌抄として記述する。

6 遺物・調査記録の整理作業

平成15年度に、出土遺物・調査記録の整理作業を行った。遺物の洗浄・注記ならびに土器の硬化剤処理は現地で完了しているため、これらの作業以降の段階から始めた。

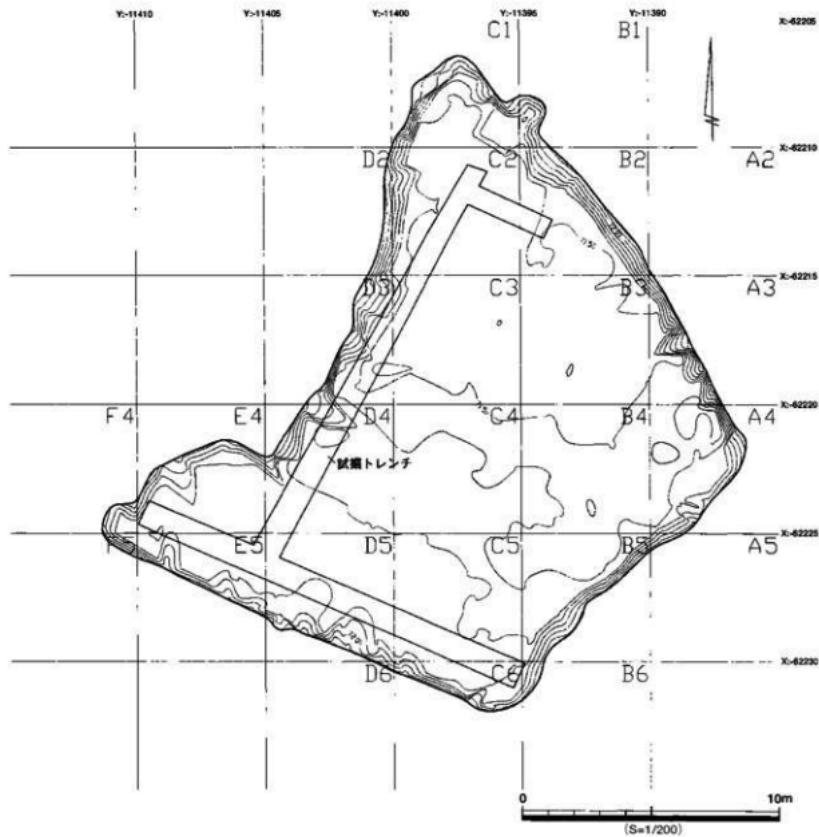
7 発掘調査及び整理作業の体制

	平成14年度	平成15年度
理事長	服部卓郎	日比治男
副理事長兼事務局長		高橋宏之
副理事長		平光明彦
専務理事兼事務局長	成戸宏二	
常務理事兼センター所長		福田安昭
常務理事兼経営部長	福田安昭	
経営部次長兼経営課長	福田照行	
経営課長		川瀬崇敏
調査部長	武藤貞昭	武藤貞昭
調査部次長	片桐隆彌	
担当調査課長	藤岡比呂志	高木徳彦
担当調査員	藤岡比呂志	近藤正枝
整理作業從事者	春日井典子 後藤悦子 野尻みどり	

8 調査日誌抄

6月20日	基準点測量。	7月5日	重機による擾乱除去作業終了。
6月21日	現場事務所設置。	7月8日	遺構検出終了。01溝、堰検出。
6月24日	調査範囲に安全柵設置。調査開始。 調査区壁面の整形、清掃。	7月9日	遺構掘削開始、01溝の断剤開始。
6月26日	層位確認、南東壁トレチ掘削と調査。 地山面検出。	7月11日	01溝の断剤終了、分層、記録。
6月28日	遺構包含層（Ⅱ・Ⅲ層）掘削。 遺構検出作業開始。	7月18日	上坑掘削。02・03溝、小穴検出。
7月2日	南東壁清掃、セクション図作成。	7月22日	01溝の覆土精査開始。15溝断剤。
7月3日	南西壁清掃、セクション図作成。	7月25日	01溝の覆土精査終了。02・03溝完掘。
	重機による擾亂部分除去作業開始。	7月30日	空中写真撮影測量。
7月4日	北西壁清掃、セクション図作成。05溝検出。	7月31日	自然流路精査開始。

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| 8月1日 北西壁断削開始。 | 8月13日 美濃市教育委員会三島美奈子氏来訪。 |
| 8月5日 自然流路精査終了、北西壁断削終了。
分層、記録。 | 8月14日 造構掘削終了。 |
| 8月7日 美濃加茂市教育委員会可見光生氏来訪。 | 8月19日 平面実測終了。調査区最終全景撮影。 |
| 8月8日 壁の石組除去後、覆土精査。 | 8月20日 午前で現場作業終了。 |
| 8月9日 美濃加茂市教育委員藤村俊氏来訪。 | 午後、岐阜県可茂建設事務所へ引き渡し。 |



第3図 調査前地形測量図・試掘位置図・調査範囲図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡は、木曽川によって形成された河岸段丘面上に立地する。この河岸段丘は、高位段丘2面、中位段丘2面、低位段丘5面に区分される（詳細は『野籠遺跡Ⅰ』参照）。調査区は低位段丘の中でも現河床からみて2番目に低い段丘上にある。木曽川は上流から多くの砂をもたらすため、砂が非常に多く堆積している。調査前は、畑として利用されていた。

第2節 歴史的環境

これまで知られている美濃加茂市内の遺跡の多くは、低位段丘上と中位段丘上にあたる加茂野台地上に所在する。しかし、近年の開発に伴い、高位段丘上で新たな遺跡が発見されてきている。ここでは、当遺跡が所在する低位段丘上の遺跡を中心に紹介する。ここで示した遺跡の範囲は、野籠遺跡Ⅱを転用している。また、文章も野籠遺跡Ⅱを転用している。

旧石器時代

木曽川の対岸にある川合遺跡群（可児市）で、ナイフ形石器などの遺物が出土している。

縄文時代

早期の押型文土器が、牧野小山遺跡や富田清友遺跡で確認されている。牧野小山遺跡では、早期～晩期の遺物が確認されている。主体となる時期は中期後半で、大量の遺物や遺構が報告されている。

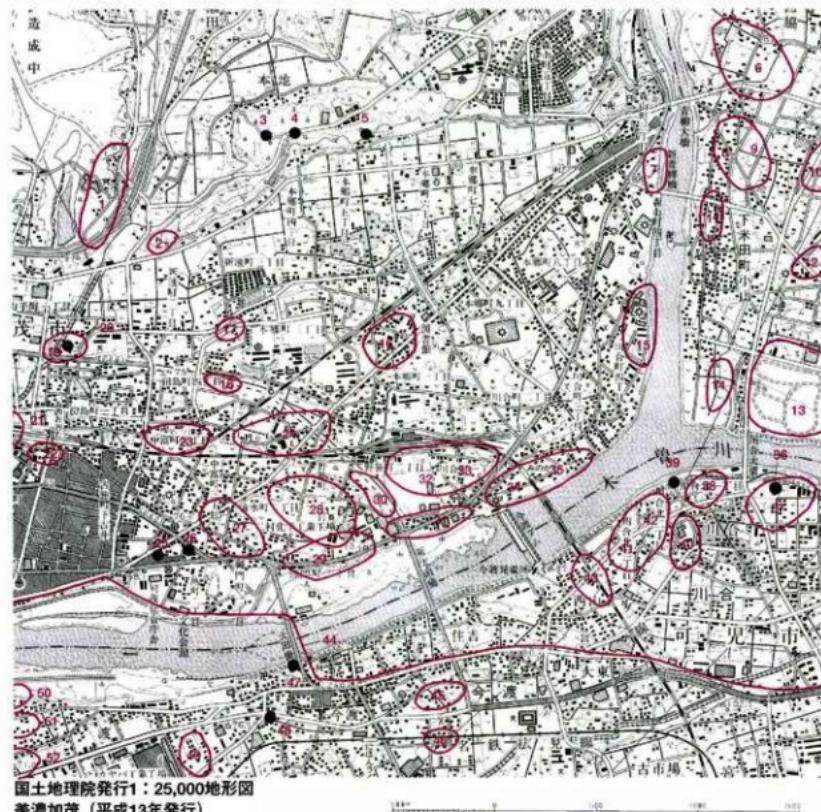
弥生時代～古墳時代

尾崎遺跡、牧野小山遺跡、今遺跡で住居跡が検出されている。後田遺跡では、弥生時代前期の遠賀川式土器が出土している。当遺跡に隣接する亀淵遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭のパレススタイル土器が出土している。また二ツ塚遺跡からは、弥生時代前期～中期の条痕文系土器が出土している。

古墳は、かつて後期の群集墳が市内の各地で知られていたようであるが、耕作や市街化で消滅している。赤池古墳群は1～3号までが確認され『美濃加茂市史』にその記載がある。赤池4号古墳は発掘調査され、野籠遺跡Ⅱに報告されている。近くに二ツ塚古墳がある。

古代・中世

古代寺院跡については、瓦が採集され伝承が残る例もあるが、いずれも正式な調査は行われていない。中世の遺跡については、調査例が少なく今後の調査が期待される。I・III区で検出された壙と敷石を伴う大溝は、良好な資料と言える。



(S=1/25,000)

1 尾崎道路（弥生～中世）	14 島崎道路（弥生）	27 火塚古墳（古墳）	40 次郎兵衛塚古墳群（古墳）
2 一夜瓢道路（弥生）	15 川合東古墳群（縄文～弥生）	28 亀淵道路（弥生）	41 宮之脇道路群（縄文～中世）
3 火塚男塚道路（古墳）	16 本郷道路（弥生）	29 亀淵古墳群（古墳）	42 宮之脇古墳群（古墳）
4 麻塚古墳（古墳）	17 石坂道路（弥生）	30 野籠道路（縄文～近世）	43 西野道路（古墳）
5 元押陳寺跡（近世）	18 仲追田道路（縄文～近世）	31 赤池古墳群（古墳）	44 田中山道（近世）
6 漢波道路群（縄文～弥生）	19 大塚古墳（古墳）	32 二ツ塚道路（縄文～弥生）	45 今渡道路（縄文～近世）
7 森山道路（弥生）	20 太塚道路（弥生）	33 二ツ塚古墳群（古墳）	46 今渡金星道路（近世）
8 長福道路（弥生）	21 井口道路（弥生）	34 川合西古墳群（古墳）	47 今渡波船場の路（近世）
9 長福古墳群（古墳）	22 後田道路（弥生）	35 川合西道路群（縄文～弥生）	48 今渡下細古墳（古墳）
10 今道跡（弥生～中世）	23 中當道跡（縄文～弥生）	36 東細古墳（?古墳）	49 上田東山古墳群（古墳）
11 小山鈴音北道路（弥生）	24 妻迫田道路（縄文～弥生）	37 川合道路（縄文～古墳）	50 上田神無道路（縄文）
12 道間古墳群（古墳）	25 神明堂古墳（古墳）	38 榛荷塚古墳群（古墳）	51 八幡古墳群（古墳）
13 牧野小山道路（縄文～古代）	26 塚古吉古墳（古墳）	39 コダマ塚古墳（古墳）	52 上田定安道路（古墳）

第4図 周辺の遺跡分布図

第3章 基本層序

基本層序はⅠ区の南側と同じである。「野籠遺跡Ⅰ」で述べられているⅠ、Ⅱ層の2層が確認できる。

Ⅰ層：暗褐色、黒褐色 砂質土 耕作土

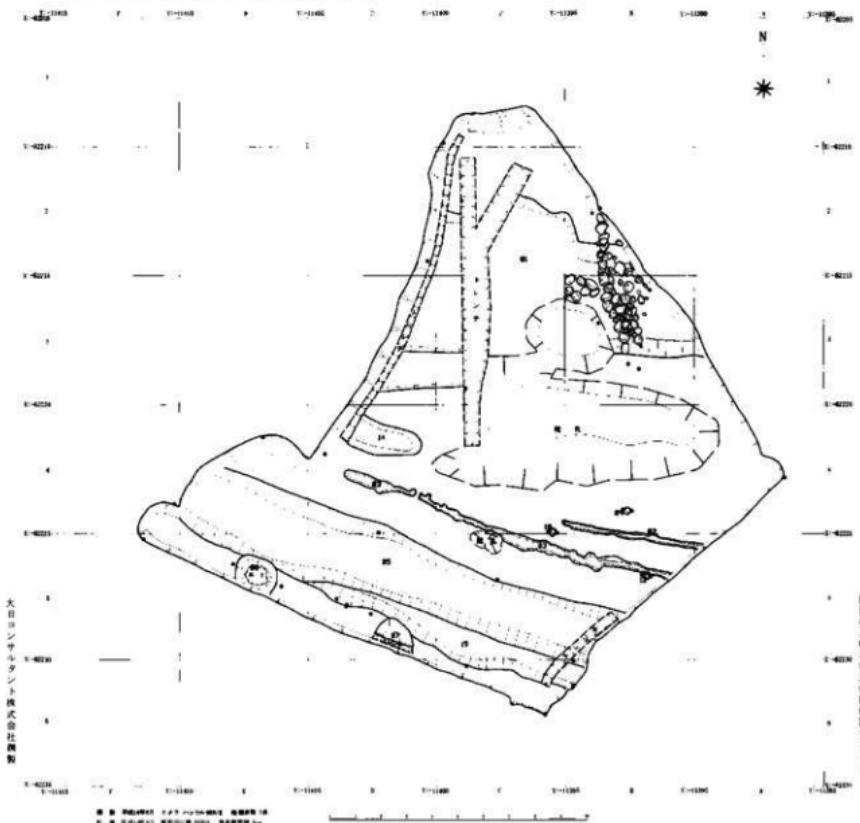
表土で、搅乱をかなり受けしており、場所によって堆積状況が異なる。

Ⅱ層：黒褐色 砂質土

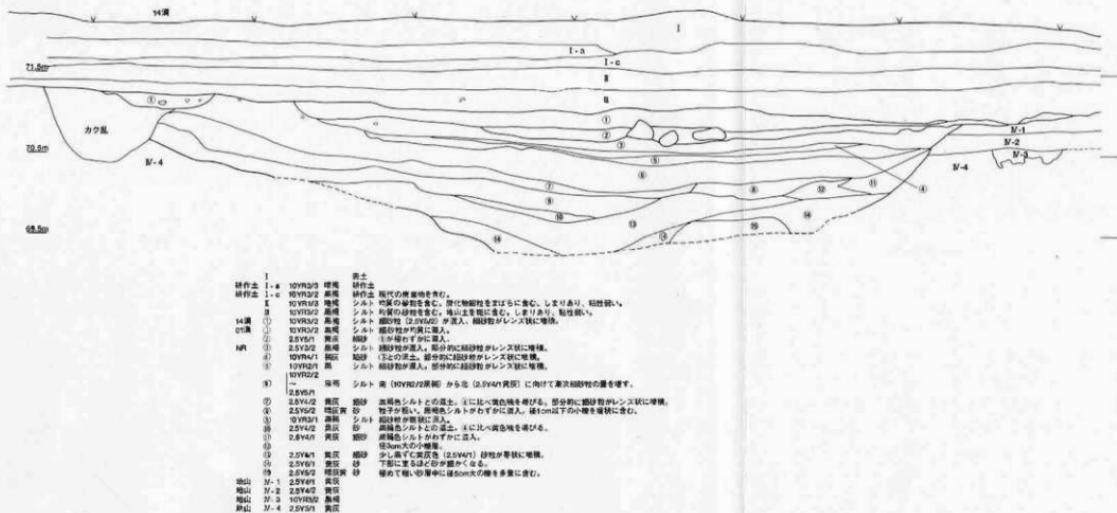
遺物包含層である。遺構は、Ⅱ層直下から掘り込まれている。Ⅰ区ではⅡ層直下は中世後半以降の遺構検出面である。

Ⅲ層：明黄褐色 砂

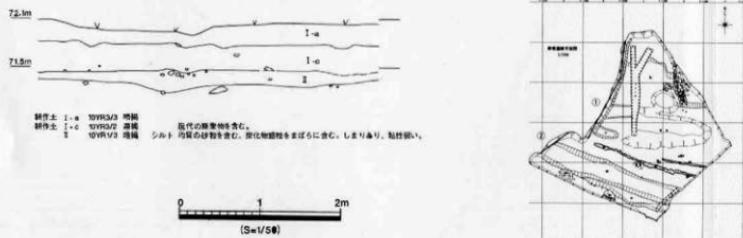
地山である。野籠遺跡ⅠではⅣ層にある。調査区の南半分には地山中にレンズ状に疊層が分布しており、05溝・15溝の底部に疊が一面に広がっている。Ⅰ区のⅢ層は局所的にのみ存在するもので、Ⅳ区では確認されていない。



第5図 遺構全体図 (S=1/200)



◎ 球體研究

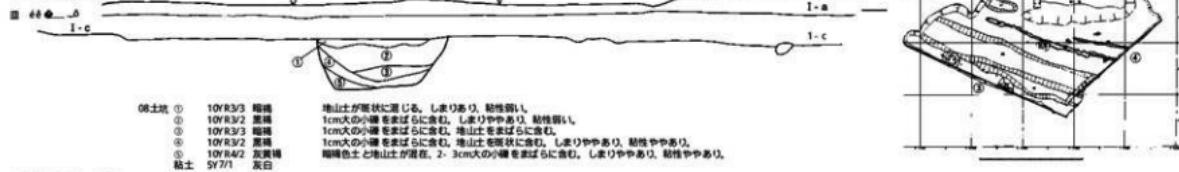


第6図 基本層序(1)

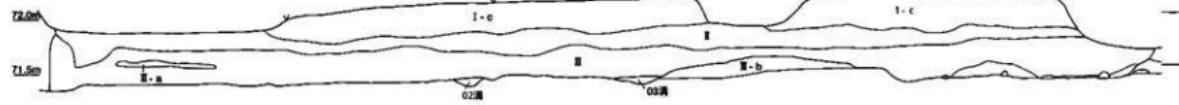
①南壁断面 (07土坑)



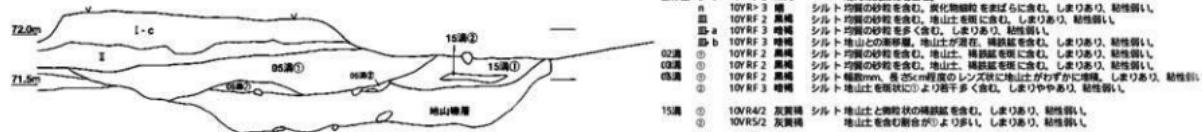
②南壁断面 (08土坑)



③東壁断面 (02・03溝)



④東壁断面 (05・15溝)



第7図 基本層序 (2)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構・遺物の概要

包含層出土の遺物は層位、グリッドごとに一括で取り上げ、遺構出土の遺物はトータルステーションによって取り上げている。土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、中近世陶磁器と時期幅広く出土しているが、遺構から出土した遺物は15世紀のものが一番新しく、遺構の時期と考える。15世紀以外の遺構から出土した遺物は、溝をつくった際にかきまわされているものと思われる。石器は縄文～弥生時代の石鎚・フレイク・石核・打製石斧、弥生時代中期の石庖丁などが出土している。打製石斧と石庖丁以外の石材はほとんど下呂石である。下呂石の原石は拳大より小さい円錐で、石鎚をつくるためのものと思われる。下呂石は近くの木曾川から採取したものと思われる。

当遺跡のI・II・III区からは縄文時代、弥生時代の住居跡が確認されているが、IV区では検出されていない。本報告書では、遺構出土の遺物と包含層出土の遺物を分けて掲載する。

表1 時期区分（『野籠遺跡I』第1表転用）

区分	I区	IV区 遺構	IV区 遺物	時期	土器型式による細分
1期	○			縄文時代中期末	咲烟・醍醐I 船元・里木V 賀曾利EII
2期	○			縄文時代中期末	咲烟・醍醐II 賀曾利EIII
3期	○		○	縄文時代中期末	咲烟・醍醐III 賀曾利EV
4期	○			縄文時代後期	称名寺～賀曾利B、福田KII～緑帯文系
5期	○		○	縄文時代晚期	馬見塚
			○	弥生時代前期前葉初頭	櫻王
6期	○		○	弥生時代前期	水神平
7期	○		○	弥生時代中期前葉	朝日
8期	○			弥生時代中期中葉	貝田町
9期				弥生時代中期後葉	高蔵
10期	○		○	弥生時代後期	山中
11期	○		○	弥生時代末～古墳時代初頭	丸山・廻間I
12期	○			古墳時代前期	
13期	○		○	古墳時代後期	
14期	○		○	古代	
15期	○	○	○	中世前期	山茶碗第3～6型式（12～13世紀前半）
16期	○	○	○	中世後期	山茶碗第7～11型式（13世紀後半～15世紀）
17期	○	○	○	近世	瀬戸美濃連房

I区の○は遺構・遺物の確認を、I区の○は遺物のみの確認を示す。

第2節 遺構と遺物

01溝（第8・10・11図）

2B・C、3A～Dに位置する。01溝は東西方向に長く、西に傾斜している。調査区の中では一番低いところに位置する。1、2層が溝の埋土で3～6層が自然流路である。この溝は自然流路を利用してつくられているようである。3層からの出土遺物は2層出土のものに類似し、土師器、石器が多量に出土している。また、1層と3層出土の須恵器が接合している。これらのことから、下層に遺構があったか、北からの流れ込みである可能性が高い。

この溝はI区で検出された北東方向に伸びる大溝につながる。出土遺物から12～13世紀の遺構と思われる。I区で検出したものは、幅9～10m、深さ約0.5mで、断面形は浅い播鉢状をしている。IV区で検出したものは、搅乱を受けており、上場は南西隅でのみ確認されている。また、この南西隅(D3)からは土師器や石器などが集中して出土しており、流れのよどみ部分か、遺構であった可能性がある。この溝の幅は7～8m、深さは0.25mである。また、I区で確認された堰と同じ遺構を伴い、溝の南に平行する細い溝を検出しているが、搅乱を受けていたため導水施設の詳細は確認できない。更にI区では、溝の底から敷石遺構を確認しているが、IV区では検出していない。

掲載遺物は、縄文時代中期(1・2)、弥生時代前期前葉(3～13)、弥生時代前期(14～16)、弥生時代前期～中期の胴部破片(17～26)、弥生時代中期前葉(27～35)、弥生時代後期(36)、弥生時代末～古墳時代初頭(37～39)、古墳時代前期(40)の土器、古墳時代7世紀以前の土師器(41～49)、7世紀以降の土師器(50～54)、7世紀の須恵器(55～60)、8世紀の須恵器(61～63)、12～13世紀の山茶碗(64～71)、14～15世紀の山茶碗(72)である。

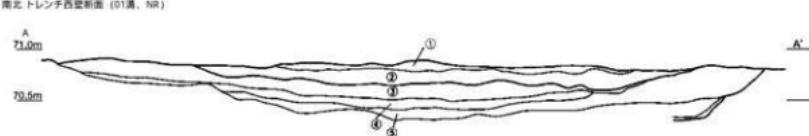
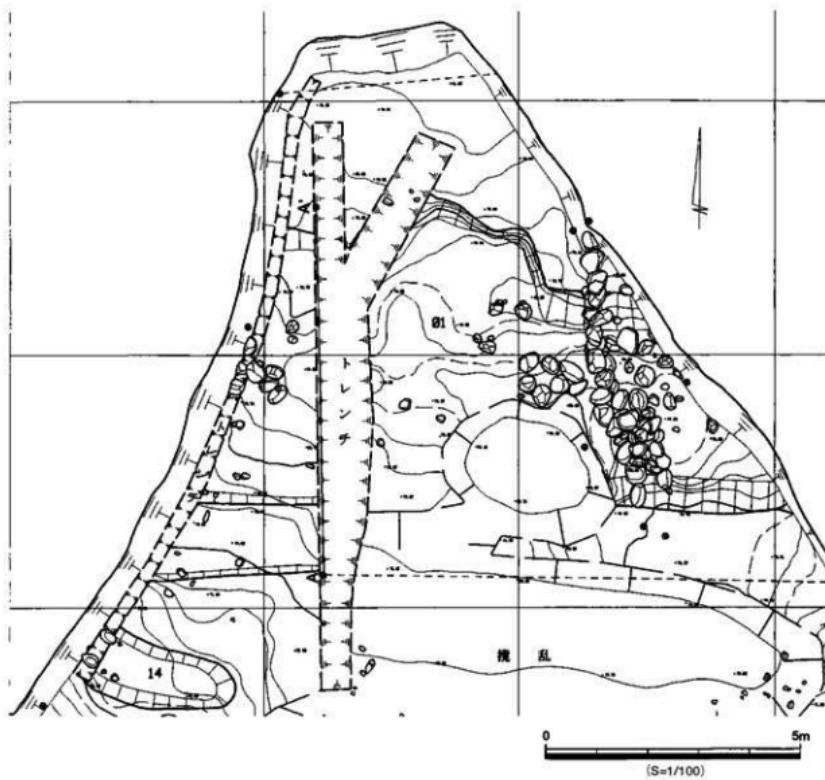
堰（第9図）

01溝の東壁付近2・3Bで検出した。堰の構築面は2層底部である。北側は調査区外へ続く。堰は40cm大の川原石を上下2段に積んだ2列の石組みで、幅1～1.5m、長さ6.5mである。大型の石が01溝と直交する方向に配石されており、平面形は中央部が下流に下がった「く」の字型をしている。I区の堰に見られるような、木の板等を川原石の下に渡すような付随施設の痕跡は検出できなかったが、01溝の南にある14溝は01溝に平行するようである。堰の南端でごくわずかだが炭化物が見られ、石組みの中には被熱した石も見られる。被熱した石の周囲は被熱していないことから、石組みを構築した際に被熱した石が紛れ込んだ可能性が高い。

自然流路（NR）（第8・12図）

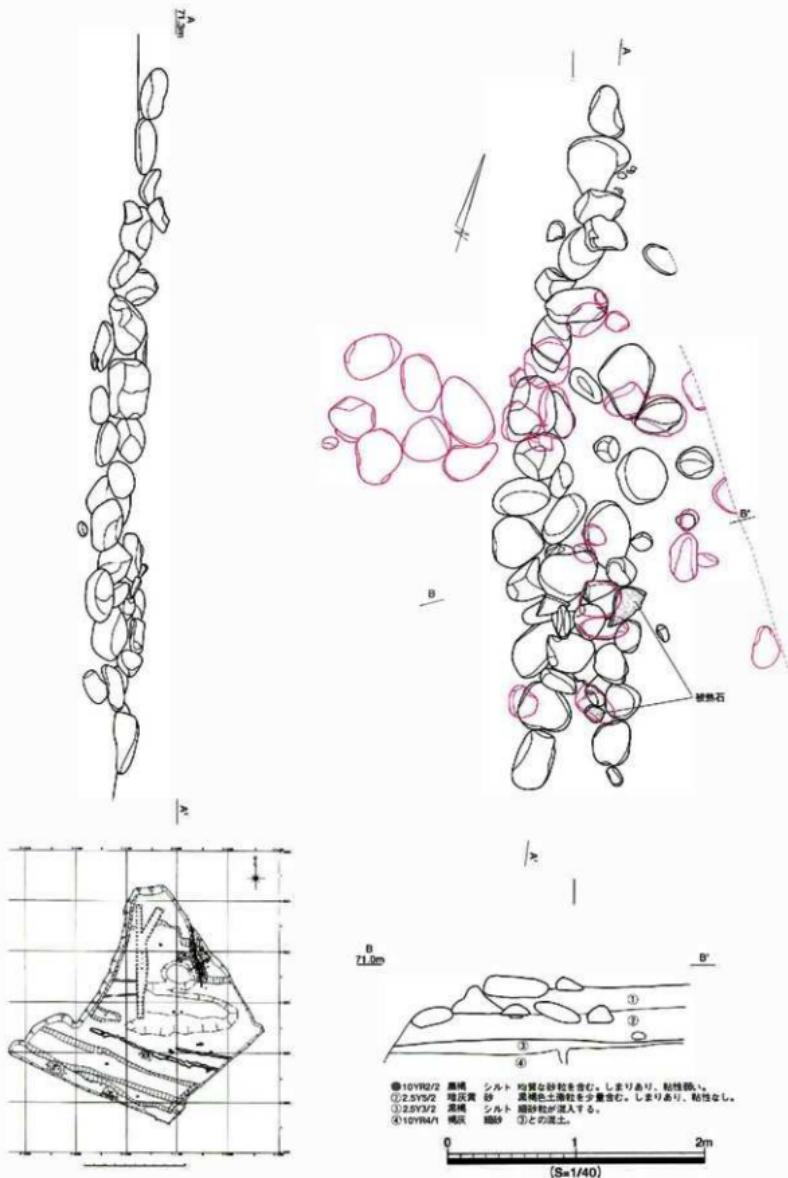
01溝の下から検出され、深さは1.5mほどある。埋土は3～6層で、遺物のほとんどは3層から出土している。6層直上からも土師器等が数点出土している。

掲載遺物は、縄文時代中期(73)、縄文時代後期(74・75)、縄文時代晚期(76～78)、弥生時代前期前葉(79・80)、弥生時代中期前葉(81)、弥生時代前期～中期の胴部破片(82～86)、弥生時代前期(87・88)、弥生時代中期前葉(89・90)、弥生時代中期(91)、弥生時代中期～後期初頭(92・93)の土器、古墳時代7世紀以前の土師器(94)、7世紀の須恵器(95～99)、8世紀の須恵器(100)、12～13世紀の山茶碗(101・102)である。

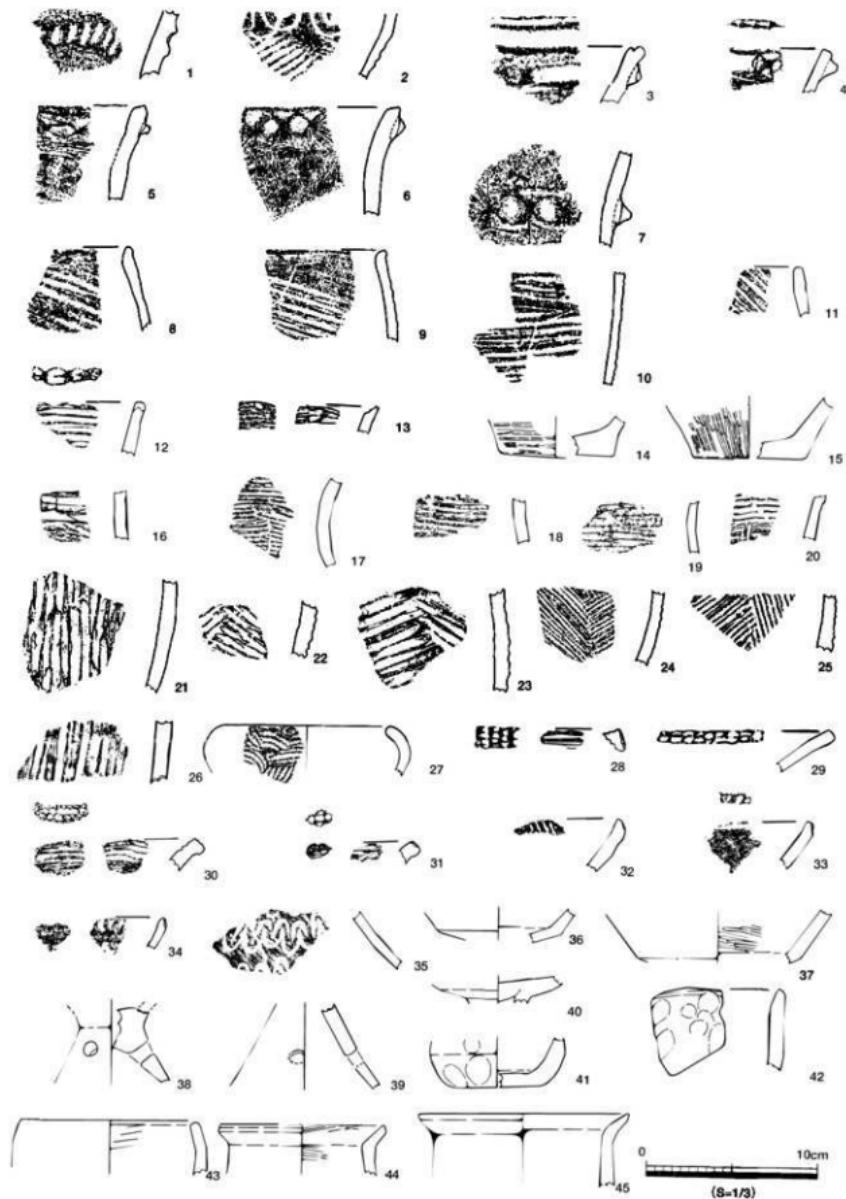


01溝 ① 10YR3/2 黒褐色 シルト細砂粒が均質に混入。
NA ② 2.5Y5/1 黒灰 細砂 ③ が積み重ねて混入。
③ 2.5Y3/2 黒褐色 シルト細砂粒が混入する。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
④ 10YR4/1 褐灰 粉砂 ⑤ との混土。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
⑤ 10YR3/1 黒シルト 細砂粒が混入する。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
層以下は台風時に堆積したため記載なし。

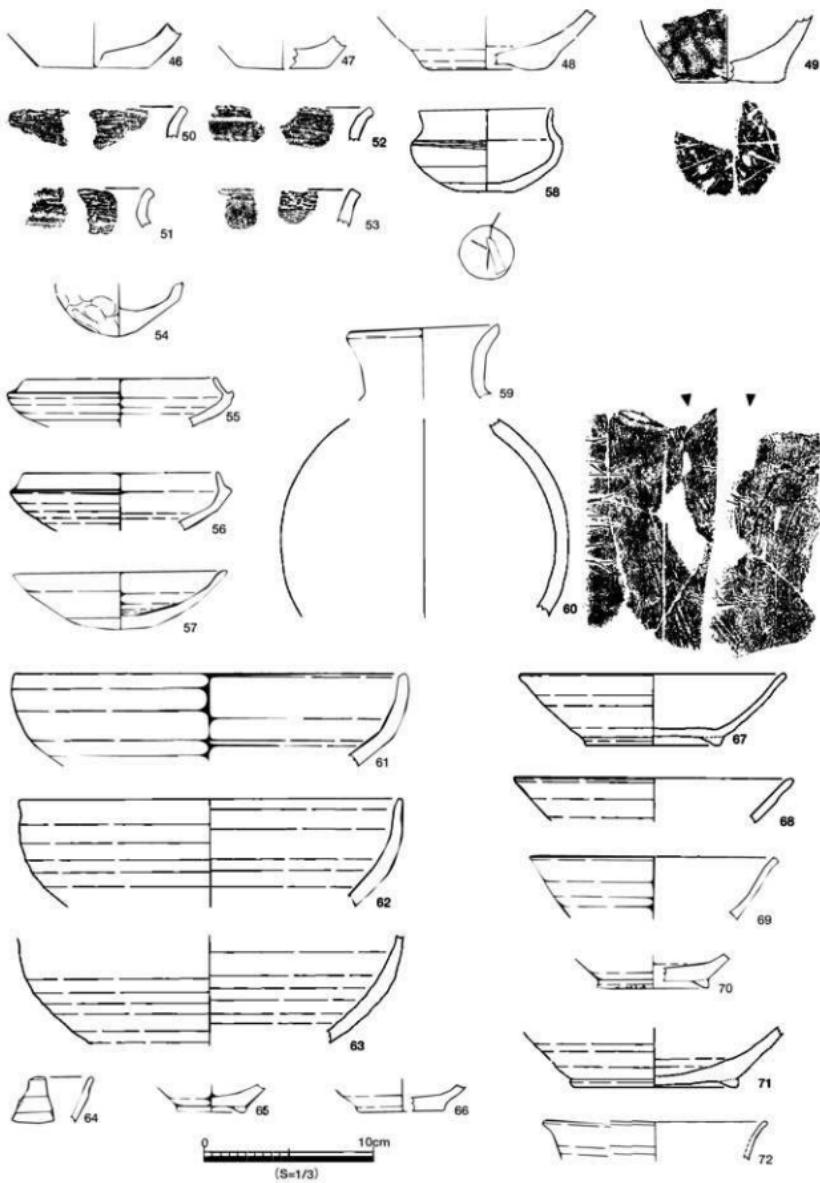
第8図 01溝、NR 平面図・断面図



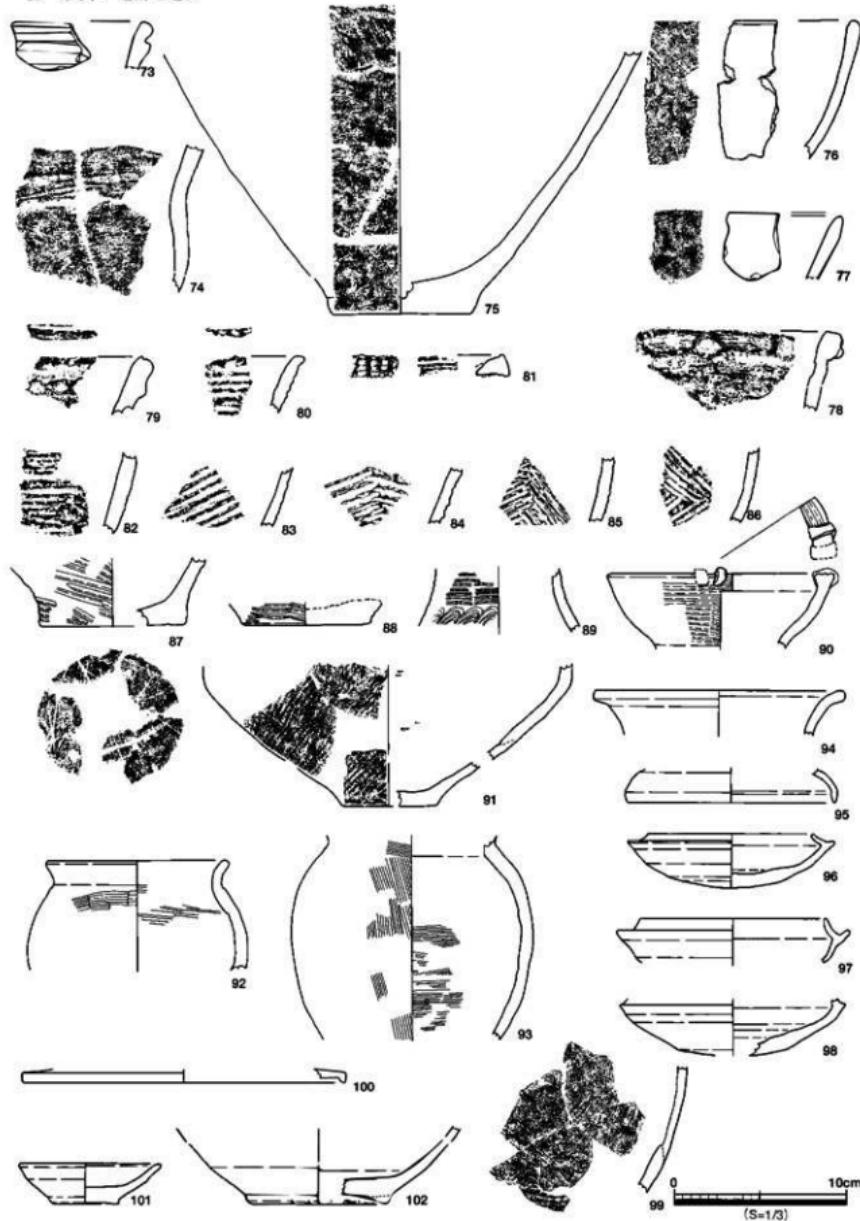
第9図 堤 平面図・断面図



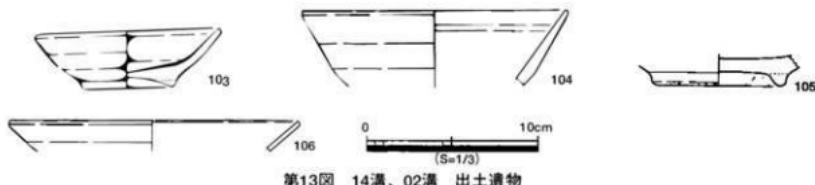
第10図 01溝 出土遺物①



第11図 01溝 出土遺物②



第12図 自然流路 出土遺物①



第13図 14溝、02溝 出土遺物

14溝（第7・8・13図）

4Dに位置し、自然流路直上で検出している。調査区の西側へ続く。上面は削平されている。01溝の南側で検出したため、01溝に平行する導水施設である可能性が高い。東側は擾乱を受けており、I区のSR1の付施設SW1-Nとは連続しないが、同じ性格のもので取水のための溝であると考えられる。幅1.4m、深さ0.18mで、自然流路を切っている。出土遺物は12世紀中頃の山茶碗（103～105）、14～15世紀の山茶碗（106）、土師器、縄文土器等である。

02溝（第13・14図）

4B、5A・Bに位置し、地山直上で検出した。幅0.26m、深さ0.08mで、東側は調査区外に続く。05溝に平行しているため、時期が同じである可能性が高い。14～15世紀の山茶碗が出土している。

03溝（第14図）

5B・C、4C・Dに位置し、地山直上で検出した。幅0.43m、深さ0.08mで、東側は調査区外に続く。遺物は出土していないが、05溝に平行しているため、時期が同じである可能性が高い。

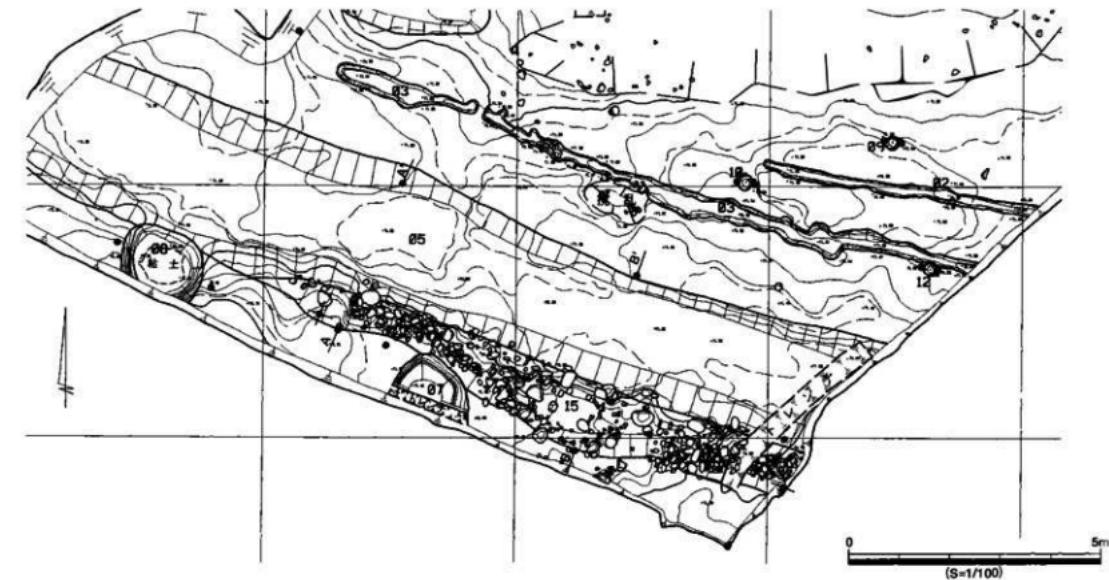
15溝（第14～17図）

5B～D、6B・Cに位置する。A・A'のあたりから05溝に切られて自然消滅しており、05溝よりも浅い。残存部で幅1.5m、長さ12m、深さ0.15mである。地山の礫のほとんどが被熱し、煤が付着している。被熱礫は散在している。05溝に切られている部分には礫も残存しない。

出土遺物から15溝は15世紀ごろのもので、05溝とは時期差がほとんどないと考えられる。掲載遺物は、弥生時代前期の土器（107）、8世紀の須恵器（108～110）、灰釉陶器（111）、12～13世紀の山茶碗（112～116）、14～15世紀の山茶碗（117～130）、時期不明国産白磁碗（131）、古瀬戸（132～143）、15世紀前半の陶器（132・133）、15世紀後半の陶器（136～140）、17世紀の天目茶碗（144）である。

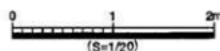
05溝（第14・18図）

5C～F、4D・Eに位置する。北西方向と南東方向の調査区外に続いている。幅2.4m、深さ0.3mで、北西方向に傾斜する。地山は拳大の礫が自然堆積する礫層で、礫が遺構全面に敷かれているように見える。礫の推積状況は、溝の北側半分に拳大以下的小形の石が密にみられ、南側半分には人頭大の川原石がある。南東隅はⅢ層中から検出はじめたが、中央付近から北西方向は地山で検出した。B-



① 10YR3/2 黄褐色 シルト 均質の砂物を含む。地山土を既に含む。しまりあり、粘性弱い。
 ② 10YR3/2 黄褐色 シルト 粒径mm、最大5cm程度のレンズ状に地山土がわざかに地被。しまりあり、粘性弱い。
 ③ 10YR3/2 黄褐色 シルト 地山土を斑状に(1)より若干多く含む。しまりややあり、粘性弱い。
 ④ 10YR4/2 黄褐色 シルト 地山土と砂物状の間隙部を含む。しまりあり、粘性弱い。

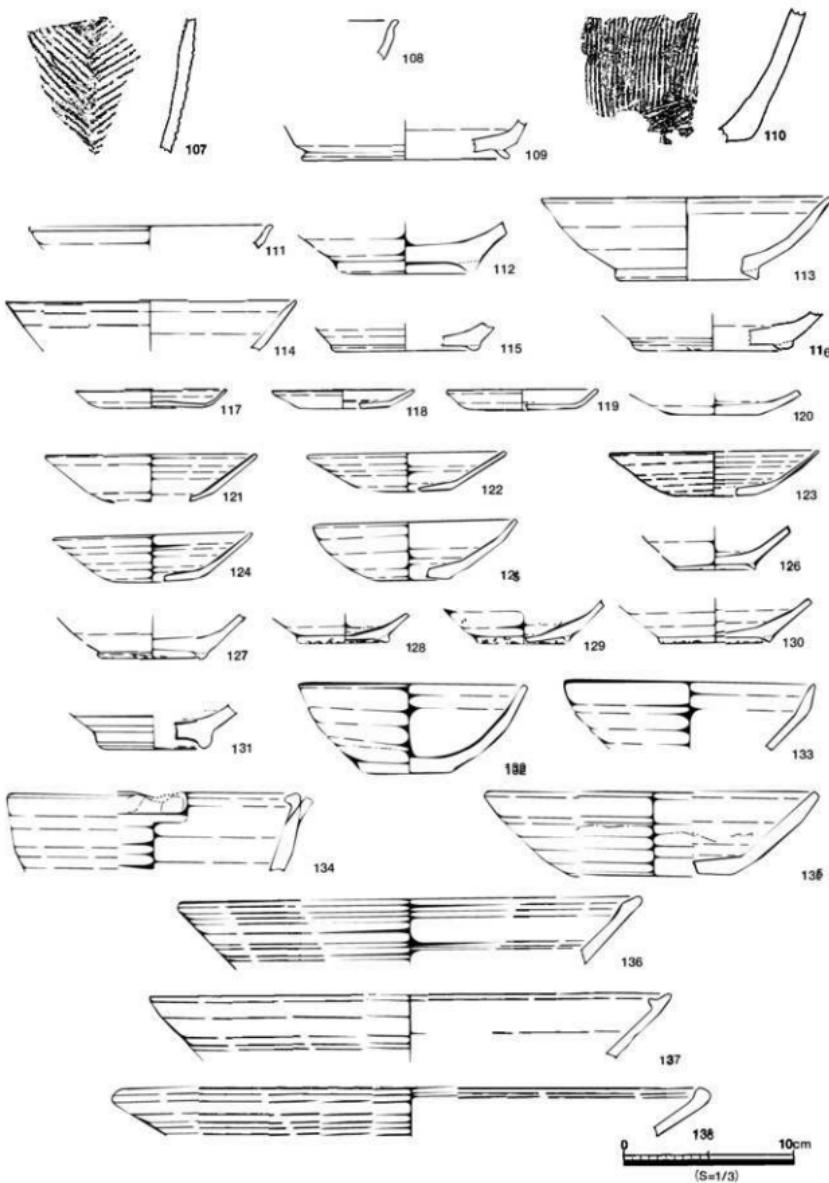
① 10YR3/2 黄褐色 シルト 均質の砂物を含む。地山土を既に含む。しまりあり、粘性弱い。
 ② 10YR3/2 黄褐色 シルト 粒径mm、最大5cm程度のレンズ状に地山土がわざかに地被。しまりあり、粘性弱い。
 ③ 10YR3/2 黄褐色 シルト 地山土を斑状に(1)より若干多く含む。しまりややあり、粘性弱い。
 ④ 10YR4/2 黄褐色 シルト 地山土と砂物状の間隙部を含む。しまりあり、粘性弱い。



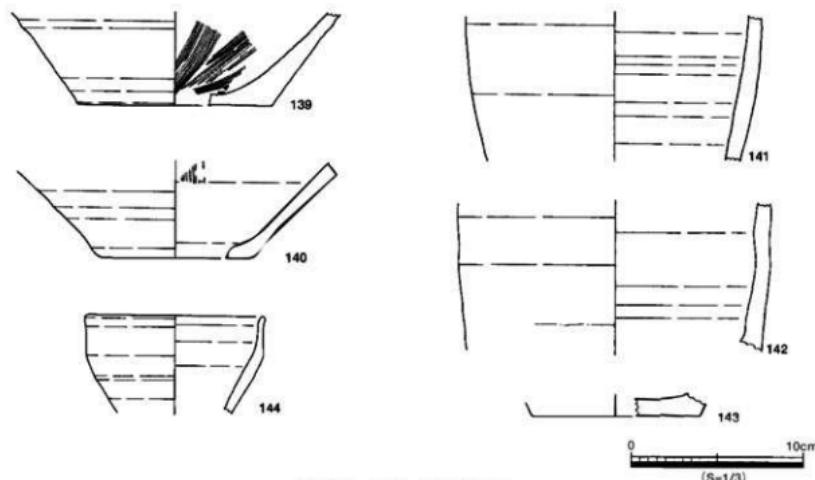
第14図 05・15溝 平面図・断面図



第15図 15溝 碣平面図



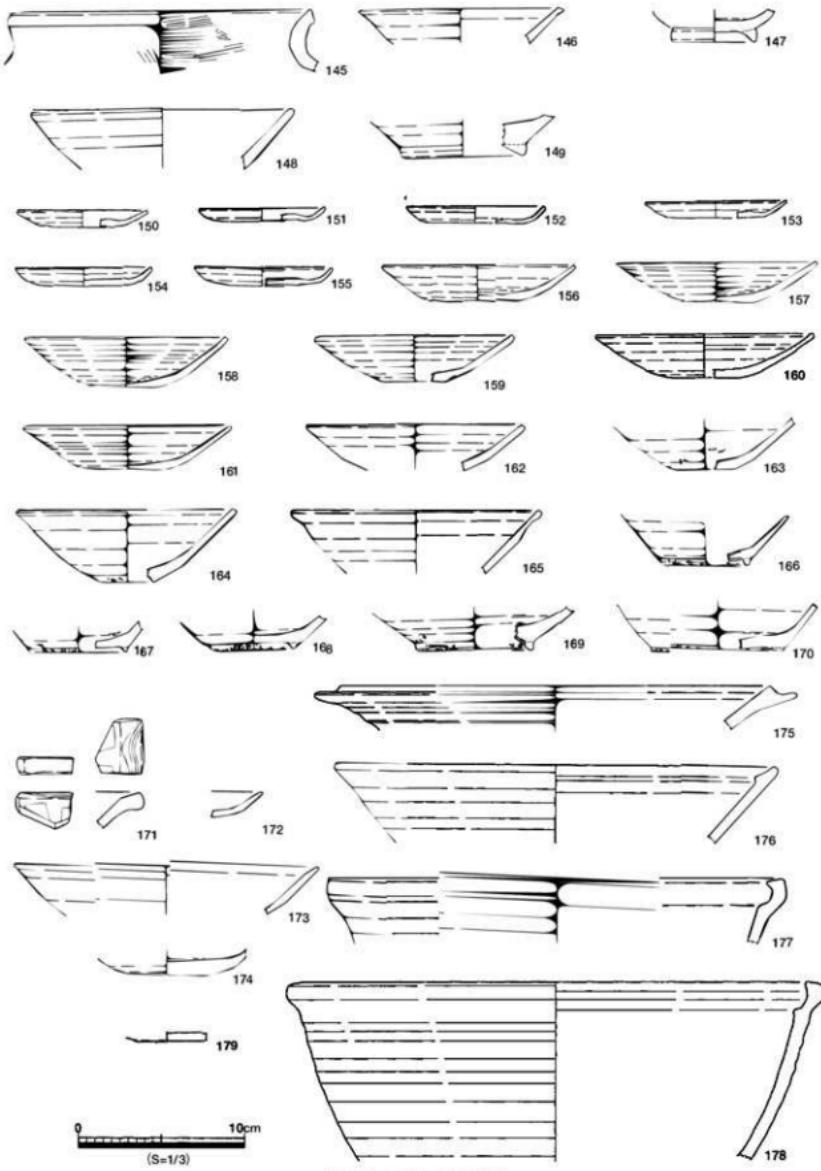
第16図 15溝 出土遺物①



第17図 15溝 出土遺物②

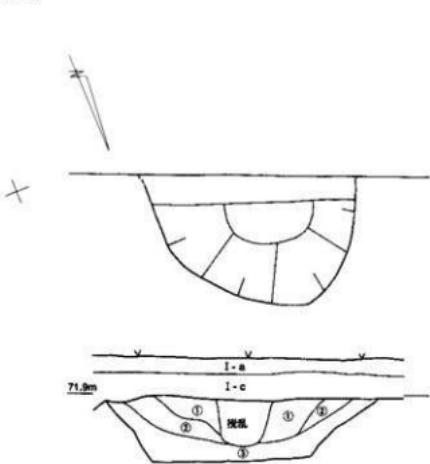
表2 遺構一覧

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	時期	出土遺物	備考
1 01溝	2B・C、3A～D	(13.0)	9.60	0.50	12～13世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	NRを利用してつくる。
2 墓	2・3B	(6.5)	1.5～3.0	0.50	12～13世紀		01溝に直交。01溝の1・2層に構築。
3 NR	2B・C、3A～D	(13.0)	10.00	1.80	7世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	01溝の下から検出。
4 14溝	4D	(2.7)	1.40	0.18	12～13世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	01溝に平行。
5 02溝	4B、5A・B	5.5	0.26	0.08	15世紀	山茶碗、縄文土器、土師器	05溝に平行。
6 03溝	5B・C、4C・D	13.2	0.43	0.08	15世紀		05溝に平行。
7 15溝	5B～D、6B・C	(11.5)	1.50	0.30	15世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	05溝に切られる。
8 05溝	5C～F、4D・E	(16.5)	3.60	0.40	15世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	15溝を切る。
9 07土坑	5D	2.10	(1.0)	0.50	近世	土師器、石器	15溝を切る。
10 08土坑	5E	1.70	(1.3)	0.50	近世	出土遺物無し。	05溝を切る。底部に粘土版。
11 09 小穴	4B	0.30	0.22	0.03	近世以降		
12 10 小穴	4・5C	0.28	0.28	0.06	近世以降		
13 12 小穴	5B	0.22	0.22	0.15	近世以降		03溝を切る。



第18図 05溝 出土遺物

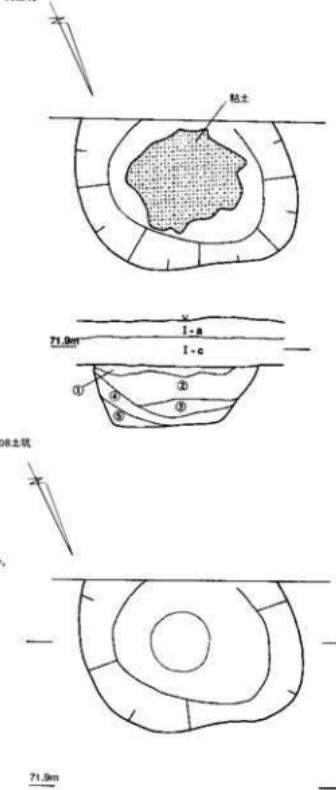
07土坑



耕作土 I-a 10YR3/3 黄褐色
耕作土 I-c 10YR3/2 黑褐色
① 10YR5/2 黄褐色
② 10YR4/2 黑褐色
③ 5Y4/2 黑オリーブ
擾乱

现代の農業物を含む。
均質の砂粒を含むしまりややあり、粘性弱い。
暗褐色土に堆山土が斑状に混じる。しまりあり、粘性弱い。
堆山土を主体とし堆積土を少含む。しまりややあり、粘性弱い。
現代の農業物、ヒニール片等を含む。

08土坑



耕作土 I-a 10YR3/3 黄褐色
耕作土 I-c 10YR3/2 黑褐色
① 10YR5/2 黄褐色
② 10YR5/2 黑褐色
③ 10YR5/2 黄褐色
④ 10YR5/2 黑褐色
⑤ 10YR4/2 黑褐色
粘土 5Y7/2 黑白

現代の農業物を含む。
堆山土が斑状に混じる。しまりあり、粘性弱い。
10cmの大いな小礫をまばらに含む。しまりややあり、粘性弱い。
10cmの大いな小礫をまばらに含む。堆山土をまばらに含む。
10cmの大いな小礫をまばらに含む。しまりややあり、粘性ややあり。
暗褐色土と堆山土が混在。2~3cmの小礫をまばらに含む。しまりややあり、粘性ややあり。

0 1 2m
(S=1/40)

第19図 07土坑、08土坑 平面図・断面図

B' と東壁の断面から溝が切り合っていることを確認した。やや浅い15溝を切って05溝がつくられている。

出土遺物は14~15世紀の山茶碗（150~170）が多く出土している。この他には11世紀後半~12世紀初頭の山茶碗（148・149）、12~13世紀の山茶碗、土師器皿（172・173）、古瀬戸（174~178）、常滑、須恵器、灰釉陶器（146・147）、7世紀の土師器（145）、縄文土器等がある。出土遺物から05溝は15溝と時期差がほとんどなく、15世紀の遺構と思われる。少数だが05溝から17世紀の遺物が出土している。

1層から出土した17Iは、14世紀の龍泉窯系の青磁盤で、野籠Iの1054（表探）と、野籠IIの328（1d出土）は同一個体の可能性が高く出土位置も近い。

07土坑（第19図）

5Dに位置し、調査区南側に続く。調査区の中では一番標高が高い所に位置する。地山面で検出しているが、地山は耕作で削平されている。断面中央の擾乱には現代の廃棄物が混入している。15溝を切っており、08土坑と性格が類似しているため、17世紀以降のものと考える。埋土は3層に分層され、下層にいくにつながって地山の砂が混じる。

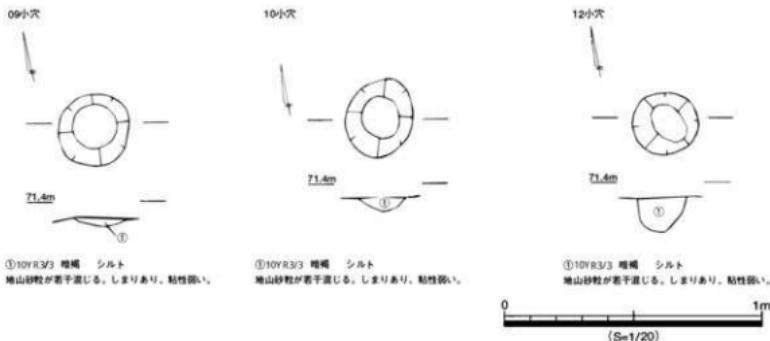
遺物は1・2層から縄文土器、土師器、フレイク、石鎌が出土している。

08土坑（第19図）

5Eに位置する。調査区の南側に続く。07土坑と同様に耕作で削平されている。底部には1m×0.7mの範囲で厚さ3cmの粘土が版状に貼ってある。遺物は出土していない。05溝を切っているため17世紀以降のものと考える。

09・10・12小穴（第6・14図）

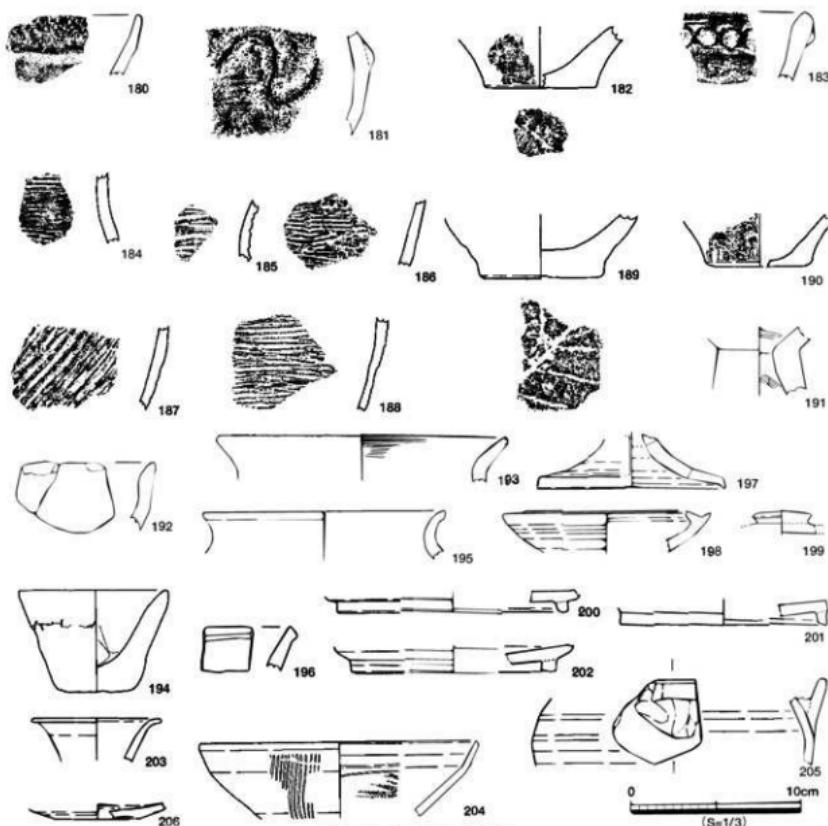
09小穴は4B、10小穴は4・5C、12小穴は5Bに位置する。これらの小穴は大きさや深さが類似することからほぼ同時期のものと考えられるが、12小穴が03溝を切っていることから近世以降の新しい時期のものと思われる。



第20図 P09、P10、P12 平面図・断面図

第3節 包含層出土遺物

包含層から出土した遺物は、破片数の多いものから、縄文時代中期の土器（180・181）、縄文時代晩期の土器、14～15世紀の山茶碗、土師器（192～196）、弥生時代前期～中期の土器（183～190）、6～8世紀の須恵器（197～202）、陶器（205・206）、土師器皿等である。輸入磁器は2点出土しており、204は12世紀の同安窯系青磁碗である。194の土師器鉢は輪積み痕が残り器壁も厚い。縄文土器、弥生土器、須恵器の量は01溝・自然流路に次いで多く出土しており、当調査区では遺構は検出されていないが、北からの流れ込みか、中世以降の搅乱にあった可能性が考えられる。



第21図 包含層出土遺物

野籠遺跡の剥片石器群について

1.はじめに

①属性表について

石器の属性表は石器の記述の基本となる台帳である。この属性表を分析することで、野籠遺跡の石材・器種・剥離技術の関係を明らかにできる。

本稿では図化対象とした石器について属性表を作成し、クロス集計を行うことで属性間の有意な結びつきを明らかにする手順をとる。属性表の項目で特に石器の製作技術に関係のある項目は次の通りである。

刃部属性：刃部の剥離技術の種類もしくは使用痕の有無を記入。

形態形成加工：石器の形態を形づくる際の剥離技術の種類を記入。

剥片剥離技術：剥片石器の素材剥片の剥離技術の種類を記入。

素材剥片形態：剥片石器の素材の種類を記入。石核の場合、この欄は剥離された剥片の種類を記入。

原石の種類：角礫・亜角礫・亜円礫・円礫のいずれに原石が相当するのかを記入。

②出土状態と分析の方針の決定

今回の調査分で出土した野籠遺跡の石器群は、中世・近世の遺物とともに出土したもののが殆どであり、中世・近世時代により攪乱された層に含まれていた石器である。このため、時期の判明する良好な出土状態の石器群は認められなかった。中には磨製石庖丁のように明らかに弥生時代の石器が含まれているが、その他の石器は縄文・弥生の石器が混在しているようである。ただし、混在している下呂石製の石器群の中に、過去分析した剥離技術とデザインのデータより数点は時期の推定が可能な石器が認められた。したがって、まず下呂石製の剥片石器群については剥離技術の記述を中心に分析を行った。その他の石器については器種ごとに所見を加えた。なお、磨製石庖丁については、使用痕分析を行い、石庖丁が実際に使用されたものであることを確認している（使用痕分析P42を参照）。

③石材の概要

野籠遺跡は剥片石器の素材が多く、石錐・石錐等小形の剥片石器については下呂石が大多数で、わずかに黒曜石とチャートを含む。打製石斧は合計20点出土しており、ホルンフェルス製・泥岩製である。打製石斧は遺跡内で未完成品が認められず遺跡外から持ち込まれていると考えられる。他に粘板岩・泥岩製の磨製石庖丁・大型直線刃石器等が出土している。

以下に、まず野籠遺跡の石材ごとの石器製作作業の概要をまとめてみた。

表3 石材別石器製作作業概要

	石材	量	石核	剥片剥離技術	石核消費の程度	製作される石器
大量母岩 搬入資料	下呂石	多	廓大の円礫	HxD中心 HD有り	低い	石錐・尖頭器状石器・ 削器等
少量母岩 搬入資料	チャート	極少	不明	不明	不明	石錐・削器
少量母岩 搬入資料	黒曜石	極少	3cm程度の亜角礫	作業なし	—	使用痕剥片
完成品搬入資料	ホルンフェルス・ 泥岩	少	なし	作業なし	—	打製石斧
完成品搬入資料	粘板岩・泥岩	極少	なし	作業なし	—	磨製石庖丁・大型直線 刃石器

完成品搬入資料：遺跡内での石器製作行為の認められない搬入された石器。

作業なし：遺跡内での剥片剥離作業の行為が認められない状態。

2. 分析用語について

本稿で使用する分析用語についてここで説明する。

① 剥離技術についての説明

剥離技術は右手の技術：ハンマーと身振り／左手の技術：素材の持ち方に分解できる（角張2002）。石器の製作工程段階に応じて、本稿では剥片剥離技術もしくは二次加工技術と呼んでいる。それらの内容は同じである。

ただし、剥離技術を理解するためには、亀裂の開始から始まり、末端へ力が抜けるまでの過程における剥片の形成過程を理解する必要がある。特に、剥離の発生部分（剥離開始部）の状態は非常に重要で、そこにはハンマー材質や先端形状を復原する情報が詰まっている。剥離の発生部分の型にはヘルツ型・楔型・曲げ型の三種があるが（第22図1、山田・志村1989）、このうちハンマー材質を判定する際に有効なのはヘルツ型と楔型である。より石核に対し変形しないハンマーを用いれば、ヘルツ型の発生部に形成されるコーンは明瞭にハンマー形状を残すように盛り上がる。この物理現象を利用して設定したのが、本稿のソフトハンマー（S）／ハードハンマー（H）の区別であり、あくまでコーンの形状と盛り上がり度合いから判定された区別である（第22図2～5、太田2003）。

そして変形しないハンマーの強い圧縮の力や先の尖るハンマーの場合は楔型を生ずる。なお、楔型は石核の縁辺から打点が離れている場合や石核の縁辺角が90度以上の場合、そして両極打撃の場合はヘルツ型よりも優勢に生じやすいことも指摘されている（山田・志村1989）。この物理現象を利用して本稿で設定したのが、ハードハンマーの垂直打撃（HvD）である。これはハンマーを石核の外側に抜くことで剥離を発生（ヘルツ型がここでは生じる）させる方法ではなく、薪割りのように打点の真下方向に亀裂を生じさせる打撃方法である。このため、ヘルツ型と同様もしくはそれ以上の高い圧縮力を剥離の際必要とする。以上までが、本稿でのハンマー材質の特定基準である。

次に、身振りの特定基準を説明する。石器製作づくりにおいて身振りは直接・間接・押圧の三種しかない（角張2002）。剥離面に残された属性からこれら身振りを特定するのに有効な属性を抽出することができれば、確率的に身振りの特定が可能となる。身振りの特定で注目すべき属性は、打点の位置（剥離面の並び）・打面の厚さ・剥離軸の軌跡・剥離面の規模の4つである（第22図6・7）。この属性からハンマーを直接振り下ろす直接打撃（D）、パンチを石器に予めあてがいパンチを打撃する間接打撃（I）、ハンマーを予めあてがい剥離する押圧剥離（P）を特定した。目視でハンマーを振り下ろせば力を多く加えることはできたとしても、ハンマーの当たる箇所はコントロールできずにバラバラとなる。剥離面は大きいものの不整形で、打点の位置はバラバラである。一方で予めパンチなりハンマーなりを石器に当てておけば、ねらった場所を剥離することが可能となる。その分、打点の位置や剥離面、そして打面の厚さは揃うことになる。ハンマーを予めあてている分、力は打点から真っ直ぐに抜けやすいため、剥離軸は直線状になりやすい。ここまでが、身振りの特定基準の概要であり、角張淳一氏（角張2002）に準拠している。

以上の基準でハンマー材質・身振りを特定し、属性表に記入する。

② 器種の用語について

ここでは本稿で使用する器種名のうち、特に必要なものを挙げている。これ以外の器種については標準的な器種名を使用した。



図22-1 剥離開始部のタイプ

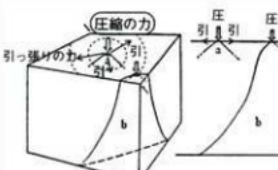
図22-2 コーンとバルブのタイプ
(剥離開始部のタイプがコーンタイプの場合)図22-3 「割れ円錐」のモデル
(松沢 1979を一部改変)

図22-4 かなづちをハンマーとして剥離した場合



図22-5 鹿角をハンマーとして剥離した場合

(*図22-4・5については、太田公彦氏（太田2001）の先行研究がある。)

第22図 剥離技術についての説明図

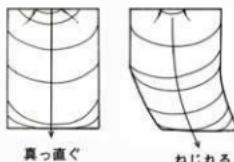


図22-6 剥離軸のタイプ

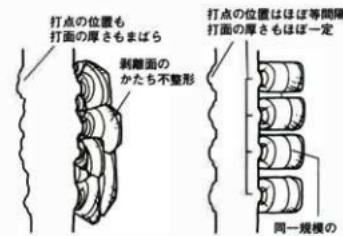


図22-7-1 直接打撃

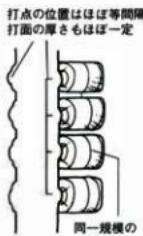


図22-7-2 間接打撃

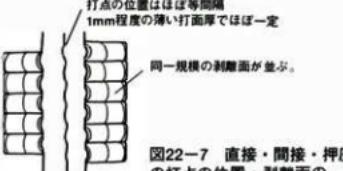


図22-7-3 押圧剥離

→石材は頁岩である。打点の直下に形成されたコーン（円錐）が明瞭である。鉄は、明らかに頁岩に対し変形しない材質である。この場合、石核内部により大きな圧縮の力を与えることができるため、明瞭なコーンを形成する。

石材は頁岩である。打点の直下に形成されたコーン（円錐）が不明瞭である。またリップが形成されている。鹿角が頁岩よりも変形する材質のため、鹿角ハンマー自身の変形のためにエネルギーの大半が使われてしまう。故に石核内部に充分な圧縮の力を加えることができず、コーンを明瞭に形成するまでに至らない。

HvD剥片：ハードハンマーの垂直打撃で剥離された剥片のことを指す。

矩形剥片：縦長・横長剥片のどちらにも属さないような剥片。

3. 下呂石製剥片石器群の分析

下呂石製剥片石器群の分析において説明する剥離技術には、(1) 目的的剥片を剥離するための剥離技術（剥片剥離技術）、(2) 石器の形態を形成するための剥離技術（形態形成加工の技術）、(3) 石器の刃部を形成するための剥離技術（刃部形成加工の技術）、の三種類がある。(2) と (3) はいわゆる二次加工技術と呼ばれる部類のものである。ここでは (1) の剥片剥離技術について説明する。

まず剥離技術を、前節の内容に従って設定する。記号は角張2002に準拠する。

HD：ハードハンマーの直接打撃である。

HvD：ハードハンマーの垂直打撃である。

SP：ソフトハンマーの押圧剥離である。

広SP：SPの幅の広いもので、剥離開始部の幅が4～6mm程度である（文章中図版1 P34参照）。

SP：硬いソフトハンマーの押圧剥離である。

広SP：SPの幅の広いもので、剥離開始部の幅が4～6mm程度である。

SD：ソフトハンマーの直接打撃である。

SD：硬いソフトハンマーの直接打撃である。

SI：ソフトハンマーの間接打撃である。

S1：硬いソフトハンマーの間接打撃である。

素刃：刃部加工のない場合に記入。

MF：使用により生じた剥離痕が認められる場合、記入。

①下呂石製剥片石器群の剥片剥離技術と二次加工技術について

〔原石・石核・両極石核について〕

野籠遺跡の下呂石の原石種は、確認できるものに限り卵大の円礫（第25図242・243）のみである。

石核（第24図230～233）・両極石核（第24・25図234～240）では11点中9点がハードハンマーの垂直打撃による剥片剥離技術で、2点がハードハンマーの直接打撃であった（表4）。野籠の剥片剥離技術はハードハンマーによる垂直打撃が卓越している状況が推定される。下呂石製剥片石器群では両極石器の多さが目立つが、これはハードハンマーの垂直打撃による剥片剥離が卓越していることの裏づけ現象であると考えられる。剥離された剥片の素材形態はハードハンマーの垂直打撃の剥片（HvD剥片）8点、ハードハンマーの直接打撃（HD）の矩形剥片2点で、やはりHvD剥片が卓越している（表5）。

〔二次加工のある石器について〕

さて、二次加工をもつ石器を見てみよう。刃部形成の加工は、ソフトハンマーの押圧剥離（SP）12点、硬いソフトハンマーの押圧剥離（SP）4点、幅広のソフトハンマーの押圧剥離（広SP）3点、広SP+SIが1点、広SP+SIが1点である。残りは特に加工のないものや直接打撃の単独加工である（表6）。形態形成の加工は、SPが12点、SPが4点、広SPが3点、SDが3点、なしが3点で、これらが主体となる（表7）。

では次に、二次加工の技術の刃部形成加工と形態形成加工の組み合わせを分析しよう（－の前が刃

部形成加工、後が形態形成加工。以下同じ)。集計の結果、a) SP-SPが12点、b) SP-S'Pが4点、c) 広SP-広SPが3点、d) 素刃+mf-S'Dが1点、e) S'D-S'Dが1点、f) 広SP+SI-広SP+SIが1点、g) 広SP+SI-広SP+SIが1点であった(表8)。このうち、a)～c)は凹基縫や有茎縫、そして石縫未成品等の二次加工技術である。d)とe)は削器の二次加工技術である。f)～g)は石縫の大形版である尖頭状石器の二次加工技術である。なお、形態形成加工にHvDが認められる石器(第23図226・227)は石縫の素材と推定されるものであり、二次加工に両極打撃が行われている例である。

さらに、形態形成加工と素材の剥片剥離技術の組み合わせを分析すると、29点17点が組み合わせ不明であるが、SP-Dが2点、広SP-Dが1点、SP-HvDが1点、広SP+SI-Dが1点、HvD-HvDが2点という結果を得た(表9)。つまり、石縫関連資料には直接打撃もしくは垂直打撃で剥離された素材剥片が使われているという傾向が判明し、これは先の石核・両極石核の剥片剥離技術と同じ傾向になった。

表4 器種と剥片剥離技術の関係

器種	剥片剥離技術				総計
	HD	HvD	適用外		
原石				3	3
石核	2	2			4
両極石核			7		7
総計	2	9	3		14

表5 器種と素材剥片形態の関係

器種	素材剥片形態(石核の場合、剥離される剥片形態)					総計
	HD	HvD剥片	矩形剥片	適用外	不明	
原石					3	3
石核	1	1	2			4
両極石核		6			1	7
総計	1	7	2	3	1	14

表6 石材・器種と刃部属性の関係

石材	器種	刃部属性								総計
		SP	広SP	広SP+SI	広SP+S'I	S'P	素刃+mf	S'D	なし	
チャート	凹基縫	1								1
	有茎縫	2								2
	削器						1			1
チャート 計		3					1			4
下呂石	凹基縫	4	1							5
	有茎縫	4								4
	石縫未成品	4	1				1			6
	尖頭器状石器		1			1				2
	尖頭器状石器未成品			1						1
	二次加工剥片					3			1	4
	削器							1	1	2
	使用痕剥片						1			1
	両極石器								2	2
	作業面再生剥片								1	1
	剥片								1	1
下呂石 計		12	3	1	1	4	2	1	5	29
黒曜石	使用痕剥片							1		1
黒曜石 計								1		1
総計		15	3	1	1	5	3	1	5	34

表7 石材・器種と形態形成加工の関係

		形態形成加工								
石材	器種	SP	広SP	広SP+SI	広S'P+S'I	S'P	S'D	HvD	なし	総計
チャート	円基盤		1							1
	有茎鏡		2							2
	削器								1	1
チャート 計		3							1	4
下呂石	円基盤	4	1							5
	有茎鏡	4								4
	石鏡未成品	4	1			1				6
	尖頭器状石器		1		1					2
	尖頭器状石器未成品			1						1
	二次加工剥片					3	1			4
	刮器						2			2
	使用痕剥片								1	1
	両極石器							2		2
	作業面再生剥片								1	1
	剥片								1	1
下呂石 計		12	3	1	1	4	3	2	3	29
黒曜石	使用痕剥片								1	1
黒曜石 計									1	1
総計		15	3	1	1	4	3	2	5	34

表8 石材・刃部属性と形態形成加工の関係

		形態形成加工								
石材	刃部属性	SP	広SP	広SP+SI	広S'P+S'I	S'P	S'D	HvD	なし	総計
チャート	SP		3							3
	S'P								1	1
チャート 計		3							1	4
下呂石	SP	12								12
	広SP		3							3
	広SP+SI			1						1
	S'P					4				4
	広S'P+S'I				1					1
	素刃+mf						1		1	2
	S'D						1			1
	なし							1	2	2
下呂石 計		12	3	1	1	4	3	2	3	29
黒曜石	素刃+mf								1	1
黒曜石 計									1	1
総計		15	3	1	1	4	3	2	5	34

表9 石材・形態形成加工と剥片剥離技術の関係

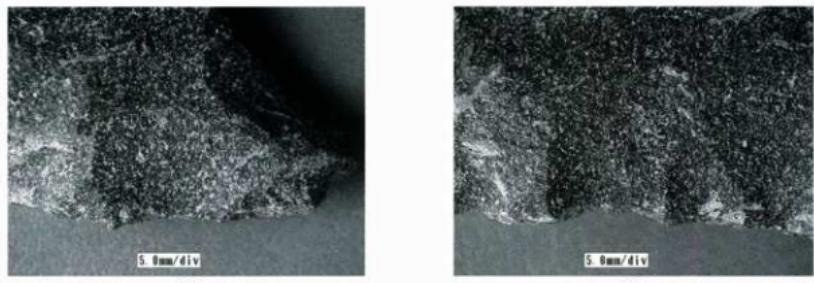
		剥片剥離技術				
石材	形態形成加工	D	HD	HvD	不明	総計
チャート	SP				1	3
	なし					1
チャート 計				1	3	4
下呂石	SP	2		1		9
	広SP	1			2	3
	広SP+SI	1				1
	広S'P+S'I				1	1
	S'P			1		3
	S'D	1	1			1
	HvD			2		2
	なし		1	1	1	3
下呂石 計		5	2	5	17	29
黒曜石	なし	1				1
黒曜石 計		1				1
総計		6	2	6	20	34

②下呂石製剥片石器群の二次加工技術とつくられる石器の関係

次に①で示した二次加工技術の特徴とつくられる石器の関係についてみてみることにする。SP-SPは12点中12点とも未成品を含む石鍛関連資料で認められる（第23図208～210、212、213など）。つまり、野籠遺跡では、押圧剥離が石鍛の剥離技術として強く結びついているのである。

二番目には、広SPについてみてみよう。広SP-広SPは3点（第28図268、269、276）とも凹基鍛や尖頭器状石器に認められるが、他方尖頭器状石器においては、広SP+SI-広SP+SI（第28図278）もしくは広SP+SI-広SP+SI（第28図277）のように広SP以外の二次加工技術と複合状態でも認められる。広SPは石鍛の大形化した尖頭器状石器にも結びつく傾向にあるといえる。

三番目には、SDが削器の刃部形成加工と形態形成加工に結びついていることが判明した（第23図218・219）。



文章中図版1 剥離開始部の幅の計測（幅広のソフトハンマーの押圧剥離）

③下呂石製剥片石器群のまとめ

野籠遺跡の下呂石製剥片石器群の所見をまとめると次のようになる。

- 1.まず剥片剥離には円窪が用いられ、ハードハンマーの垂直打撃（HvD）で分割したり、分割した剥片をHvDで剥離する。実際に得られる剥片はHvD剥片もしくはHDの矩形剥片に偏っている。
- 2.凹基鍛や有茎鍛およびその未成品の二次加工技術はSPを主体とする。
- 3.大形の石鍛である尖頭器状石器の二次加工技術は広SPを伴う複合技術に偏る。
- 4.2と3のうち、縄文晩期後半から弥生時代所産の石鍛は、有茎鍛の4点と広SPを伴う石鍛・尖頭器状石器5点の計9点と考えられる（第28図268・269・272～278）。剥離開始部の幅が5mm程度の幅広の押圧剥離は縄文晩期後半以降。弥生時代の中後半まで伊勢湾・東美濃～中部高地で認められる剥離技術である。なお、野籠遺跡と同様の幅広の押圧剥離か石鍛に認められる遺跡に愛知県牛牧遺跡が挙げられる。牛牧遺跡でも有茎鍛と凹基鍛が野籠遺跡と同様、混在している。
- 4.その他の石器器種の説明

ここでは下呂石製剥片石器群以外の器種について説明する。

①チャート製の剥片石器群

チャート製の剥片石器群では、凹基鍛1点・有茎鍛2点・削器1点が出土している。石鍛の二次加工技術はSPである。有茎鍛（第28図270・271）は縄文晩期後半～弥生時代所産のものと考えられる。

②磨製石庖丁・大形直線刃石器・打製石鎌状石器

形態的に整った磨製石庖丁が1点出土した（第28図279）。明らかに弥生時代所産のものであるが、時期を特定するまで至らなかった。紡錘形の石庖丁で器体は丁寧に研磨される。注目すべきは刃部の面と研ぎ出す研磨の線状痕が太くはっきりと認められる点である。線状痕については、かなり日の荒い砥石（荒砥）が使用されているようである（使用痕分析P42参照）。畿内や長野盆地の磨製石庖丁に野籠遺跡のようなはっきりとした線状痕を残す研磨痕はまず見られない。在地の研磨技術なのであろうか。今後追究すべき課題である。

なお、この磨製石庖丁の刃部付近にパッチ状にBタイプの使用痕光沢が認められた（使用痕分析P42参照）。イネ科植物を対象とした道具であったことがわかる。

また大形直線刃石器が1点出土している（第28図280）。粘板岩製で刃部をHDで加工している。風化のため使用痕等は認められなかった。磨製石庖丁とともにセットをなすものであろう。打製石鎌状の石器も1点出土している（第28図281）。刃部には摩耗・刃こぼれが認められるものの、風化のため使用痕光沢を特定するまでには至らなかった（使用痕分析P42～43参照）。

③打製石斧

打製石斧は19点の完成品と1点の未完成品が出土している（第26図・第27図262・263）。石材別にすると、ホルンフェルス製14点、泥岩製6点である。全て縄文時代所産の打製石斧と思われ、弥生時代に特徴的な石鋤は認められなかった。

打製石斧の形態形成加工はハードハンマーの直接打撃（HD）かもしくはそれに類するもので、打製石斧の両側面および刃部が形成される。素材には横長剥片が用いられる割合が高い。

刃部には摩耗・刃こぼれが認められるものの、明瞭な土ずれ痕はあまり認められなかった。このような特徴は縄文中期前半期の打製石斧に特徴的な使用痕の付き方で、縄文中期後半の加曾利E式以降の打製石斧に明瞭な土ずれ痕が認められることと対照的である（池谷勝典氏の御教示による）。

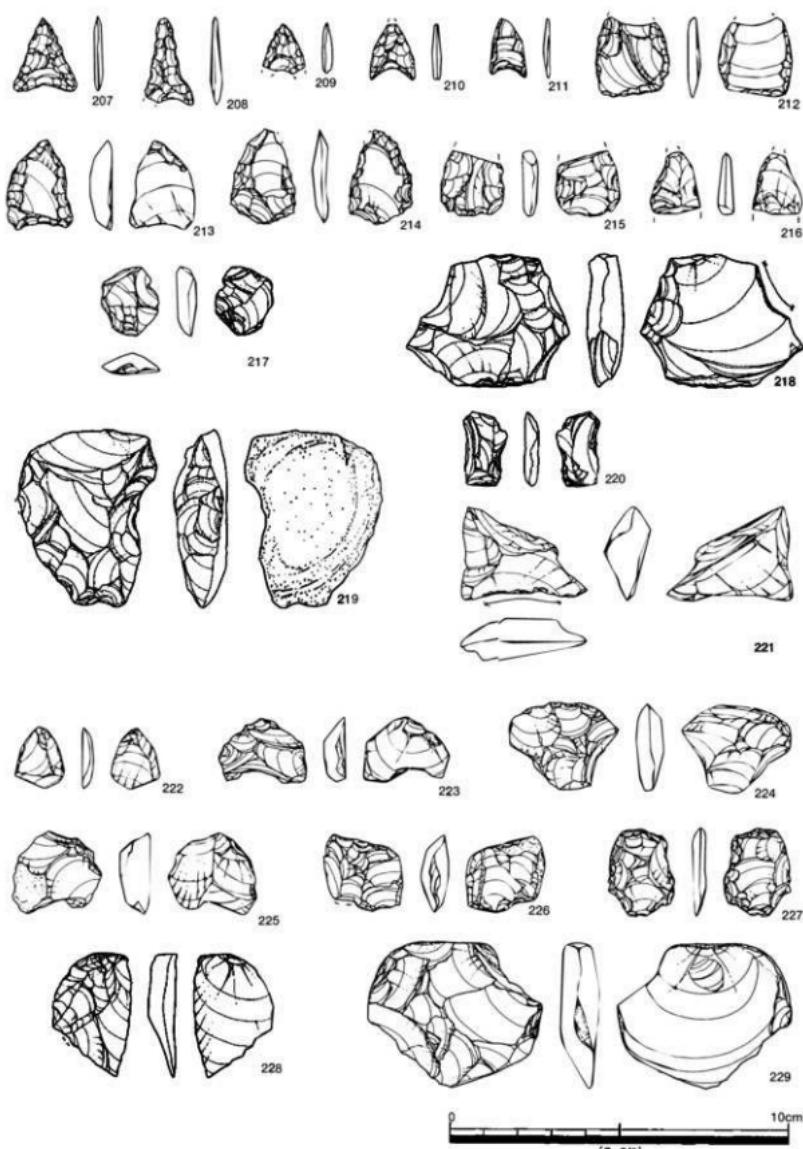
④敲石

敲石が2点出土している。うち第27図267の敲石は石器製作の「ハンマー」ともいべき重厚感のある敲石である。このような敲石は大形の剥片石器の素材を石核から剥がすのに最適である。267の石器を手で持ち使用することを想像するのは難しく、斧のように木の柄に装着して使用したと考えられる。裏面の器体中央左の剥離は、柄との装着の固定のためであろうか。また表面の敲打痕は柄に装着するときのクサビ止めの跡の可能性がある。

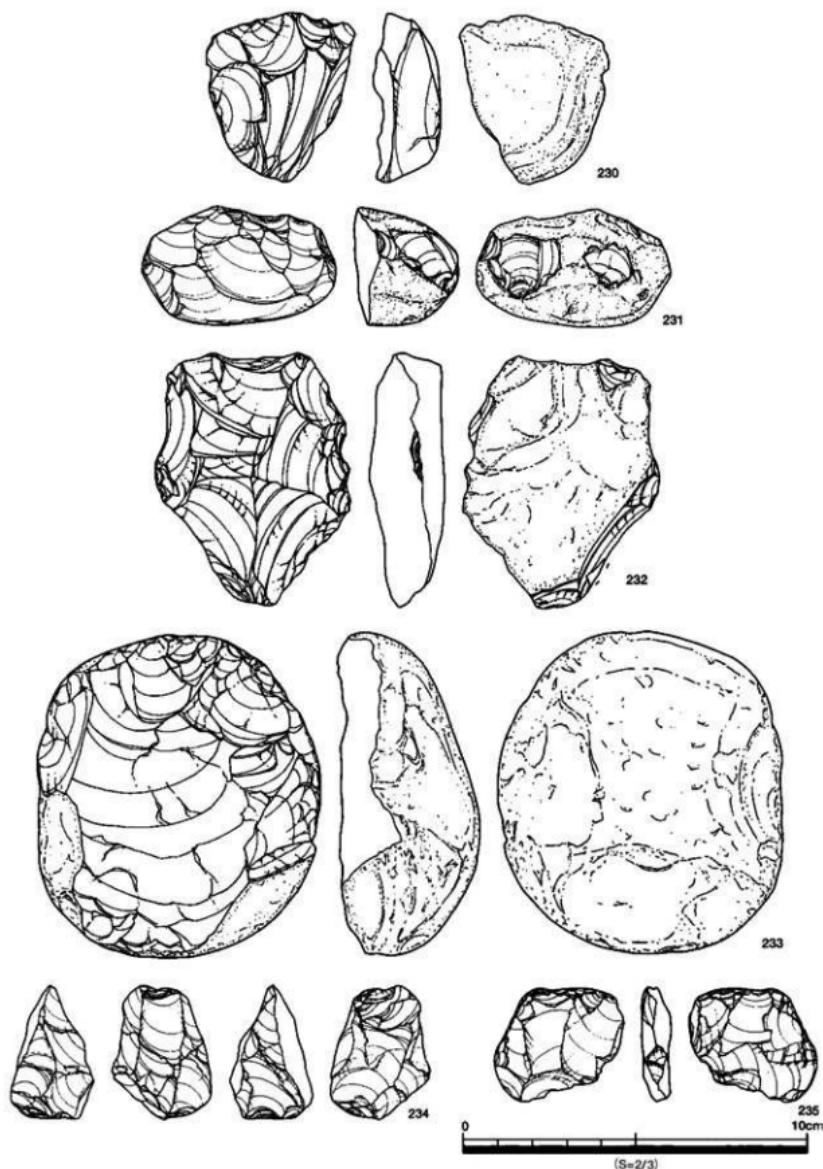
5.まとめ

今回の調査で出土した石器には、磨製石庖丁のように明らかに弥生時代の石器が出土した。この磨製石庖丁に伴う土器の時期については明らかにできなかったが、野籠I・IIの調査分では弥生中期前半の土器がまとめて出土しており、この土器との関連性が注目される。また、使用痕光沢が確認できたことも大きな成果であった。今後磨製石庖丁の位置づけに果たす使用痕分析の役割は大きいであろう。大型直線刃石器や打製石鎌状石器については、風化のため使用痕光沢を特定できるまで至らなかつたが、磨製石庖丁とセット関係をなすのか、興味深い。

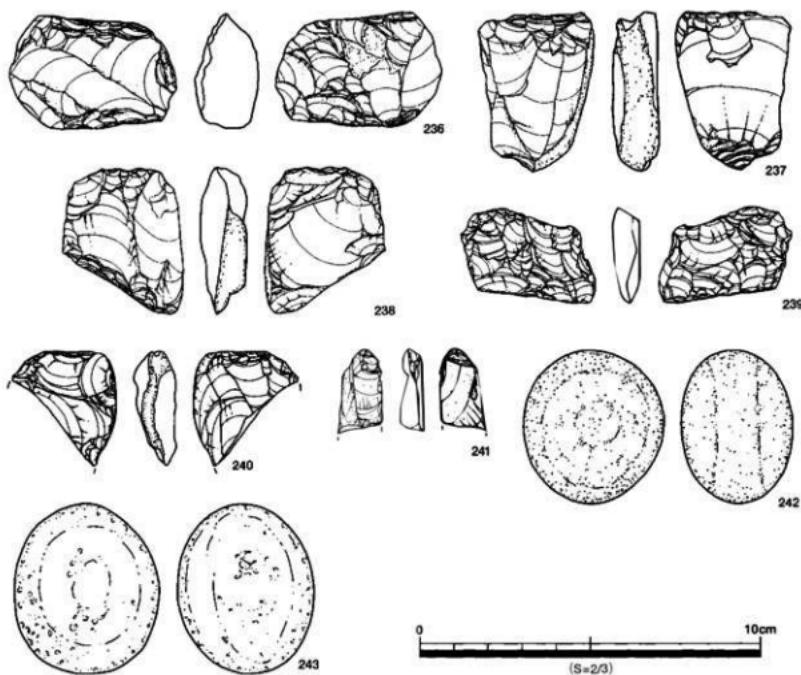
また、今回の調査分で、幅の広い押圧剥離面を留める石鋤や尖頭器状石器を確認した。この幅の広い押圧剥離をもつ石鋤類は、縄文晩期後半から弥生中期の伊勢湾・東濃～中部高地に分布している。



第23図 包含層出土石器（1）



第24図 包含層 出土石器 (2)



第25図 包含層 出土石器（3）

時期をある程度特定できる石錐として今後注目する必要がある。

なお弥生前期から中期前半期の中部日本各地には、石錐などの晩期以来の小形剥片石器に大陸系磨製石器を単品で伴うという例が認められる。今回調査分の野籠遺跡の石器組成はその点、弥生前期～中期前半期の組成に似ている。仮に今回出土の磨製石庖丁も弥生前期～中期前半に伴うものならば、収穫具として疑いようのない事例となるわけであり、伊勢湾～東美濃の弥生時代文化を考える上で重要な事例である。

（馬場伸一郎）

註)

1. 愛知県埋蔵文化財センター2001『牛牧遺跡』

引用文献

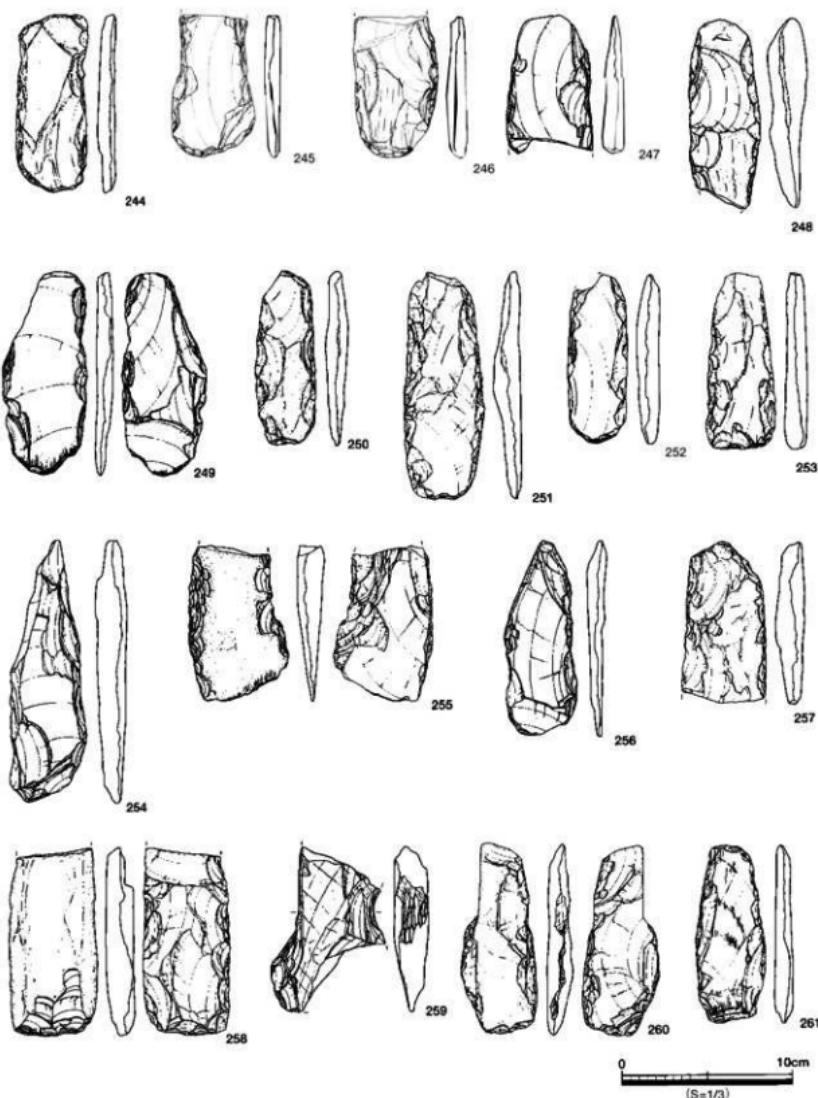
太田公彦2003「ハンマーと石材の関係について」『アルカ研究論集』第1号

角張淳一2002「石器研究の展望」『利根川』23

山田しょう・志村宗昭1989「石器の破壊力学（1）（2）」『旧石器考古学』38・39

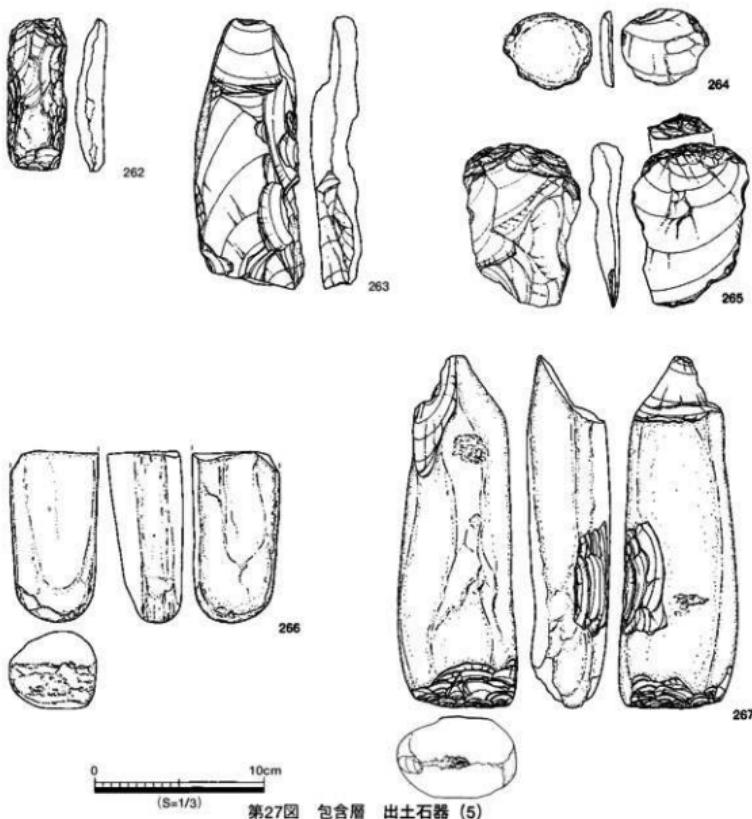
参考文献

馬場伸一郎2003「石材・技法・石器の種類からみた長野の弥生時代石器」『中部弥生時代研究会第7回例会発表要旨集』



第26図 包含層 出土石器 (4)

0 10cm
(S=1/3)



第27図 包含層 出土石器（5）

野竹遺跡出土石庖丁の使用痕分析

1.はじめに

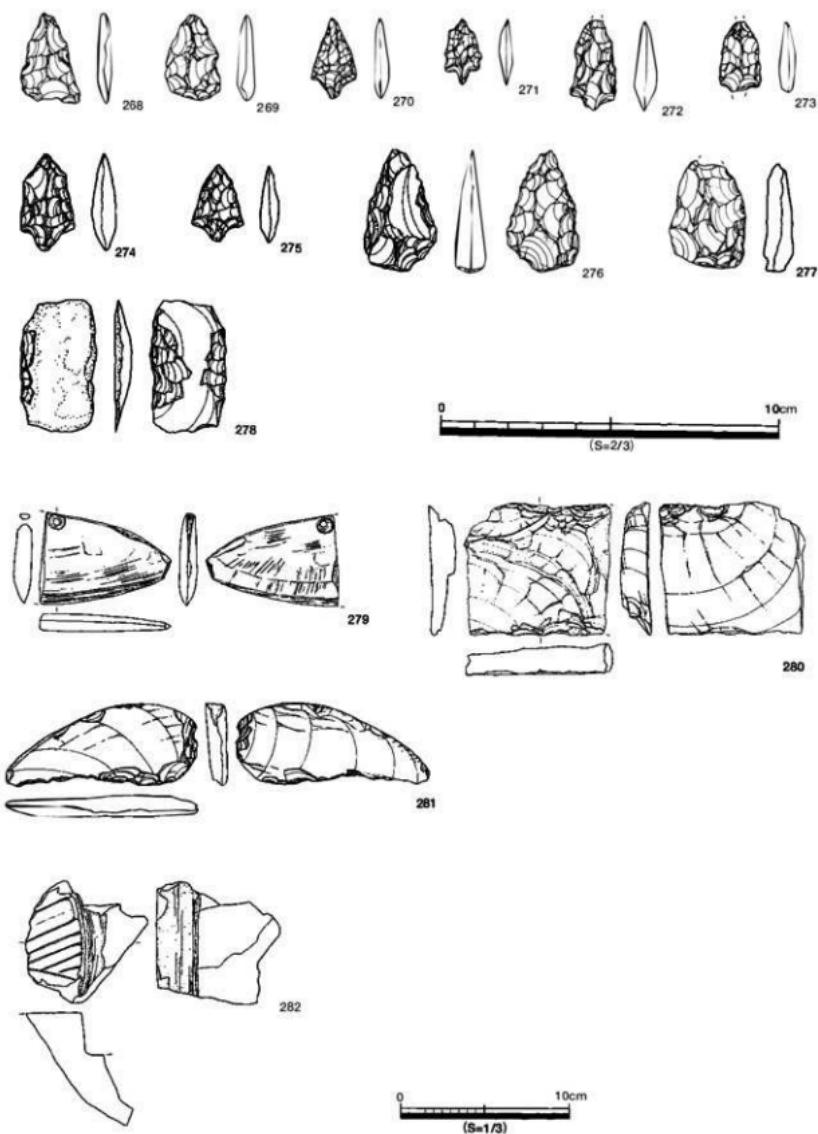
野竹遺跡出土の磨製石庖丁、打製石鎌状石器、大形直縁刃石器の使用痕分析を行った。

野竹遺跡は濃尾平野の北端付近の盆地内に位置する。南の平野部には、朝日遺跡などこの一帯を代表する弥生時代の環濠集落が分布する。朝日遺跡では磨製石庖丁と大形直縁刃石器が検出されており、磨製石庖丁をもちいた収穫技術・伝統があったことが伺える。また野竹遺跡では、前の報告で穿孔のない磨製石庖丁が出土し、植物質で生じる光沢が確認されており、収穫具の存在を示唆した。さらに今回の調査で磨製石庖丁が出土したことは、濃尾平野一帯の収穫技術を考える上でも重要であるといえよう。

この報告では使用痕分析を通して、濃尾平野北端におけるこれら石器の機能について究明したい。

2.観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍



第28図 包含層出土、縄文時代後半～弥生時代の石器・その他

率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準によっている（梶原・阿子島 1981）。微小剥離痕の名称は、阿子島（阿子島 1981）を用いた。

3. 分析結果

磨製石庖丁は、中世の01溝の1層から出土しており、時期を特定することはできなかった。

〔形態〕 粘板岩製の磨製石庖丁である。中央部で破損しているが、全体の形態は残存部分から、紡錘形である。

〔刃部〕 刃部は両刃で、外湾の形態である。刃角は60から65度である。両面に顯著な研ぎ面がみられ、しのぎ部分が明瞭である。しのぎ部分の研磨は（文章中國版2・10）刃部に沿った方向にみられ、石庖丁体部を整形している研磨面（國版2・11）と比較して、深く粗い研磨面である。この部分には下で述べるように使用痕光沢は確認できないことから、刃部の研ぎ直しによる研磨と考えられる。そのため、刃部の研ぎ直しと体部の整形研磨の砥石が異なっていたと考えられる。

裏面の刃部縁辺に線状痕が縁辺に対して直交方向に走るのが確認できた（文章中國版2・9）。

〔穿孔部分〕 穿孔は、背部そばに1孔みられた。両面から穿孔している。表面には、背に向けて摩耗しているのが確認でき（文章中國版2・7）、裏面では石器の内側方向に摩耗が伸びるのが確認できた（國版2・8）。穿孔部分に紐を掛けたさいに、表面に指をかけて紐を引っ張るようにもつため、表面穿孔部分の背側に、裏面穿孔部分の内側方向に摩耗したと考えられる。

〔使用痕〕

光沢：石庖丁の両面にBタイプ光沢がみられた（文章中國版2・24）。Bタイプ光沢は主に植物質の被加工物で生じる光沢であり、同種光沢が各地の遺跡で出土した石庖丁に確認されている。研磨が顯著にみられるしのぎ部分には光沢はみられなかった（國版2・1）。表面側は背部分の後にも光沢がみられたが（國版2・3）、裏面には背部分と紐孔部分近くにまでは光沢は広がっていない（國版2・5、6）。

線状痕：高倍率では確認できなかった。低倍率では、裏面側に縁辺に対して直交方向に走る線状痕（文章中國版2・9）がみられた。被加工物がこの部分に接触することで生じたと考えられる。

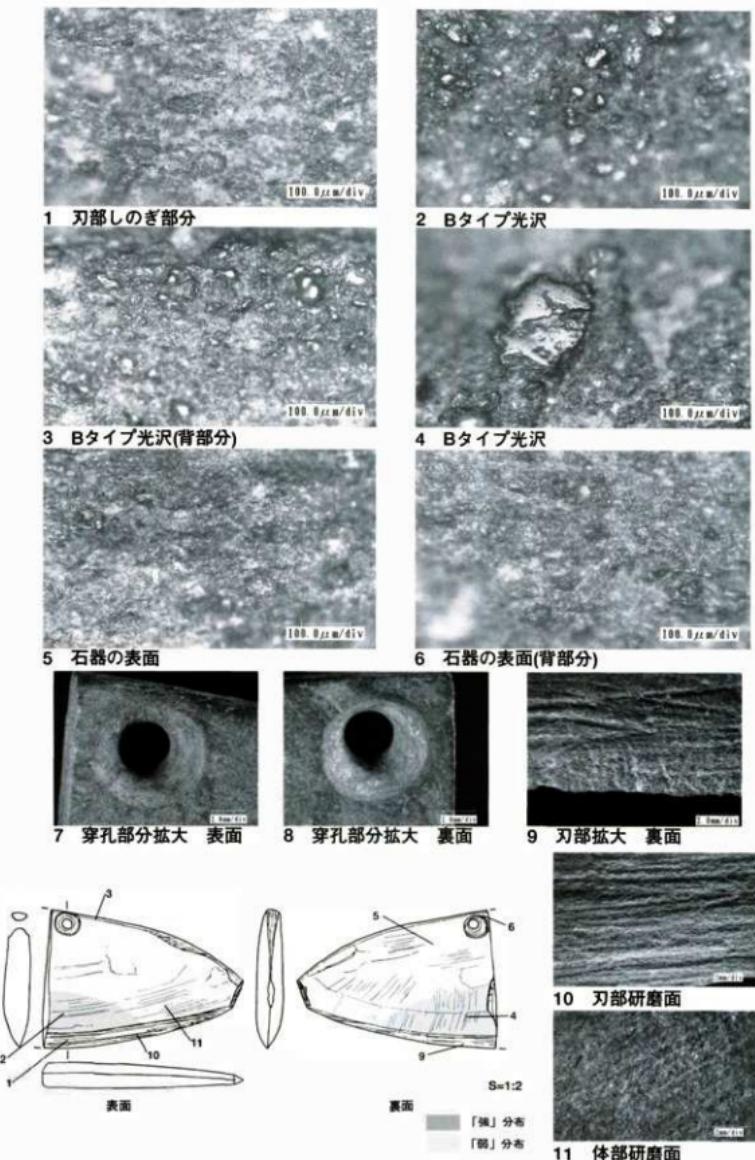
※推定される作業

穿孔部分の摩耗状況と、光沢の広がりから、植物質の被加工物が推定される。線状痕が直交方向にみられることから、被加工物を指と石庖丁の表面でおさえ、刃部を梃子として、つまみ上げるように石器を動かしたので、直交方向に線状痕が形成されたと推定される。

以上のことから、被加工物を摘みとるように使用したと考えられる。

また研磨面と光沢の分布からこの石庖丁が刃部の研ぎ直しがされていたことが判明した。かつて体部整形の研磨面と研ぎ面が異なり、用いた砥石が異なる可能性がある。このことから、石庖丁を製作する人間と、石庖丁を使用する人間の間で、異なる砥石を使用していたことが考えられる。石庖丁の製作と使用の間に技術的な差があり、石庖丁の流通などを考える上で重要である。

大形直線刃石器と打製石鎌状石器2点を同じく使用痕分析を試みた。共に中近世の溝から出土し、



文章中図版2 石庖丁の使用痕

遺物の時期を特定できなかった。

分析の結果、表面の風化が激しく光沢などは確認できなかった。

4.まとめ

野籠遺跡出土の石庖丁は、これまで確認されている石庖丁と同様な使用方法が確認された(池谷2001、須藤他 1984,96、石器使用痕研究会他編 2002、高橋 2002、松山 1992)。また、すでに野籠遺跡では、穿孔のない磨製石庖丁も出土し、同タイプの光沢が検出されており、石庖丁を伴う稲作文化が濃尾平野の北端に入り込んでいることがより確実なものとなった。

石庖丁はこれまでの研究から、根刈りに使用されたと考えられる「大型直縁刃石器」あるいは大形石庖丁とセット関係にあると考えられている(齊野 1993,1994)。野籠遺跡では打製石鎌状石器や「大型直縁刃石器」と考えられる石器も出土したが、石器表面が激しく風化しているため、同様な光沢は確認できなかった。出土位置の関係からも、今回の分析から、仙台平野や大阪平野などで確認されているセット関係は、この地域では確認できなかった。

石庖丁の研磨面において、刃部と体部の間に、砥石の異なりが確認された。このことは、石庖丁の製作と使用の間に、異なる研磨技術があったことを示唆し、石庖丁の製作から使用されるまでの流通を考える上でも重要である。

野籠遺跡で収穫具の存在を示唆することが明瞭となった。しかし、各石器の出土状況から、時期が特定できず、これらの石器がどの段階でこの地域に入り込んだか、収穫具にセット関係があるのかなど、不明な点も多い。

このようにこの地域における収穫具の時期や分布、流通など、解明されなければならない問題は山積みである。今後の課題としたい。(高橋 哲)

参考文献

- 阿子島香 1989 「石器の使用痕」考古学ライブラー-56 ニュー・サイエンス社
- 池谷勝典 2001 「荒田遺跡における石包丁の使用痕分析」「尼ヶ辻遺跡・荒田遺跡発掘調査報告書」和歌山県埋蔵文化財センター pp.157-162
- 梶原洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究-ボリッシュを中心とした機能推定の試み-(東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2)」「考古学雑誌」 67-1 pp.1-35
- 齊野裕彦 1993 「弥生時代の大型直縁刃石器(上)」「弥生文化博物館研究報告」2 pp.85-109
- 1994 「弥生時代の大型直縁刃石器(下)」「弥生文化博物館研究報告」3 pp.31-68
- 石器使用痕研究会・大阪府立弥生博物館編 2002 「弥生文化と石器使用痕研究-農耕に関わる石器の使用痕-」第7回石器使用痕研究会
- 須藤隆・阿子島香 1984 「下ノ内浦遺跡SK2土壤出土の石包丁」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第69集 pp.59-66
- 須藤隆・佐藤道子・高橋哲 1996 「中在家南遺跡出土弥生石器の分析」「中在家南遺跡他」第2分冊 分析・考察編 仙台市文化財調査報告書第213集 pp.167-179
- 高橋哲 2002 「栗木作遺跡の使用痕分析」「栗木作遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第90冊 pp.153-159
- 松山聰 1992 「石庖丁の使用痕」「大阪文化財研究」3 pp.1-10

第5章 まとめ

当遺跡は、木曾川の河岸段丘上に位置し、地山には木曾川が運んできた大量の砂が堆積している。遺跡の北と南では段丘面が異なっており、北が一段高い段丘面（L3）に位置する。段丘の比高差は約3mある。段丘の境には湧水地点があり、湧水に伴ってできた自然流路が西の加茂川に向かって流れている。遺跡のほぼ中央にある自然流路地点が一番低くなり、そこから南は木曾川の自然堤防に向かって地形は高くなっている。平成8・9年度にI区、平成11・12年度にII・III区・赤池4号古墳が調査され、当調査区（IV区）はI区の南西隅に隣接している。I区北側とIII区は上位段丘（L3）に位置し、I区南側・II区・IV区は低位段丘（L4）に位置する。

I～III区とIV区とは、出土遺物の時期等に多少の違いはみられるが、土器・石器ともにほぼ同じ特徴をもっている。特にI区とIV区は隣接することもあり、出土土器の時期幅が似ている。これに比べII区では、I区で確認されていない弥生時代中期後葉・古墳時代前期の遺物が出土している。石器では、I～IV区とともに下呂石の円礫の石核が多いという木曾川に近い遺跡の特徴が表れている。また、石礫の他には打製石斧の出土量が多く、自然流路周辺で狩猟・採集が行われていた様子がうかがわれる。穂摘み具の磨製石庖丁や、根株の刈り取りや除草に使う粗製剥片石器、有肩扁状石器、直縁刃石器の出土もI～IV区で共通点がみられ、付近に水田が広がることをうかがわせる。

当遺跡を南北方向に長く調査しており、遺構の分布範囲が時代別に移り変わっていることがわかる（第32図参照）。上位段丘に住居や屋敷が広がる時期は、弥生時代後期（堅穴住居3軒）・古墳時代後期（堅穴住居跡2軒）・中世前期（屋敷の区画溝）・中世後期（溝・掘立柱建物）である。一方、低位段丘に住居が広がる時期は、縄文時代中期末・弥生時代中期前葉・弥生時代終末期・古墳時代後期（堅穴住居跡29軒）・中世前期（大溝）・中世後期（溝・掘立柱建物、柵列）である。当遺跡の調査地点全体の遺構数では古墳時代後期に大きなピークが見られる。

IV区で検出された遺構は古墳時代後期（自然流路1条）、中世前期（溝2条）、中世後期（溝4条）と近世（土坑2基、ピット3基）であるが、自然流路からはI～III区の出土状況と同じく、縄文時代中期～古墳時代後期の土器が出土しており、北の居住域からの流れ込みが堆積したものと思われる。以下に遺物の詳細を述べる。

縄文時代～弥生時代

縄文土器は出土土器のうちの35%（破片総数）をしめる。縄文時代中期が21点（212g）、晩期が22点（874g）である。弥生前期～中期の土器（条痕文系の土器）は全体の13%である。縄文晩期～弥生時代前期の土器は、破片数が縄文時代中期と差がみられないのにかかわらず質が多いことから、破片が大きくなり残りが良いといえる。この時期の土器・石器の出土分布状況を見ると、第30図より01溝・05溝・15溝・D3から出土している。第29図からは、遺物の分布を東から投影しているため地形の傾斜を念頭に置く必要はあるが、01溝よりも自然流路中心に遺物が出土していることがわかる。おそらく北の居住域からの流れ込みと思われる。縄文晩期～弥生中期に出土量のピークがみられ、石器もほぼ同時期のものが多く出土している。剥片石器の石材のほとんどは下呂石で、製品は石礫が多

くをしめている。石鎚の次に多く出土しているのは打製石斧で、狩猟・採集の道具が全体をしめているようである。また、磨製石庖丁・大型直線刃石器・打製石鎌状石器などの収穫具が少数であるが出土している。

古墳時代～奈良時代

土師器は全体の19%、須恵器は5%である。須恵器は6～8世紀の時期である。7世紀の壺身・短頸壺・提瓶は、赤池4号古墳と時期を同じくする古墳が近くに存在して混入したものか、北側にある居住域から流れ込んだものと思われる。消失した赤池古墳群にも関連するものと思われる。8世紀の須恵器には鉄鉢がみられる。出土分布状況を見ると01溝・05溝から出土しているため、上流からの流れ込みや、溝をつくった際の搅乱と思われる。

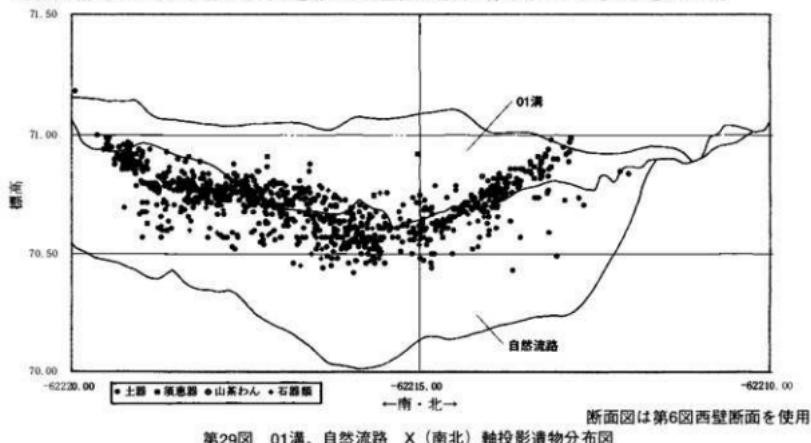
中世前期

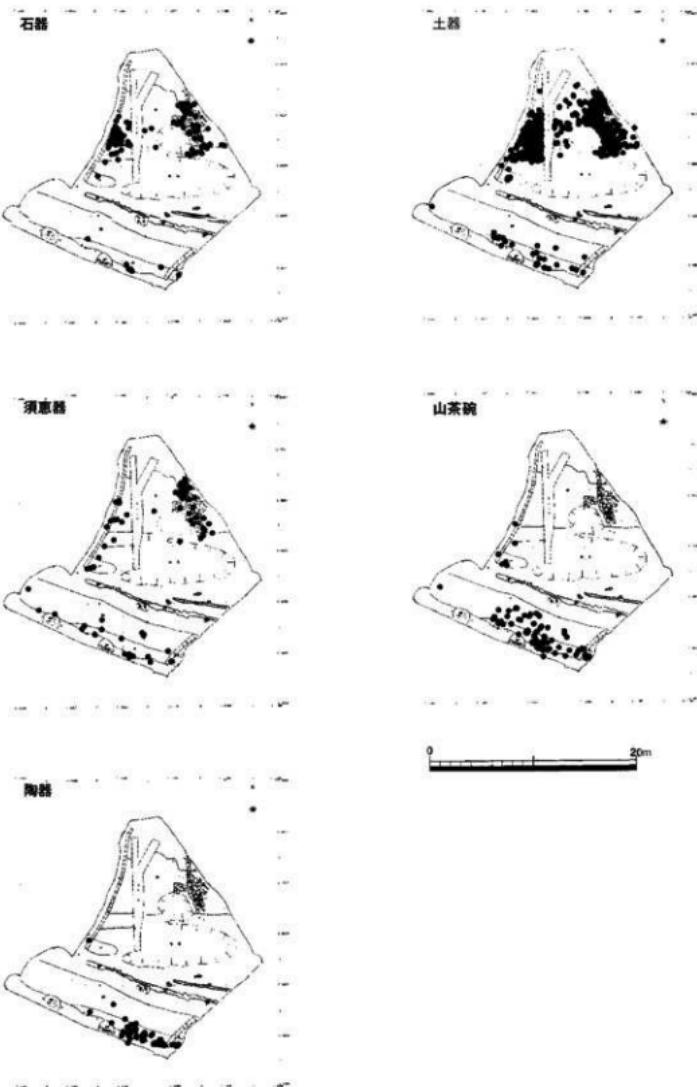
調査区は南から北に傾斜しており、01溝はIV区の一番低い所にある自然流路を利用してつくられている。01溝は堰を伴っており、時期は溝から出土している山茶碗と、東に続くI区の調査結果を合わせて考えると12～13世紀である。I区とIV区の溝を図面上でつなげてみると、I区からの流れがIV区ではややかわるようである。溝全体でみると、3つの堰を伴い、上流の堰の川上には粘土と敷石の施設がみられ、堰で水をためて生産域に水を流す施設であったようである。I区から続くと思われる導水施設は当調査区では搅乱をうけているため不明である。

中世後期

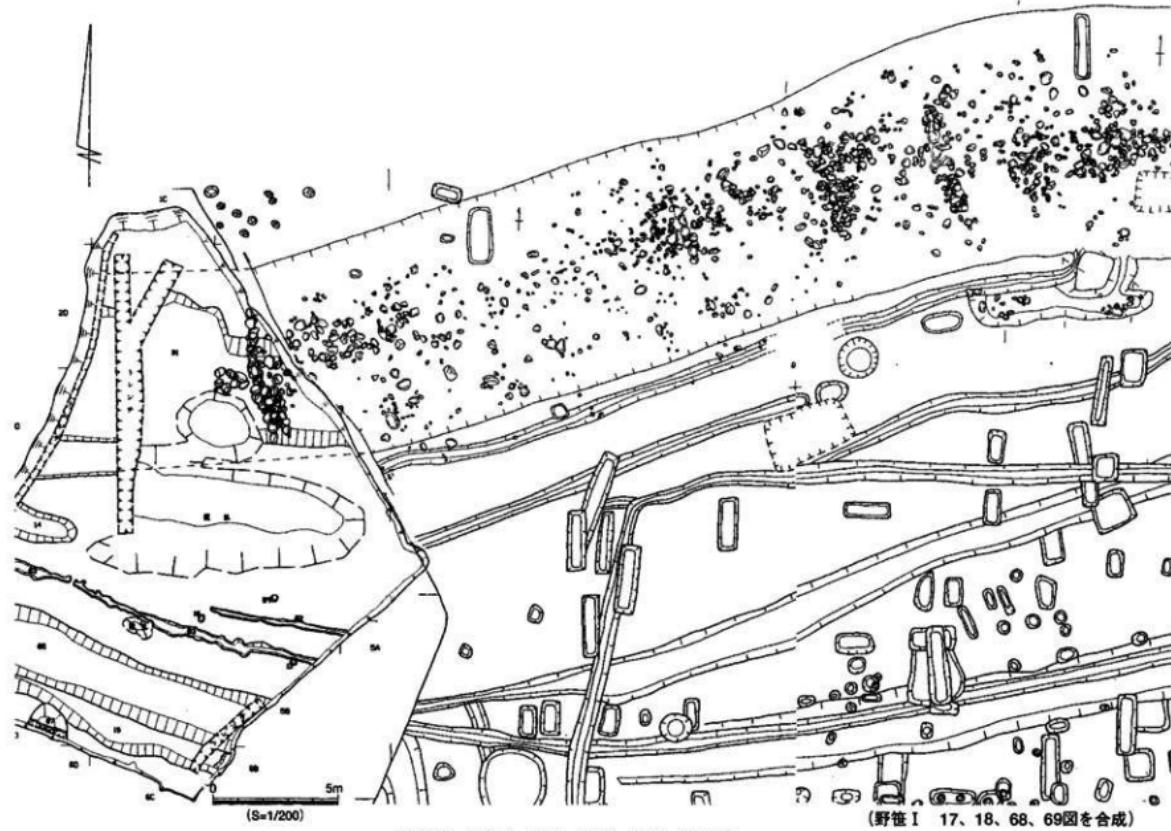
地形が一番高い位置には15世紀の溝（05・15溝）を検出しており、I区の遺構図とのつながりから、方形の区画溝か東流する溝とつながる可能性がある。05溝は15溝を切っており、15溝からは多くの陶器と礫が出土しているが、05溝からは陶器と礫がほとんど出土していない。出土遺物からは2条の溝に時期差がありみられない。05溝からは煮沸具が出土しており、付近に居住域が広がると思われる。また、05溝の埋土から出土した14世紀の龍泉窯系青磁盤（171）は、I区（表探）とII区（05溝より約48m南東方向）でも出土しており、同一個体と考えられる。

以上のことから、縄文時代～奈良時代の遺物が多量に出土しているが、確認された遺構は中世前期と後期の溝跡で、それ以前の時代の遺構は本調査区の北側に分布しているものと思われる。

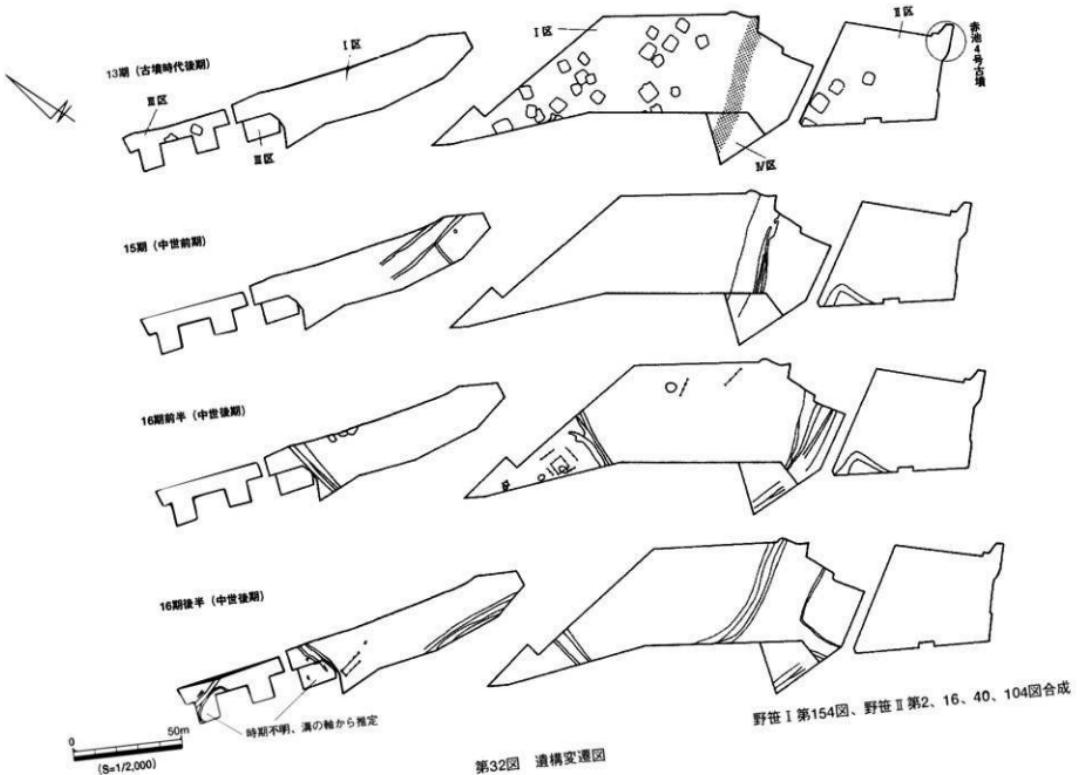




第30図 遺物種別散布状況図 (S=1/500)



第31図 野籠 I・IV区 01溝、05溝 平面図



第32図 遺構変遷図

表10 器種別土器組成表

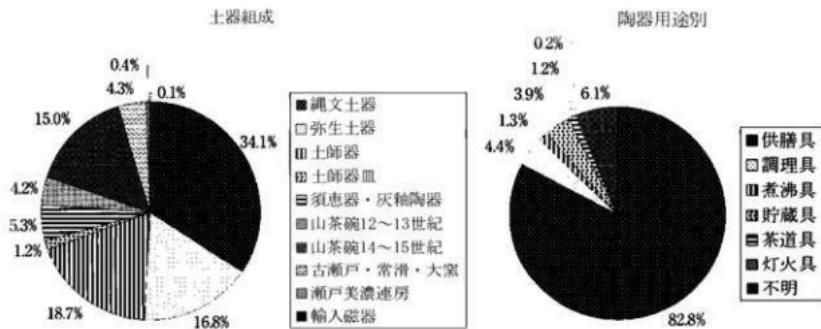
	01溝 破片数	自然 流路 破片数	02溝 破片数	05溝 破片数	07土坑 破片数	14溝 破片数	15溝 破片数	包含層 破片数	破片數計	比率%	口径残存 率個体数	底径残存 率個体数	残存率計+12
縄文土器中期	15	1			1	2			2	21	0.53		
縄文土器晚期	4	18								22	0.56		1.00
縄文土器	522	371	1	39	5	34	48	275	1,295	32.97		0.08	
弥生土器 前期前葉	19	6					1		1	27	0.69		
弥生土器 前期	6	19						1	1	27	0.69		1.80
弥生土器 前期~中期	190	123			10		9	12	87	431	10.97		
弥生土器 中期	11	35							1	47	1.20	1.23	0.60
弥生土器 後期	1									1	0.03		
弥生土器 弥生末~古墳初	97	14						6	10	127	3.23		
土師器古墳前期				1					1	2	0.05		
土師器(古墳)	45	7					1	1	16	70	1.78	0.26	2.58
土師器	373	109	1	19	1	11	12	135	661	16.83	0.91	2.00	
須恵器	78	28			20		2	7	70	205	5.22	2.48	3.82
灰釉陶器				3				1	1	5	0.13	0.29	1.00
土師器皿				21					26	47	1.20	0.60	
山茶碗 12~13世紀	28	3			20		8	19	84	162	4.12	1.38	9.56
山茶碗 14~15世紀	10		3	214				146	217	590	15.02	7.48	11.77
山茶碗				2						2	0.05		0.75
古瀬戸				14			47	10	71	1.81	0.86	1.94	
常滑陶器				9		1	12	12	34	0.86			
瀬戸美濃大窯				1			6	1	8	0.20	0.03	0.41	
瀬戸美濃連房				12					2	14	0.36		
時期不明陶器	2			11			3	39	55	1.40			
輸入磁器				1			1	2	4	0.10	0.10	0.34	
破片數計	1,401	734	5	398	8	67	322	993	3,928			15.62	37.65
比率%	35.67	18.69	0.13	10.13	0.2	1.71	8.2	25.28					

表11 用途別陶器、磁器組成表(中近世)

	01溝 破片数	自然 流路 破片数	02溝 破片数	05溝 破片数	07土坑 破片数	14溝 破片数	15溝 破片数	包含層 破片数	破片數計	比率%	
供膳具	38	3	3	259		8	178	249	738	82.83	碗・皿・蓋・盤・土師器皿
調理具	1			7		1	20	10	39	4.38	鉢・擂鉢・片口鉢・卸皿
煮沸具				9			1	2	12	1.35	鍋・釜
貯蔵具	1			9			13	12	35	3.93	甕・壺・瓶・徳利
茶道具				2			2	7	11	1.23	天目茶碗・湯呑
灯火具				1				1	2	0.22	灯明皿・重圓皿
不明				16			15	23	54	6.06	
破片數計	40	3	3	303	0	9	229	304	891		
比率%	4.49	0.34	0.34	34.01	0	1.01	25.70	34.12			

表12 器種別土器組成表(質量)

	01溝 質量(g)	自然流路 質量(g)	02溝 質量(g)	05溝 質量(g)	07土坑 質量(g)	14溝 質量(g)	15溝 質量(g)	包含層 質量(g)	質量計(g)	比率%	
縄文土器中期	118.1	14.6		3.0	7.1			68.9	211.7	0.67	
縄文土器晚期	38.2	835.9							874.1	2.77	
縄文土器	2,864.7	1,766.6	7.8	253.5	47.8	141.5	287.4	1,910.8	7,280.1	23.08	
弥生土器 前期	252.2	87.7				1.6		25.7	367.2	1.16	
弥生土器 初期	145.0	293.5					30.3	121.7	590.5	1.87	
弥生土器 初期～中期	1243.8	571.5		63.3		32.7	58.6	835.9	2,805.8	8.89	
弥生土器 中期	73.9	274.0						24.2	372.1	1.18	
弥生土器 後期	7.0								7.0	0.02	
弥生土器 弥生末～古墳期	495.2	61.3					9.6	74.8	640.9	2.03	
土師器古墳前期				2.5				2.5	5.0	0.02	
土師器(古墳)	738.4	39.7				6.3	6.6	277	1,068.0	3.39	
土師器	2,126.3	528.6	1.2	121.6	12.7	45.9	38.5	1,073.6	3,948.4	12.52	
須恵器	1,555.7	333.3			220.4		36.5	154.5	779.4	3,079.8	9.76
灰釉陶器				48.2			1.7	6.6	56.5	0.18	
土師器皿				76.7				74.9	151.6	0.48	
山茶碗 12～13世紀	449.4	121.0			202.5		124.4	377.6	1,322.1	2,597.0	8.23
山茶碗 14～15世紀	21.0			6.9	1,338.7			822.3	874.1	3,063.0	9.71
山茶碗					20.7				20.7	0.07	
古瀬戸				330.9			936.9	153.4	1,421.2	4.51	
常滑陶器				1,232.7		5.3	699.0	302.0	2,239.0	7.10	
瀬戸美濃大窯				8.9			21.4	6.3	36.6	0.12	
瀬戸美濃速房				76.3				37.0	113.3	0.36	
時期不明陶器	117.4			87.6			38.3	281.8	525.1	1.66	
輸入磁器				13.3			37.9	21.3	72.5	0.23	
質量計(g)	10,246.3	4,927.7	15.9	4,100.8	67.6	394.2	3,520.6	8,274	3,1547.1		
比率%	32.48	15.62	0.05	13.00	0.21	1.25	11.16	26.23			



第33図 土器組成・陶器用途別グラフ

表13 石器組成表

	場	01溝	自然流路	02溝	05溝	07土坑	14溝	15溝	包含層	点数計	比率%
剥片	8	116	120		10	1	12	15	362	644	81.42
尖頭器状石器		1							1	2	0.25
尖頭器状石器未製品		1								1	0.13
石鎌		3	4					1	4	12	1.52
石鎌未製品		1	1			1		1	2	6	0.76
削器		2							1	3	0.38
使用痕剥片		1							1	2	0.25
二次加工剥片		1	1		1			1	1	5	0.63
石核		8	1		1			0	3	13	1.64
両極石器			1					1		2	0.25
打製石斧		7	9		4			2	11	33	4.17
打製石斧未製品					1					1	0.13
打斧剥がれ		24	9		3		4	1	21	62	7.84
大型直線刃石器		1								1	0.13
磨製石庖丁		1								1	0.13
打製石鎌状石器									1	1	0.13
嵌石									2	2	0.25
点数計	8	167	146	0	20	2	16	22	410	791	
比率%	1.01	21.11	18.46	0	2.53	0.25	2.02	2.78	51.83		
砥石									1		
茶臼									1		

表14 石材別個数表

	下呂石	安山岩	チャート	凝灰岩	ホルンフェルス	粘板岩	泥岩	黒曜石
剥片	642		1		1			
尖頭器状石器	2							
尖頭器状石器未製品	1							
石鎌	9		3					
石鎌未製品	6							
削器	2		1					
使用痕剥片	1							1
二次加工剥片	4			1				
石核	13							
両極石器	2							
打製石斧		1			26	1	5	
打製石斧未製品					1			
打斧剥がれ		4			58			
大型直線刃石器						1		
磨製石庖丁						1		
打製石鎌状石器							1	
嵌石				1	1			
点数計	682	5	5	2	87	3	6	1
比率%	86.22	0.63	0.63	0.25	11.00	0.38	0.76	0.13
砥石					1			
茶臼				1				

表15 土器觀察表

出土地 番号	施位	組合	断片 数	重量 g	口径cm	底径cm	器高cm	口径底径 率	底径 率	胎土	焼成	外面色調	土色板	内面色調	土色板	整形・調整 外表面		整形・調整 内面	種類	器種	時代	產地	備考	特徴	回収	
																底	壁									
1 01漢	M1		1	28.1			(4.5)			書	良好	明黄褐	10YR7/6	にぶい黃褐	10YR7/4	黄褐、押し引き			縄文土器	深鉢	縄文中期			10	6	
2 01漢	M1		1	19.7			(4.1)			書	良好	にぶい黃褐	10YR5/3	にぶい黃褐	10YR5/4	手造り管によ る縦溝文			縄文土器	深鉢	縄文中期			10	6	
3 01漢	M2		1	30.9			(3.3)			書	良好	明黄褐	10YR7/6	にぶい黃褐	10YR7/3	象鼻付口部安 置			弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
4 01漢	M2		1	7.6			(2.6)			書	良好	にぶい黃褐	10YR6/3	にぶい黃褐	10YR6/3	象鼻付口部安 置			弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
5 01漢	M1		2	21.8			(5.4)			書	良好	黑褐	10YR3/2	灰黄褐	10YR4/2	象鼻付口部安 置			弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
6 01漢	M2		1	50.0			(6.2)			やや粗	良好	灰褐	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2	象鼻付口部安 置			弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
7 01漢	M2		1	41.3			(5.5)			やや粗	良好	灰褐	10YR4/1	にぶい黃褐	10YR7/4	象鼻付口部安 置			弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
8 01漢	M1		1	17.4			(4.9)			やや粗	良好	灰褐	7.5YR4/2	にぶい黄	7.5YR6/4	条板			弥生土器	甕(鉢形)	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
9 01漢	M2		2	26.7			(5.3)			書	良好	灰褐	7.5YR4/2	にぶい黄褐	10YR5/3	条板、縦			弥生土器	甕(鉢形)	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
10 01漢	M2		3	22.1			(6.6)			書	良好	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR6/4	条板、縦			弥生土器	甕(鉢形)	弥生前期前葉初頭			10	6	
11 01漢	M2		1	5.8			(2.0)			書	良好	黑褐	7.5YR3/1	灰褐	7.5YR4/2	条板			弥生土器	甕(鉢形)	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
12 01漢	M2		1	9.3			(3.1)			書	良好	にぶい黄褐	10YR6/4	縫	7.5YR6/6	条板、二段工具			弥生土器	甕(鉢形)	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
13 01漢	M1		1	4.1			(1.6)			書	良好	黑褐	10YR3/2	にぶい黄褐	10YR4/3	条板	押し引き		弥生土器	甕(鉢形)	弥生前期前葉初頭	櫻王銀行		10	6	
14 01漢	M1		1	24.1			6.7 (2.4)			1.7	やや粗	良好	にぶい黄褐	10YR7/3	灰	N4	条板			弥生土器	甕	弥生前期			10	6
15 01漢	M2		1	30.4			6.5 (3.6)			2.7	やや粗	良好	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄	7.5YR6/4	条板			弥生土器	甕	弥生前期			10	6
16 01漢	M2		1	8.7			(2.9)			書	良好	にぶい黄褐	10YR7/3	にぶい黄褐	10YR7/4	条板			弥生土器	甕	弥生前期			10	6	
17 01漢	M2		1	16.5			(5.2)			書	良好	浅黄褐	10YR4/4	にぶい黄褐	10YR7/4	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
18 01漢	M1		1	11.6			(2.7)			やや粗	良好	縫	7.5YR4/3	にぶい縫	7.5YR5/4	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
19 01漢	M1		1	9.4			(3.0)			やや粗	良好	縫	7.5YR6/6	縫	7.5YR6/6	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
20 01漢			1	6.7			(2.6)			書	良好	明黄褐	10YR6/6	にぶい黄褐	10YR5/3	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
21 01漢	M2		1	42.8			(6.6)			やや粗	良好	にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR5/2	条板			弥生土器	甕	弥生前期～中期			10	6	
22 01漢	M2		1	12.6			(3.4)			書	良好	黑褐	10YR3/1	にぶい黄褐	10YR7/4	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
23 01漢	M1		1	35.9			(6.1)			書	良好	にぶい黄褐	10YR6/4	黄褐	10YR4/2	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
24 01漢	M1		1	18.0			(4.4)			書	良好	にぶい黄褐	10YR7/4	浅黄褐	10YR8/4	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6	
25 01漢	M1		1	17.0			(3.3)			書	良好	縫	7.5YR7/6	縫	7.5YR7/6	条板			弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	7	
26 01漢	M1		1	25.3			(3.7)			書	良好	黒灰	10YR7/1	にぶい黄褐	10YR6/3	条板			弥生土器	甕	弥生前期～中期			10	7	
27 01漢	M1		1	8.8	9.6	(2.8)	1.0			書	良好	にぶい黄褐	10YR7/4	にぶい黄褐	10YR6/3	条板			弥生土器	甕	弥生中期前葉	網日銀行		10	7	
28 01漢	M1		1	3.6			(1.3)			書	良好	縫	SYR6/8	縫	SYR7/8	条板、押し引き			弥生土器	甕	弥生中期前葉	網日銀行		10	7	
29 01漢	M2	01漢1層	2	19.3			(2.3)			やや粗	中不良	明赤褐	SYR5/6	にぶい縫	7.5YR6/4	縫押し引き			弥生土器	甕	弥生中期前葉	網日銀行		10	7	
30 01漢	M2		1	7.3			(1.6)			書	良好	縫	7.5YR7/6	縫	7.5YR6/6	条板			弥生土器	不明	弥生中期前葉	網日銀行		10	7	
31 01漢	M1		1	2.2			(1.1)			書	良好	黄褐	10YR6/6	明黄褐	10YR7/6	条板			弥生土器	不明	弥生中期前葉	網日銀行		10	7	

番号	出土区	層位	接合	重量g	幅cm	奥深cm	器高cm	口径横径cm	底径横径cm	厚さmm	土手	焼成	外面部調	土色紙	内面部調	土色紙	整形・調整	外面部	整形・調整	内面部	種類	器種	時代	產地	備考	南同	北同	
32	01漢	M2		1	8.2		(2.0)				寄	良好	にぶい・滑	7.YR7.4	にぶい・滑	7.YR7.4	条痕				陶生土器	不明	後生中期前葉	網田耕行	10	7		
33	01漢	M2		1	5.6		(2.7)				寄	良好	にぶい・滑	10YR7.4	にぶい・滑	10YR7.4	条痕				陶生土器	不明	後生中期前葉	網田耕行	10	7		
34	01漢	M2		1	2.0		(1.8)				寄	良好	明黄褐	10YR7.6	滑	7.YR6.6	条痕?				陶生土器	不明	後生中期前葉	網田耕行	10	7		
35	01漢	M2	01漢1層	2	26.9		(2.5)				寄	良好	滑	7.SYR6.6	にぶい・黄褐	10YR6.3	2叉状工具				陶生土器	卷	後生中期前葉	網田耕行	10	7		
36	01漢	M2		1	7.0		(1.9)				寄	良好	浅黄褐	7.SYR6.3	浅黄褐	10YR6.3				陶生土器	高环	後生晚期	山中	10	7			
37	01漢	M1		1	15.8		(2.4)				寄	良好	にぶい・滑	7.YR7.2	灰黄褐	10YR5.2		磨き			陶生土器	高环	後生末~古墳初	越岡	10	7		
38	01漢	M1		1	37.0		(5.1)				寄	良好	浅黄褐	10YR8.4	浅黄褐	10YR8.3				陶生土器	高环	後生末~古墳初	越岡	10	7			
39	01漢	M2	01漢1層	3	28.7		(5.2)				寄	良好	浅黄褐	7.SYR8.3	にぶい・滑	SYR7.4	穿孔				陶生土器	高环	後生末~古墳初	越岡	10	7		
40	01漢	M1		1	59.5		(1.6)				寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.3	烟灰	10YR5.1		板擦で	土師器	高环	占墳前期	佐河戸	10	7				
41	01漢	M1		1	35.4		5.0	(2.9)		5.0	寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.4	にぶい・黄褐	10YR6.4				土師器	鉢	古墳時代(7世紀以前)			10	7		
42	01漢	M2		1	23.1		(4.8)				寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.4	にぶい・黄褐	10YR7.4	指押さえ				土師器	小鉢?	古墳後期(7世紀以前)	ミニチュア?	10	7		
43	01漢	M1		1	9.9	10.4	(3.1)	1.0			寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.4	にぶい・黄褐	10YR7.4				土師器	小鉢?	古墳後期(7世紀以前)			10	7		
44	01漢	M2	01漢1層	3	13.0	9.5	(2.0)				寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.4	にぶい・黄褐	10YR7.4				土師器	鉢	古墳時代(7世紀以前)			10	7		
45	01漢	M2	B3-II	2	34.8	12.2	(4.4)	0.6			寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.4	にぶい・黄褐	7.SYR7.4	板擦で	研毛目	土師器	鉢	古墳後期(7世紀以前)			10	7			
46	01漢	M1		1	46.0		6.8	(2.3)		3.0	寄	良好	にぶい・滑	7.SYR7.3	灰	N4	板擦で	板擦で	土師器	鉢	古墳時代(7世紀以前)			11	7			
47	01漢	M2	01漢1層	3	59.4		5.4	(1.9)		8.5	寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.3	明赤褐	5YR5.6				土師器	鉢	古墳時代(7世紀以前)			11	7		
48	01漢	M2		2	58.4		7.0	(2.6)		5.0	やや寄	良好	明黄褐	10YR7.6	浅黄褐	10YR8.4				土師器	鉢	古墳時代(7世紀以前)			11	7		
49	01漢	M2	01漢1層	5	130.1		6.1	(2.9)		9.5	寄	良好	にぶい・黄褐	10YR7.3	にぶい・黄褐	10YR7.3	指押さえ	板擦で	土師器	鉢	古墳後期(7世紀以前)			11	8			
50	01漢	M1		1	5.3		(1.9)				やや寄	良好	灰黄褐	10YR4.2	烟灰	10YR4.1				土師器	鉢	不明			11	8		
51	01漢	M1		1	6.1		(2.0)				やや寄	良好	灰黄褐	10YR6.2	灰黄褐	10YR6.2		板擦で	研毛目	土師器	鉢	不明			11	8		
52	01漢	M1		1	4.6		(2.3)				寄	良好	灰黄褐	10YR8.2	にぶい・黄褐	10YR8.2				土師器	鉢	7世紀以降			11	8		
53	01漢	M2		1	5.2		(2.2)				やや寄	良好	にぶい・黄褐	10YR8.3	にぶい・黄褐	10YR8.3				土師器	鉢	不明			11	8		
54	01漢	M1	B3-II	2	62.3		(2.2)			12.0	寄	良好	浅黄褐	7.SYR8.6	浅黄褐	7.SYR8.3	指押さえ				土師器	ミニチュア?	不明			11	8	
55	01漢	M1		5	15.5	11.5	(2.9)	1.3			寄	良好	灰	NS/-	灰	NS/-	削り				紙漉器	坏身	6世纪末~7世纪初			11	9	
56	01漢	M2	01漢1層	6	27.2	11.8	(3.5)	1.5			寄	不良	灰黄褐	10YR8.2	にぶい・黄褐	10YR7.2				紙漉器	坏身	7世纪			11	9		
57	01漢	M2		3	52.2	12.8	4.0	3.4	0.4	8.0	寄	良好	灰白	SY7.1	灰	SY6.3	削り				紙漉器	坏身	7世纪			11	9	
58	01漢	M1		7	121.9	7.9	3.2	4.9	7.0	12.0	やや寄	良好	綠灰	9G3/1	オリーブ灰	2.GY5.1	削り、底部外 周部剥離あり				紙漉器	短筒型	7世纪			11	17	
59	01漢	M1	C1B4-D1E2 C1J1-H1E6	516.2	8.8	(4.4)	7.5				寄	やや不良	灰黄	2.5Y6.1	灰黄	2.5Y6.1	括き目?削り				紙漉器	筒	7世纪			11	9	
60	01漢	M1									寄	やや不良	灰黄	2.5Y6.1	灰黄	2.5Y6.1	括き目?削り				紙漉器	筒	7世纪			59と同一個体 の可能性高い	11	9
61	01漢	M2		2	103.1	23.2	(5.6)	2.6			寄	不良	にぶい・黄褐	10YR6.3	にぶい・黄褐	10YR7.3	削り				紙漉器	筒	8世纪			11	8	
62	01漢	M2	01漢1層	6	162.4	22.7	(6.4)	3.2			寄	良好	灰	NG	灰	NG				紙漉器	筒	8世纪			63と同一個体 の可能性高い	11	8	
63	01漢	M2									寄	良好	灰	NG	灰	NG				紙漉器	筒	8世纪			11	8		

測量番号	出土品名	層位	深さ	重量(g)	寸法(cm)	底面寸法(cm)	底面形状	土性	焼成	外表面調	土色	内表面調	土色	着物・調整	調整・調査	種類	器種	時代	產地	備考	辨別			
64	01罐	M1		1	3.7		(2.8)	やや粗	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7 2	自然釉	自然釉	山茶碗	小瓶	12世紀後半	南部系	11	10			
65	01罐	M1		1	12.3	4.0	(1.7)	3.0	やや粗	良好	にふい黄褐	10YR7 2	にふい黄褐	10YR7 3			山茶碗	小瓶	12世紀後半	南部系	11	10		
66	01罐	M1		1	13.3	5.0	(1.9)	2.5	密	良好	にふい黄褐	10YR7 2	にふい黄褐	10YR7 2			山茶碗	小瓶	12世紀後半	南部系	11	10		
67	01罐	M1	B3-II	4	61.9	15.6	8.0	4.2	1.0	5.0	やや粗	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7 2	回転糸切り痕	底部内面使用痕	山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系	11	10
68	01罐	M1		1	18.5	16.4	(2.6)	2.0	やや粗	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7 2	?	付着	山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系	11	10		
69	01罐	M1		2	20.0	14.4	(3.7)	2.0	密	良好	灰白	5Y7 2	浅黄	5Y7 3		自然釉付着	山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系	11	10		
70	01罐	M1		1	39.3	6.6	(2.0)	3.0	密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7 2	回転糸切り痕		山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系	11	10		
71	01罐	M2		5	247.2	9.7	(3.7)	12.0	やや粗	良好	にふい黄褐	10YR7 2	にふい黄褐	10YR7 2	回転糸切り痕		山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系	11	17		
72	01罐	M3	C4B	2	4.1	13.0	(2.3)	1.4	密	良好	浅黄	2.5Y7 3	灰黄	2.5Y7 2			山茶碗	碗	14世紀～15世紀	北部系	11	10		
73	NR	M3		1	14.6		(2.7)		やや粗	良好	浅黄	10YR8 4	にふい黄褐	10YR7 2	擦痕		韓文土器	深鉢	韓文中期		12	11		
74	NR	M3	01-1.01-2	4	83.0		(8.4)		密	良好	にふい黄褐	10YR7 3	明褐	7.5YRS 6	各板張付か?		韓文土器	深鉢	韓文後期以降		12	11		
75	NR	M3	01-1.01-2	10	659.9	8.0	(15.1)	12.0	密	良好	にふい黄褐	10YR8 4	にふい黄褐	10YR5 3	?	付着	韓文土器	深鉢	韓文後期以降		12	11		
76	NR	M3		2	26.9		(8.0)		密	良好	にふい黄褐	10YR8 3	にふい黄褐	10YR7 4	割り		韓文土器	深鉢	韓文晚期		12	11		
77	NR	M3		1	14.7		(3.7)		密	良好	にふい黄褐	10YR7 4	にふい黄褐	10YR7 4	擦で、縫	擦	韓文土器	深鉢	韓文晚期		12	11		
78	NR	M3		1	51.4		(4.1)		粗	不良	にふい黄褐	10YR7 4	にふい黄褐	10YR5 3	押し引き(貝殻)		韓文土器	深鉢	韓文晚期		12	11		
79	NR	M3		1	21.2		(3.4)		やや粗	良好	にふい褐	7.5YRS 4	にふい褐	7.5YRS 4	手付け変形、開口		共生土器	變	共生中期前垂頭變	輕王伴行	12	10		
80	NR	M3		1	8.7		(3.3)		やや粗	良好	暗灰	N3	にふい褐色	SYR4 4	板張		共生土器	變(齒列變)	共生中期前垂頭變	輕王伴行	12	10		
81	NR	M3		1	5.8		(1.6)		やや粗	良好	にふい褐	10YR7 3	褐	SYR6 6	板張、押し引き		共生土器	變	共生中期前垂	朝日伴行	12	10		
82	NR	M3		2	22.5		(4.6)		やや粗	良好	暗灰	N3	灰白	10YR8 2	板張		共生土器	不明	共生中期～中期		12	10		
83	NR	M3		1	11.7		(3.3)		密	良好	黑褐	7.5YRS 3	にふい褐	7.5YRS 4	板張		共生土器	不明	共生中期～中期		12	10		
84	NR	M3		1	11.6		(3.3)		やや粗	良好	にふい黄褐	10YR7 3	にふい黄褐	10YR7 3	板張		共生土器	不明	共生中期～中期		12	10		
85	NR	M3		1	11.2		(3.7)		やや粗	良好	暗灰	N3	板張	10YR5 1	板張		共生土器	不明	共生中期～中期		12	10		
86	NR	M3		1	9.8		(4.4)		やや粗	良好	にふい褐	7.5YRS 3	明赤褐	SYR5 6	板張		共生土器	不明	共生中期～中期		12	10		
87	NR	M3	01-1.01-2	15	290.8	8.4	(3.9)	9.5	やや粗	良好	明赤褐	SYR5 6	暗灰	SYR4 2	板張と上げ、裏用	板付着	共生土器	變	共生中期		12	17		
88	NR	M3		1	37.3	7.5	(1.3)	2.7	やや粗	良好	にふい黄褐	10YR7 3	灰	N5	条痕	剥がれ	共生土器	變	共生中期		12	10		
89	NR	M3		1	13.8		(3.7)		密	良好	にふい黄褐	10YR7 4	にふい黄褐	10YR7 4	条痕、跳ね上げ		共生土器	變	共生中期前垂	朝日伴行	12	10		
90	NR	M3	01-2	4	42.9	13.1	(4.3)	2.5	やや粗	良好	暗灰	N3	灰白	2.5Y7 2	条痕		共生土器	變	共生中期前垂	若瀬	12	10		
91	NR	M3		5	63.8	5.5	(8.3)	4.5	やや粗	良好	灰白	10YR5 2	板張	10YR4 1	N3	板小削痕	共生土器	變	共生中期		12	12		
92	NR	M3	01-1.01-2	7	52.6	10.6	(6.4)	1.3	やや粗	良好	灰白	10YR8 2	にふい黄褐	10YR7 2	刷毛目、板削で	刷毛目	共生土器	變	共生中期～後期初期	賀州系持込	12	12		
93	NR	M3	01-1.01-2	15	90.6		(11.8)		やや粗	良好	にふい黄褐	10YR7 3	にふい黄褐	7.5YRS 4	刷毛目		共生土器	變	共生中期～後期初期	賀州系持込	12	12		
94	NR	M3		1	9.8	14.3	(2.7)	0.8	密	良好	にふい褐	7.5YR7 3	暗灰	7.5YR6 2		土器脚	變	古墳時代(7世紀以前)		12	12			
95	NR	M3	D6B	2	5.9	12.1	(2.0)	1.4	密	良好	灰白	2.5Y7 1	灰白	2.5Y7 1		板窓器	环臺	7世紀		12	12			

通 番 号	出上区	層位	後合	幅員	質量g	上縦cm	底径cm	基高cm	上縦残存 率/12準	底径 残存 率/12準	紡土	焼成	外面色調	土色板	内面色調	土色板	輪形・調査 外表面		輪形・調査 内表面		種類	器種	時代	產地	備考	國籍	
																	輪形	調査 外表面	輪形	調査 内表面							
96	NR	M3	01漸1側	5	131.0	9.5	5.7	3.1	2.5	12.0	密	良好	灰白	N7	灰白	N7					頸窓器	环身	7世紀			12 18	
97	NR	M3		1	8.3	10.3		(2.6)	0.7		密	良好	灰	N6	灰	N6					頸窓器	环身	7世紀			12 12	
98	NR	M3	01-1 C2-I	6	59.2		6.4	(3.2)		9.0	密	良好	黄灰	2.5Y7-1	灰黄	2.5Y7-2					頸窓器	环身	7世紀			12 18	
99	NR	M3	01-1-01-2 B3-I	6	35.4			(10.9)			密	良好	灰白	N7	灰白	N7		横き目?	剥がれ			頸窓器	环状	7世紀			12 12
100	NR	M3		1	4.0	18.8		(6.8)	0.7		密	良好	灰白	2.5Y7-1	灰白	2.5Y7-1					頸窓器	环状	8世紀			12 12	
101	NR	M3		1	53.6	7.9	3.4	2.4	1.4	12.0	中や粗	良好	灰白	5Y8-1	灰白	2.5Y8-2	回転糸切り痕	使用か?			山茶碗	小鉢	12世紀後~13世紀前	南部系		12 18	
102	NR	M3	01-1	2	67.4		7.8	(4.4)	3.3		中や粗	良好	褐灰	10YR6.1	黄灰	2.5Y5-1		淡?付着				山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		12 12
103	14漢	M1	01-3	3	64.1	10.7	5.2	3.3	3.5	9.0	中や粗	良好	灰白	5Y7-1	灰白	5Y7-1					山茶碗	小鉢	12世紀中	南部系		12 18	
104	14漢	M1		2	22.1	15.3		(4.4)	2.0		中や粗	良好	灰白	10YR7.1	にせい黄青	10Y7-2					山茶碗	碗	12世紀中	南部系		12 12	
105	14漢	M1		1	27.3		7.0	(1.8)		2.2	密	やや不規	灰白	5Y7-1	灰白	2.5Y8-2	回転糸切り痕	使用か?			山茶碗	碗	12世紀中	南部系		12 12	
106	02薄			1	2.3	16.8		(1.8)	0.3		密	良好	灰白	2.5Y8-1	灰黄	2.5Y7-2					山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		12 12	
107	15漢	M2		1	30.3		(7.8)				密	良好	明黃	10YR7.6	橙	7.5YR7.6	冠羽状					佛生土器	束	佛生前歴			16 15
108	15漢	M2		1	4.2		(2.4)				密	良好	灰白	2.5Y7-1	黄青	2.5Y7-2	自然輪	自然輪	自然輪	不明	頸窓器	束	不明			16 13	
109	15漢	M1		1	20.1		12.2	(2.3)		0.6	密	良好	灰白	5Y7-1	黄灰	2.5Y6-1	自然輪付着			頸窓器	环身	8世紀			金銅器写し 16 13		
110	15漢			1	94.1		(7.8)				密	良好	黄灰	2.5Y5-1	浅黄	2.5Y7-3	叩き痕	自然輪	自然輪	不明						16 13	
111	15漢	M2		1	1.7	16.3		(1.4)	0.6		密	良好	灰白	2.5Y8-1	灰白	2.5Y7-1					灰釉陶器	碗	不明			16 13	
112	15漢	M2	05-3	3	189.7		7.3	(3.0)		10.0	中や密	良好	灰黄	2.5Y7-2	灰黄	2.5Y7-2	回転糸切り痕	使用			山茶碗	碗	12世紀	南部系		16 18	
113	15漢	M1		3	55.9	16.7	8.0	4.9	0.6	0.3	中や密	良好	灰白	5Y7-1	モリーフ黄	5Y6-3					山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		16 13	
114	15漢	M2		1	8.9	16.8		(0.0)	0.4		中や粗	良好	灰黄	2.5Y6-2	灰黄	2.5Y7-2					山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		16 13	
115	15漢	M2		1	14.4		8.0	(1.7)		3.3	中や粗	良好	灰白	2.5Y7-1	灰白	2.5Y7-1					山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		16 13	
116	15漢			1	58.8		8.6	(2.2)		3.0	中や粗	良好	灰白	5Y6-1	灰白	5Y7-1		使用?			山茶碗	碗	12~13世紀	南部系		16 12	
117	15漢	M2		4	15.0	8.7	6.2	1.1	2.0	7.9	密	良好	灰白	2.5Y7-1	灰白	2.5Y7-1	回転糸切り痕	自然輪	自然輪	山茶碗	皿	14~15世紀	北部系		16 13		
118	15漢	D6Ⅲ	2	14.4	8.1	5.3	1.2	3.3	5.5	密	良好	灰白	5Y7-1	灰白	5Y7-2	回転糸切り痕	指擦で痕、自然輪			山茶碗	皿	14~15世紀	北部系		16 13		
119	15漢			1	30.7	8.6	4.3	1.2	2.4	3.5	密	良好	灰白	2.5Y8-2	灰白	2.5Y8-2	回転糸切り痕				山茶碗	皿	14~15世紀	北部系		16 13	
120	15漢	M1		3	38.1		5.0	(1.9)		7.5	密	良好	灰白	2.5Y8-1	灰白	2.5Y8-1	回転糸切り痕	指擦で痕			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 13	
121	15漢	M1		4	35.9	12.1		(2.8)	2.9		密	良好	黄灰	2.5Y6-1	黄灰	2.5Y6-1					山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 14	
122	15漢	M2	15-3	5	26.1	11.4	5.1	2.3	2.6	4.0	密	良好	灰黄	2.5Y7-2	灰黄	2.5Y7-2					山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 14	
123	15漢	M2	15-1	10	65.7	12.0	4.9	2.5	6.2	10.8	密	良好	灰白	7.5Y6-2	灰黄	10YR6-2					山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 18	
124	15漢	M2		2	50.1	11.5	5.0	2.8	5.5	6.0	密	良好	灰白	2.5Y8-2	灰白	2.5Y8-2	回転糸切り痕				山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 14	
125	15漢	M2	15-1	12	125.5	11.5	4.6	3.5	12.0	12.0	密	良好	灰黄	2.5Y7-2	灰白	2.5Y8-2	回転糸切り痕	経研压痕			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 18	
126	15漢	M1	05-3	3	46.2		4.5	(2.5)		11.0	密	良好	灰白	5Y7-1	灰白	2.5Y8-2	回転糸切り痕	経研压痕			山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 14	
127	15漢	M1		3	58.2		5.6	(2.6)		6.0	密	良好	灰黄	2.5Y7-2	灰黄	2.5Y7-2					山茶碗	碗	14~15世紀	北部系		16 14	

番号	地名	層位	剖面	質地	寸法	底径cm	底高cm	直径残存率	底径残存率	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	回数		
128 15層 M2 05-3	2	39.7		4.8	(1.7)			12.0		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 14		
129 15層 M2	2	25.9		5.1	(2.5)			2.1	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 14			
130 15層	1	32.9		6.3	(2.6)			5.7	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 14			
131 15層 M1	1	37.9		5.8	(2.6)			4.1	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 16			
132 15層 M2 DSB.05-11	11	121.5	13.0	5.5	5.3	2.6	7.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 18				
133 15層	1	15.5	14.5		(4.0)	0.4		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 16				
134 15層	1	30.1	16.8		(4.5)	0.3		やや粗	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 15				
135 15層 M1	3	86.6	19.0	9.3	5.0	1.0	3.1	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 16				
136 15層	1	22.9	26.8		(4.0)	0.3		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 16				
137 15層 M2 15-1	3	25.8	30.4		(4.0)	0.4		やや粗	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 15				
138 15層 M1	4	28.6	34.0		(2.5)	1.7		やや粗	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	16 15				
139 15層 M2 15-1	2	101.8		11.1	5.0		1.9	やや粗	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	17 15				
140 15層 M2 DSB. III	3	33.9		8.4	5.7		0.8	やや粗	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	17 15				
141 15層 M2								土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	17 16				
142 15層 M2								土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	17 16				
143 15層 M2 DSB. 15-1	8	292.7		9.5	(1.3)		3.5	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	17 16				
144 15層 M2	6	21.4	33.2		(5.0)	0.4		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	17 16				
145 05層 M3	1	26.9	17.8		(1.7)	0.7		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 15				
146 05層 M1	2	5.8	12.2		(2.0)	1.5		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
147 05層 M1	1	42.4		5.0	(1.9)		12.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
148 05層 M1	1	16.5	15.8		(3.6)	0.8		土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
149 05層 M1	1	26.0		7.2	(2.0)		2.5	やや粗	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
150 05層 M1	1	3.5	7.8	3.8	1.0	0.8	2.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
151 05層 M1	1	3.3	7.6	4.8	0.8	1.0	1.5	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
152 05層 M2 05-1	2	5.7	8.3	5.6	1.0	0.5	4.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
153 05層 M2	1	4.5	8.4	4.8	1.0	1.5	2.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
154 05層 M2 15層	2	33.4	8.1	5.2	1.0	8.0	10.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 18				
155 05層 M2	1	6.6	8.2	4.0	1.1	0.5	2.5	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				
156 05層 M2 DSB. DSB. II	3	36.3	11.6	5.0	2.2	2.0	9.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 18				
157 05層 M2 15-02.03. (5-5)	5	71.0	12.0	4.4	2.3	8.0	8.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 18				
158 05層 M2	1	58.7	12.0	4.6	3.0	6.0	7.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 14				
159 05層 M3 05-1	3	27.9	12.0	4.0	2.8	1.5	4.0	土	地成	外表面色	土色相	内表面色	土色相	形状・調整	形状・調整	内面	形状・調整	形状	器種	時代	產地	備考	附註	18 13				

用具 番号	出土区 名	層位 名	組合 名	組合 番号	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	径深cm ／12 等	底上 等	底外 形	外表面 色	土色	内表面 色	土色板	鉴别・調査 外観	鉴别・調査 内面	種類	器種	時代	產地	備考	博物 館	國別		
160	05層	M3			1	44.8	13.0	4.0	2.6	3.0	6.0	直	良好	淡黃	2.5Y7/3	淡黃	2.5Y7/3	同軸赤切り目	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
161	05層	M3			3	36.3	12.2	5.0	2.7	0.3	7.0	直	良好	淡黃	2.5Y7/3	淡黃	2.5Y7/3	同軸赤切り目	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
162	05層	M4Ⅲ.E5Ⅲ	4	31.7	13.0		(2.7)	4.5		直	良好	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1				山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
163	05層	M3			2	36.5		4.0	(3.0)		4.5	直	良好	淡黃	2.5Y7/4	淡黃	2.5Y7/4	?	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	13	
164	05層	M1			1	37.7	13.2	3.2	4.3	1.5	5.0	直	良好	淡黃	2.5Y8/3	淡黃	2.5Y8/3		山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	13	
165	05層	M3 15-2	2	32.7	15.0		(3.0)	2.0		直	良好	灰白	5Y8/2	灰白	5Y8/2			山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	13		
166	05層	M1			1	33.3		5.2	(3.0)		2.5	直	良好	灰黃	2.5Y7/2	灰黃	2.5Y7/2	指擦で	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
167	05層	M1			1	37.8		4.8	(1.8)		4.5	直	良好	にい・黄褐色	10YR7/4	明黃褐色	10YR7/6	同軸赤切り目	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
168	05層	M2			1	28.5		4.4	(2.4)		6.0	直	良好	淡黃	2.5Y7/3	淡黃	2.5Y7/3	同軸赤切り目	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
169	05層	M2			1	24.4		7.0	(2.5)		3.0	直	良好	淡黃	2.5Y8/4	淡黃	2.5Y8/3		山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
170	05層	M3			1	28.2		8.0	(2.9)		3.0	直	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	同軸赤切り目	山茶碗	純	14~15世紀	北部系		18	14	
171	05層	M1			1	33.3		(2.2)			直	良好	綠褐色	10G6/1	紺褐色	10G6/1	絲	輪	青磁	盤	14世紀以降	難集窯		18	16	
172	05層	M1			2	8.1		(1.5)	2.0		直	中等	中等	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	指押え	指擦で	土師器	盤	不明			18	15
173	05層	M1 15-2.D5Ⅲ	8	50.3	18.2		(3.0)	4.0		直	良好	にい・黄褐色	10YR7/3	淡黃褐色	10YR8/3			土師器	盤	15世紀後半	京都系		18	15		
174	05層	M3			1	54.8		5.6	(1.6)		7.0	直	良好	灰黃	2.5Y7/2	灰黃	2.5Y7/2	同軸赤切り目、 輪付帯	断面に漆付着	陶器	繩物小皿	15世紀	古瀬戸		18	15
175	05層	M3			1	32.0	26.0		(2.7)	0.3		やや粗	良好	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1		陶器	片口鉢	15世紀前半	古瀬戸		18	15	
176	05層	M1 15-1	2	44.2	26.0		(4.6)	1.2		直	良好	にい・黄褐色	2.5YR5/3	灰赤	2.5YR4/2	輪	輪	陶器	錐鉢	15世紀後半	古瀬戸		18	15		
177	05層	M2 E5Ⅲ	2	51.0	27.0		(4.0)	1.4		直	良好	にい・黄	7.5YR5/2	にい・黄	7.5YR5/3	輪	輪	陶器	繩帶たはぎ	15世紀	古瀬戸		18	15		
178	05層	M2 05-1	3	76.7	30.0		(10.9)	0.8		直	良好	にい・黄	7.5YR5/4	にい・黄	7.5YR6/3	輪	輪	陶器	繩帶たはぎ	15世紀	古瀬戸		18	15		
179	05層	M2			1	8.9		3.7	(0.6)		3.0	直	良好	橙	SYR8-6	にい・黄	SYR8-4		陶器	重腹瓶	16世紀	瀬戸美濃		18	15	
180	C4	II			1	16.8		(3.6)				やや粗	良好	淡黃褐色	10YR8/4	にい・黄褐色	10YR8/4	鶴文?	鶴文土器	深鉢	鶴文中期			21	16	
181	B3	II			1	52.1		(6.1)				やや粗	良好	にい・黄褐色	SYR4-3	にい・黄褐色	SYR4-3	鶴文?	鶴文土器	深鉢	鶴文中期			21	16	
182	I				1	29.9		6.5	(3.6)		1.0	やや粗	良好	にい・黄	7.5YR7/4	橙	7.5YR6/6	割り	鶴文土器	深鉢	不明			21	16	
183	A4	II			1	25.7		(4.0)				やや粗	良好	灰褐色	7.5YR7/2	灰褐色	7.5YR4/2	割り付け梵文、 輪付	佛生土器	甕	佛生前期前垂物頭		佛工房		21	16
184	B3	II			1	34.9		(4.2)				直	良好	灰褐色	10YR6/2	にい・黄褐色	10YR6/3	金瓶	佛生土器	不明	佛生前期～中期			21	16	
185	A4	II			1	5.4		(3.7)				直	良好	にい・橙	7.5YR8/4	にい・橙	7.5YR6/4	条痕	佛生土器	不明	佛生前期～中期			21	16	
186	D3	II			1	17.5		(3.9)				やや粗	良好	淡黃褐色	10YR8/3	黑褐色	7.5YR3/1	条痕	佛生土器	不明	佛生前期～中期			21	16	
187	C3	II			1	25.3		(4.9)				直	良好	灰黃	2.5Y7/2	橙	7.5YR6/6	条痕	佛生土器	不明	佛生前期～中期			21	16	
188	B3	II			1	21.8		(5.4)				やや粗	良好	灰褐色	7.5YR4/2	にい・黄褐色	10YR5/3	条痕	佛生土器	不明	佛生前期～中期			21	16	
189	A4	II			1	121.7		6.7	(3.7)		5.0	やや粗	良好	にい・黄褐色	10YR7/4	にい・黄褐色	10YR7/3	条痕	佛生土器	更	佛生前期			21	16	
190	D3	II			1	24.2		6.2	(3.0)		2.7	やや粗	良好	暗褐色	7.5YR3/3	明赤褐色	5YR3/2	条痕	佛生土器	更	佛生中期			21	16	
191	C4	II			1	44.4		(4.0)				直	良好	淡黃褐色	7.5YR8/2	橙	7.5YR7/6	網毛後無で後 縁	佛生土器	器台	佛生末～古墳期			21	17	

番号	出土区	層位	組合	測量	測量cm	測量cm	目録番号	既存年	既存年	出土	地質	外表面調	土色相	内表面調	土色相	形態・調査	内面	種類	器種	時代	产地	備考	特徴	国版	
192	C2	I		2	23.5		(4.0)			やや良	灰好	にぶい黄褐色	10YR7.4	浅黄色	10YR8.3			土器部	不明	古墳後期(7世紀以前)		ミニチュア?	21	17	
193	D3	II		2	20.5	16.8	(2.7)	0.8		良	灰好	褐色	2.5YR6.6	にぶい褐	7.5YR7.4	無で	磨毛目	土器部	甕	古墳後期(7世紀以前)			21	17	
194	B3	II		1	219.5	8.7	4.3	5.9	10.0	12.0	良	灰白灰	10YR8.2	灰白灰	10YR8.2	N5	指撫で	土器部	小鉢	不明			21	18	
195	A4	II		1	11.9	14.1	(2.9)	0.3		やや良	灰好	にぶい黄褐色	10YR7.4	にぶい黄褐色	10YR7.4			土器部	甕	不明			21	17	
196	C2	I		1	9.1		(2.6)			やや良	灰好	にぶい褐	7.5YR7.4	にぶい黄褐色	10YR8.3			土器部	甕	不明			21	17	
197	B4	II		1	25.8		10.8	(3.1)		1.2	密	灰好	灰	10Y5.1	灰白	10Y7.1	透かし孔	須恵器	高环	6世紀			21	17	
198	D3	II		1	8.6	11.9	(2.4)	1.0		密	灰好	灰	5Y6.1	灰	5Y6.1			須恵器	环身	7世紀			21	17	
199	C4	II		1	18.3		(1.4)			密	灰好	黄灰	2.5Y6.1	灰白	2.5Y7.1			須恵器	环蓋	8世紀前半	つまみ付		21	17	
200	C4	II		1	11.0		13.1	(1.4)		1.0	密	灰好	灰白	7.5Y7.1	灰白	7.5Y7.1		須恵器	环身	8世紀後半			21	17	
201	C4	II		1	19.9		11.9	(1.4)		2.0	密	灰好	黄灰	2.5Y6.1	黄灰	2.5Y6.1		須恵器	环身	8世紀後半			21	17	
202	D4	II		1	15.6		11.5	(1.7)		0.1	密	灰好	黄灰	2.5Y6.1	黄灰	2.5Y7.2		須恵器	环身	8世紀末~9世紀初			21	17	
203	B3	I		1	6.6	7.4	(2.4)	1.4		密	灰好	灰黄	2.5Y6.2	にぶい黄	2.5Y6.3	自然物	自然物	灰釉陶器	瓶	不明			21	17	
204	C4	E5B		2	21.3	36.1	(4.5)	1.2		密	灰好	灰オーリー	5Y6.2	灰オーリー	5Y6.2	輪	輪	青磁	瓶	12世紀	同窓系			21	17
205	D3	II		1	28.2		(5.0)			密	灰好	にぶい赤褐	5YR4.3	灰周	5YR4.2	輪	輪	陶器	釜	15世紀後半	古窯跡	耳の下の受け		21	17
206	B5	II		1	6.3		5.1	(0.0)		2.0	密	灰好	暗灰黄	2.5Y5.2	黄灰	2.5Y5.1		陶器	壺	16世紀	瀬戸美濃			21	17

表16 石器観察表

報告書番号	基定期日	遺構・部位	器種	石材	残存率	刃部属性	磨耗或加工	剥片調査技術	石材剥片形態 (石核の場合、剥離された面 面形態)	裏石の種類	備考	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	特徴	国版
207	01直1層	円筒狀	チヤート	安形	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石器と思われる。	22.4	19.1	3.	0.9	22	19	
208	C4E	下呂石	左肩欠	SP	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石器と思われる。	26.3	14.8	3.9	0.9	23	19	
209	01直底路3層	円筒狀	右肩欠	SP	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石器と思われる。	15.2	12.6	3.4	0.6	23	19	
210	01直底路3層	円筒狀	左肩欠	SP	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石器と思われる。	16.8	13.7	3.1	0.5	23	19	
211	C4B	円筒狀	下呂石	安形	SP	SP	不明	剥片	不明		17.9	11	2.2	0.1	23	19	
212	A1E	石器未成品	下呂石	左肩欠	SP	SP	HxD	剥片	不明		23.8	22.2	4	2.6	23	19	
213	15直1層	石器未成品	下呂石	安形	SP	SP	D	剥片	不明		26.9	19.7	6.9	3.11	23	19	
214	01直1層	石器未成品	下呂石	安形	SP	SP	D	傾斜剥片	不明		28.2	19.1	4.9	2.2	23	19	
215	H3	石器未成品	下呂石	左肩欠	SP	SP	不明	剥片	不明		19.8	19.2	5	1.9	23	19	
216	15直底路3層	石器未成品	下呂石	左肩欠、基底欠	S/P	S/P	不明	剥片	不明		18.5	15	5.1	1.2	23	19	
217	A1E	所持	チヤート	安形	S/P	S/L	HxD	剥片	不明		23.8	22.2	4	2.6	23	19	
218	01直1層	下呂石	安形	素面+ml	S/D	S/D	HD	剥片調査	内面		20.9	17.5	6.5	0.9	23	19	
219	01直2層	所持	下呂石	安形	S'D	S'D	D	剥片	分岐円錐		39.3	46.4	11.1	18.5	23	19	
220	01直2層	使用痕剥片	碧玉岩	安形	素面+ml	なし	D	剥片	内面		52.4	41.4	36.1	34.6	23	19	
221	DS-E	使用痕剥片	下呂石	安形	素面+ml	なし	不明	剥片	内面	右側面に摩耗した部分あり。	2.9	13.1	1.1	0.1	23	19	
222	01直1層	二次加工剥片	下呂石	安形	S/P	S/P	HxD	剥片	不明		27.6	37.3	15.8	7.9	23	19	
223	05直上層	二次加工剥片	下呂石	安形	S/P	S/P	不明	剥片	不明		18.3	14.7	3.8	1.2	23	19	
224	A1E	二次加工剥片	下呂石	安形	なし	S'D	不明	剥片	不明		19.5	36	6.8	3	23	19	
225	01直底路3層	二次加工剥片	下呂石	安形	S/P	S/P	不明	剥片	内面		26.2	32.5	8.5	5.9	23	19	
226	15直下層	下呂石	安形	なし	HxD	HxD	剥片	不明		24.4	35	9.6	4.7	23	19		
227	01直底路3層	兩面石器	下呂石	下平欠	なし	HxD	HxD	内面	内面	二次加工の両面打撃である。	23.1	5	8.3	4.5	23	19	
228	15直3層	所持	下呂石	安形	なし	なし	HxD	HxD	内面	二次加工の両面打撃である。	26.4	30	4.5	2.2	23	19	
229	01直1層	作業面再生剥片	下呂石	安形	なし	なし	HD	剥形調査	内面		37.4	23.8	8.5	5.5	23	19	
230	01直1層	石核	下呂石	安形	通用外	HD	剥形調査	内面	内面	内面角120°程度	43.6	32	12	24.1	23	19	
											50	44	20.2	40.5	24	19	

報告書番号	測定期	遺構・部位	器種	石材	残存率	刃部属性	彫造形或加工	鋸片鋸面	石材表面形態 (右側の場合) 測定される 位置(左側)	石器の種類	参考	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	神奈	四助
231	01遺2層	石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	分離円錐 周囲角100°程度	35.0	57.1	31.1	66.8	24	19		
232	05遺上層	石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	円錐	74.8	57.6	22.7	83.8	26	19		
233	石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	HxD	片面削片	円錐	94.9	83.6	41.9	374.6	24	19		
234	01遺2層	西条石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	不明	39.8	30.0	24.6	22.3	24	19		
235	01遺1層	西条石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	不明	34.0	37.9	8.8	11.3	24	19		
236	01遺2層	西条石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	不明	34.4	49.6	19.1	29	25	19		
237	01遺2層	西条石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	円錐	46.8	34.3	14	24	25	19		
238	01遺2層	西条石核	下呂石	完形	通用外	HxD	HxD	片面削片	円錐	43.2	35.9	14	18.7	25	19		
239	D3B	西条石核	下呂石	完形	なし	HxD	HxD	片面削片	不明	28.3	39.6	8.7	7.9	25	19		
240	自然遺路2層	西条石核	下呂石	片状	なし	HxD	HxD	片面削片	円錐	33.9	31.1	12.0	9.6	25	19		
241	自然遺路3層	砾石	下呂石	片状	通用外	通用外	通用外	通用外	無	26.5	45.3	10.3	9.9	25	19		
242	自然遺路3層	砾石	下呂石	片状	通用外	通用外	通用外	通用外	無	24.6	49.9	32	91	25	19		
243	自然遺路3層	砾石	下呂石	片状	通用外	通用外	通用外	通用外	無	50.3	43.4	46.5	72.5	25	19		
244	01層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	104.4	43	10.9	64.5	26	20		
245	01層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長削片	小形	83.6	49.6	9.9	60.3	26	20		
246	01層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	83.6	50.1	12.6	67.6	26	20		
247	05遺上層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長削片	不明	82.2	51	13.3	60.6	26	20		
248	05遺上層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長削片	不明	111.8	42.3	23.2	116.5	26	20		
249	05遺上層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長削片	不明	118.6	50.5	10.3	76.5	26	20		
250	自然遺路	打削石斧	カルシフィルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	横長削片	不明	102.1	36.6	13.5	65.8	26	20		
251	自然遺路2層	打削石斧	カルシフィルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	横長削片	不明	133.2	47.9	16.3	111.3	26	20		
252	自然遺路	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	99.1	35.5	14	70.2	26	20		
253	自然遺路2層	打削石斧	砾石	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	103.4	41.4	13.9	75.5	26	20		
254	自然遺路3層	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	153.7	45.7	19	129.5	26	20		
255	A3B	打削石斧	カルシフィルス	基底	刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	92.3	58.6	16	83.9	26	20		
256	B3B	打削石斧	カルシフィルス	基底	刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	115.1	43.2	11.6	54	26	20		
257	B3B	打削石斧	カルシフィルス	基底	刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	95.7	49.7	16.9	90.2	26	20		
258	B3B	打削石斧	カルシフィルス	基底	刃こぼれ	HD	不明	片削	河原縫	背面に自然面を残す。	110.1	51.9	17.2	149.1	26	20	
259	C3B	打削石斧	カルシフィルス	基底	刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	96.8	67.3	21	115.9	26	20		
260	D3B	打削石斧	カルシフィルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	片削	不明	96.1	69.1	19.9	85.6	26	20		
261	D5B	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長削片	円錐	106.	40.9	11.1	55.9	26	20		
262	P5B	打削石斧	カルシフィルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長削片	不明	90.4	36.1	17.8	74.7	27	21		
263	05遺上層	打削石斧尖端部	カルシフィルス	完形	なし	HD	不明	横長削片	不明	158.8	64.1	26.0	311.1	27	21		
264	15遺上層	打削石斧	カルシフィルス	完形	なし	HP	不明	片削	不明	44.0	52.3	7.8	18.6	27	21		
265	D3B	片削	カルシフィルス	完形	なし	HD	不明	横長削片	不明	105.3	40.6	11	111.8	27	21		
266	A4	砾石	カルシフィルス	摩耗?	摩耗	通用外	通用外	通用外	背面にわずかに削り跡	背面に自然面を残す。無邊に一度深い抉り跡が作出されたり、表面のたるみと推定される。主面部に削り跡がある。これも摩耗のための工具と推定され、摩耗が作用されたこと確定。	100.8	32	45.6	313	27	21	
267	C3B	砾石	カルシフィルス	完形	刃こぼれ、刃こぼれ	HD	なし	通用外	棒状	背面に自然面を残す。無邊に一度深い抉り跡が作出されたり、表面のたるみと推定される。主面部に削り跡がある。これも摩耗のための工具と推定され、摩耗が作用されたこと確定。	208.1	70.2	49.5	990.1	27	21	
268	地割後平一劣生	D5B	門系巖	下呂石	完形	E/S/P	不明	片削	不明	27.6	18	4.5	1.7	28	21		
269	地割後平一劣生	土器上層	石器未完成品	下呂石	完形	E/S/P	不明	片削	不明	25.7	16.6	5.3	1.9	28	21		
270	地割後平一劣生	01遺2層	有茎器	チャート	完形	SP	SP	片削	不明	24.2	13.4	4.7	0.6	28	21		
271	地割後平一劣生	15遺2層	有茎器	チャート	完形	SP	SP	片削	不明	20.9	11.2	4.8	0.8	28	21		
272	地割後平一劣生	01遺2層	有茎器	チャート	完形	SP	SP	片削	不明	27.3	14.8	4.5	2.2	28	21		
273	地割後平一劣生	15遺2層	有茎器	チャート	完形	SP	SP	片削	不明	21.1	12.8	5.1	4.4	28	21		
274	地割後平一劣生	15遺2層	有茎器	チャート	基底	SP	SP	片削	不明	29	16.6	7.5	2.7	28	21		
275	地割後平一劣生	A3B	有茎器	チャート	上手欠	SP	SP	片削	不明	23	15.6	5.6	1.4	28	21		
276	地割後平一劣生	A3B	尖端研磨状石器	下呂石	完形	E/S/P	不明	片削	円錐	35.9	22	9.9	5.7	28	21		
277	地割後平一劣生	01遺1層	尖端研磨状石器	下呂石	先端欠	E/S/P+S/I	E/S/P+S/I	不明	片削	不明	32.3	23.3	9	6.1	28	21	
278	地割後平一劣生	01遺2層	尖端研磨状石器未完成品	下呂石	完形	E/S/P+S/I	D	横長削片	円錐	40.2	23.1	5.3	4.8	28	21		
279	佛生	01遺1層	尖端研磨状石器	軽板岩	研磨	研磨	研磨	不明	不明	54.1	78.8	10.7	57	28	22		
280	佛生	01遺2層	大型尖端研磨状石器	軽板岩	研磨	HD	不明	HxD	不明	78.4	86.3	18.2	135.2	28	22		
281	佛生	C5B	打削石縫状石器	泥岩	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	片削	右側辺に抉り跡を作出	48.5	115.2	12.7	83.5	28	22	
282	凶世	15遺	基底(下フリ)	凝灰岩	無片	通用外	通用外	不明	前面はかなり磨耗している。	72.11	73.6	7.6	2116.6	28	22		

図 版



遺跡全景（南から）



作業風景



作業風景

図版2



調査区南壁メインセクション中央（北から）



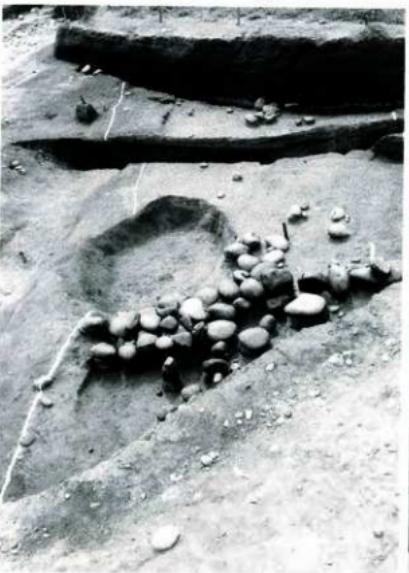
東壁メインセクション中央（西から）



北壁西側セクション（南から）



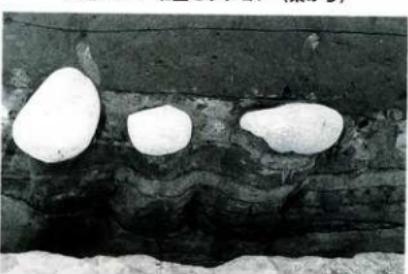
01溝・11埋 検出状況（南から）



01溝全景（東から）



01溝・NR 北壁セクション（東から）



01溝・NR 北壁セクションUP（東から）



11堰全景（南から）



11堰全景（北から）



11堰全景（西から）



11堰東西ベルトセクション（北から）



14溝全景（北から）



14溝セクション（南から）

図版4



02溝・03溝全景（南から）



調査区全景（南東から）



調査区全景（北東から）



05溝 検出状況（南から）



05溝・15溝全景（南から）



05溝・15溝 a-a'セクション (南から)



05溝・15溝 b-b'セクション (南から)



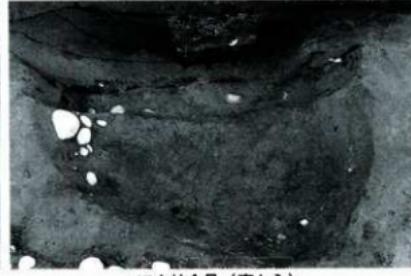
05溝・15溝 c-c'セクション (北から)



作業風景



07土杭セクション (東から)



07土杭全景 (東から)

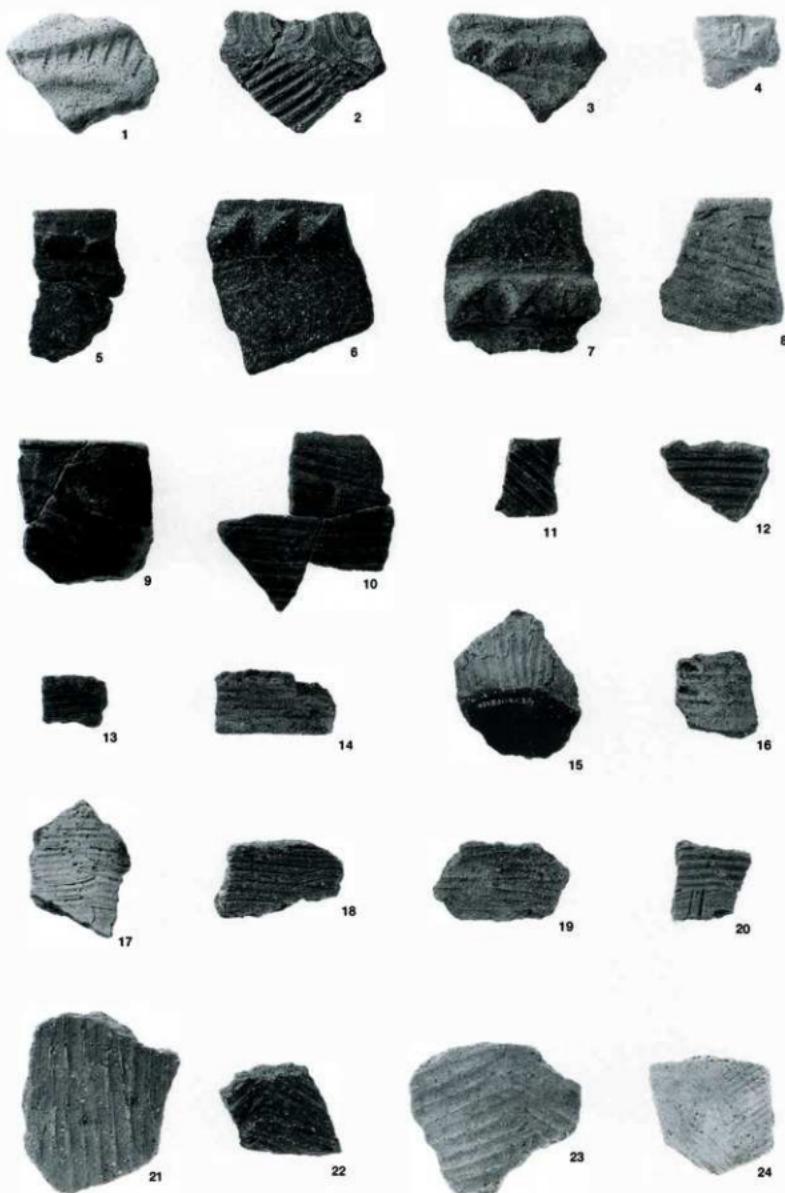


08土杭セクション (東から)

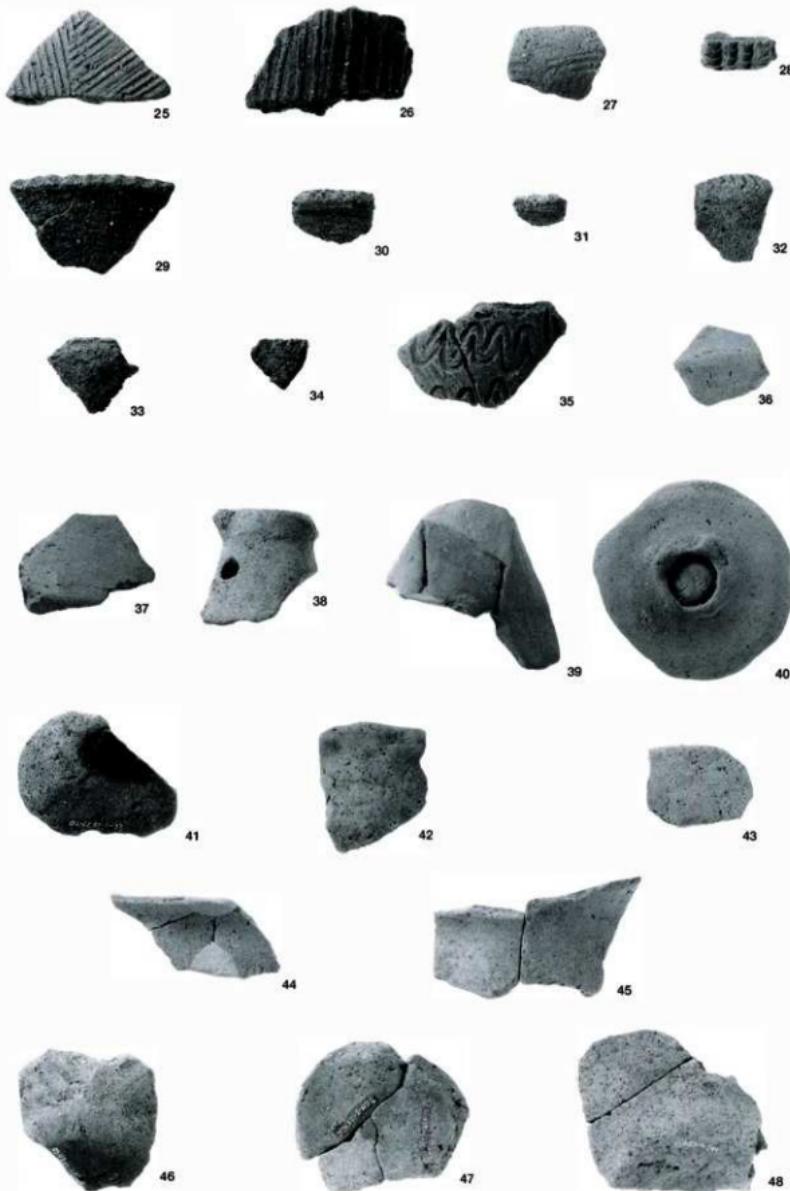


08土杭全景 (東から)

図版6



01溝出土遺物 (1)



01満出土遺物 (2)

图版8



50



51



52



53



49



54



61



62



62



63

01 满出土遗物 (3)



55



56



59



57

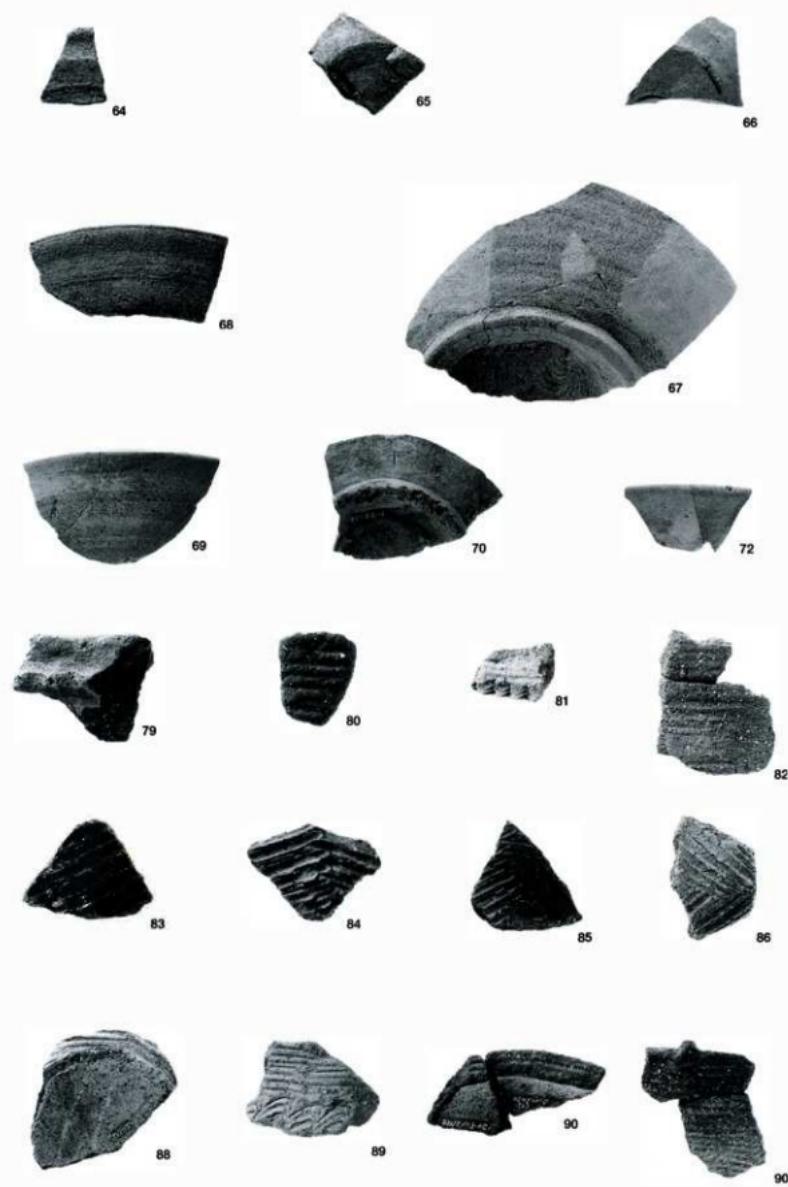


60

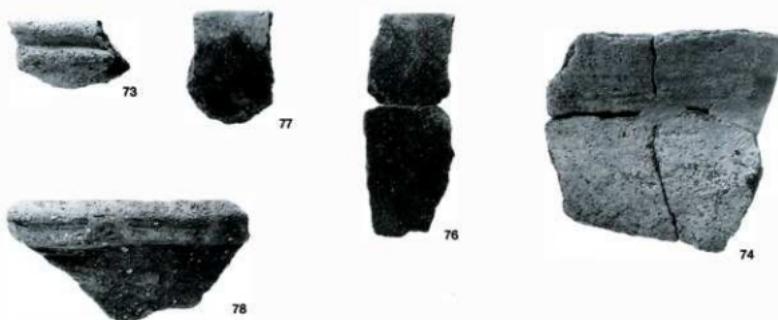


60

図版10

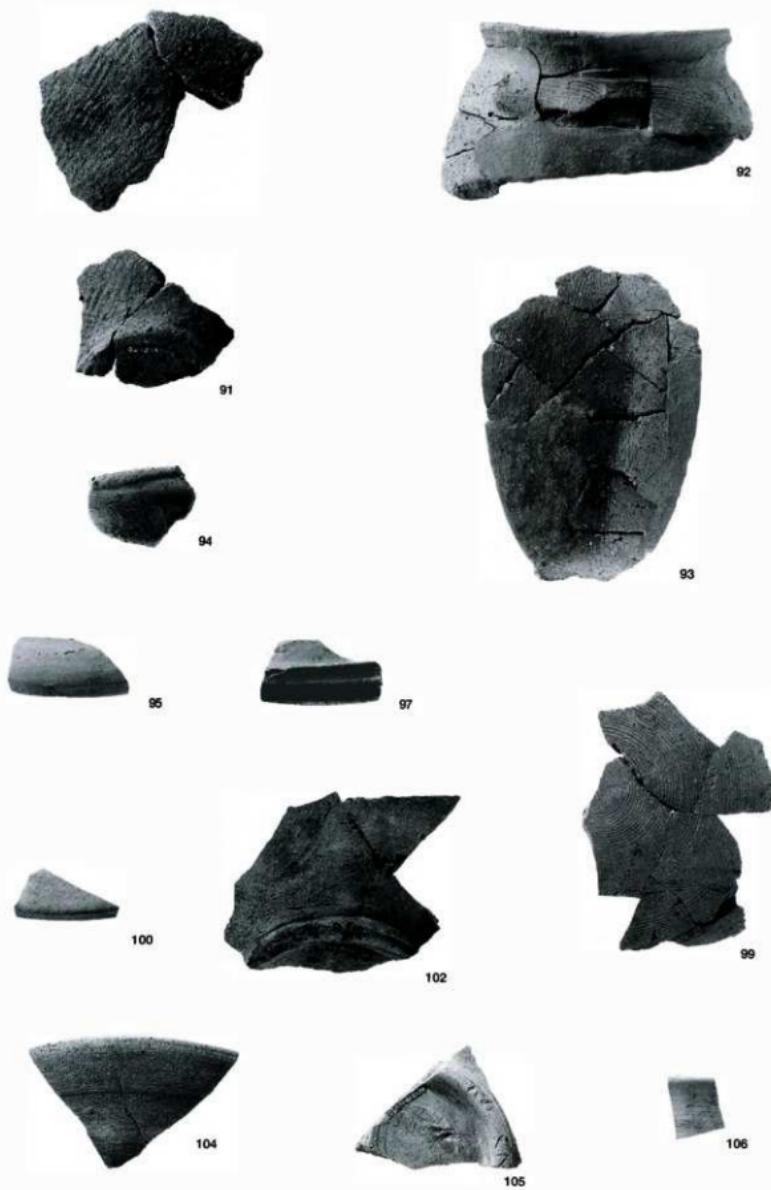


01溝出土遺物 (5)、自然流路出土遺物 (1)



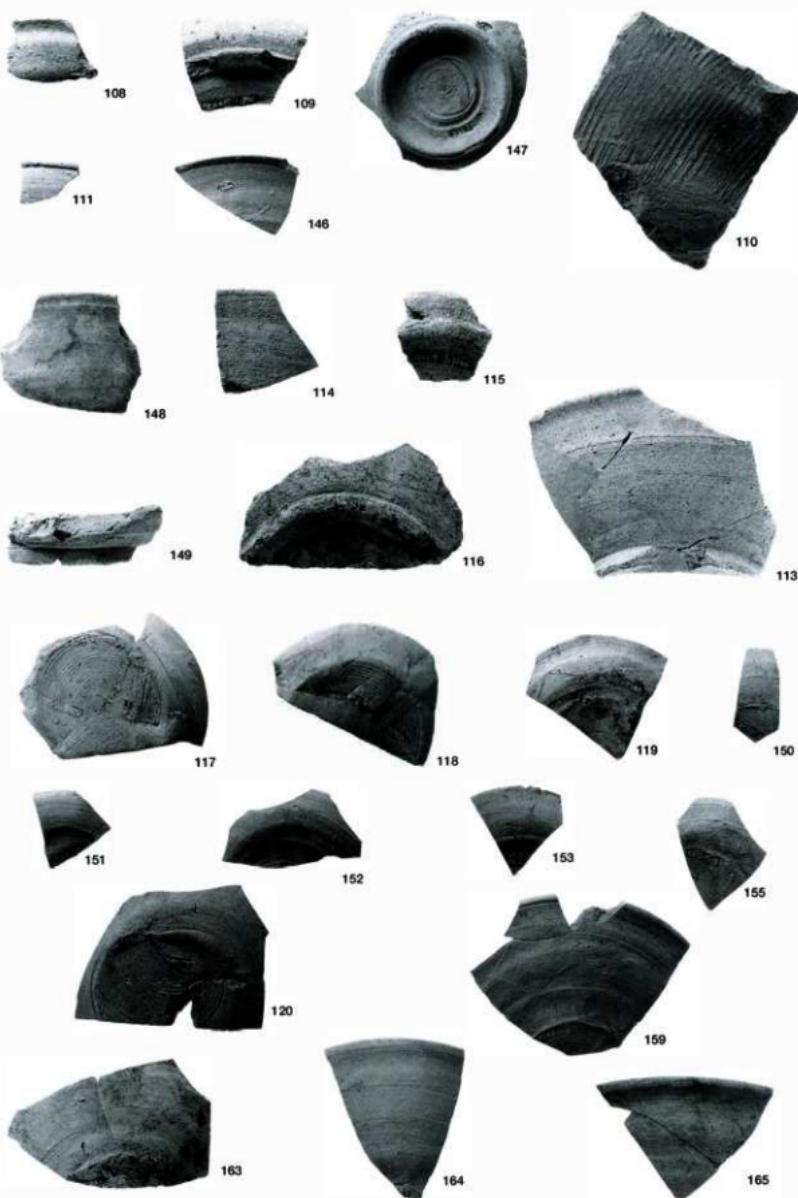
自然流路出土遺物 (2)

図版12



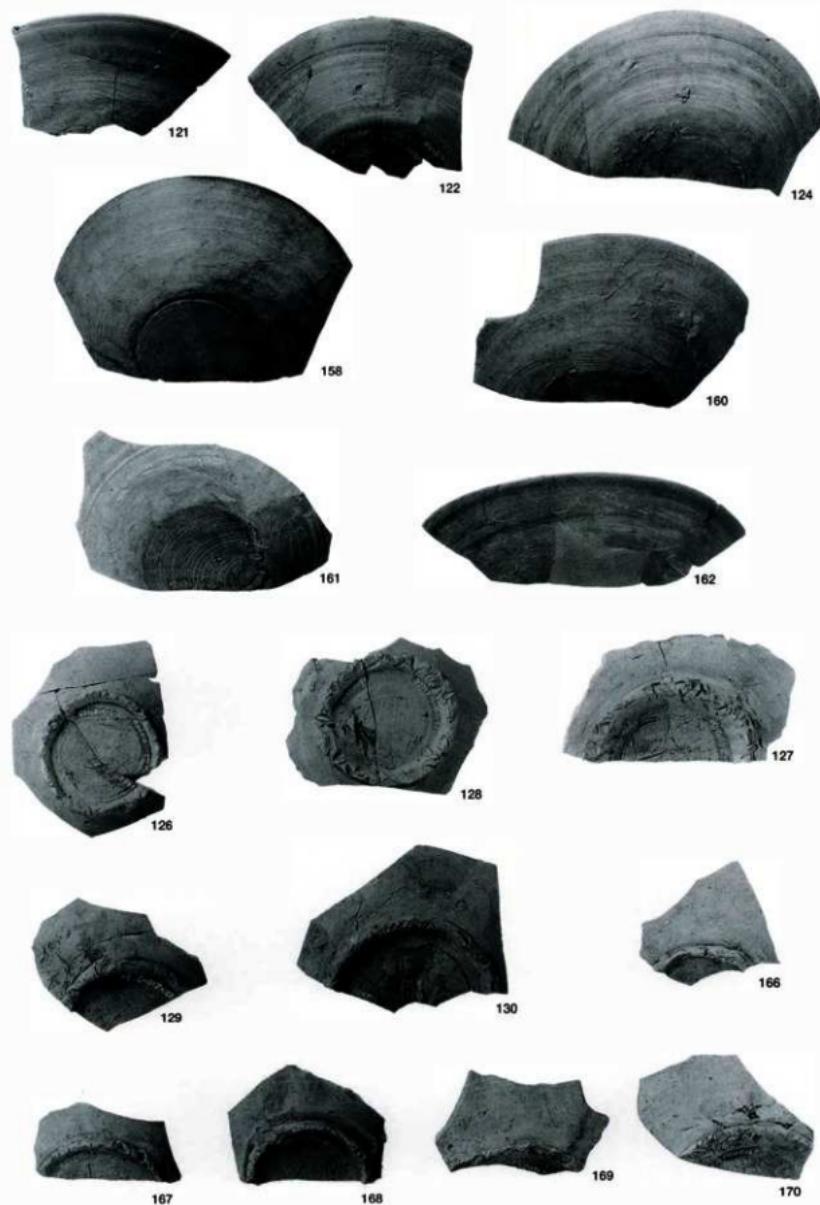
自然流路出土遺物 (3)、14清・02清出土遺物

図版13



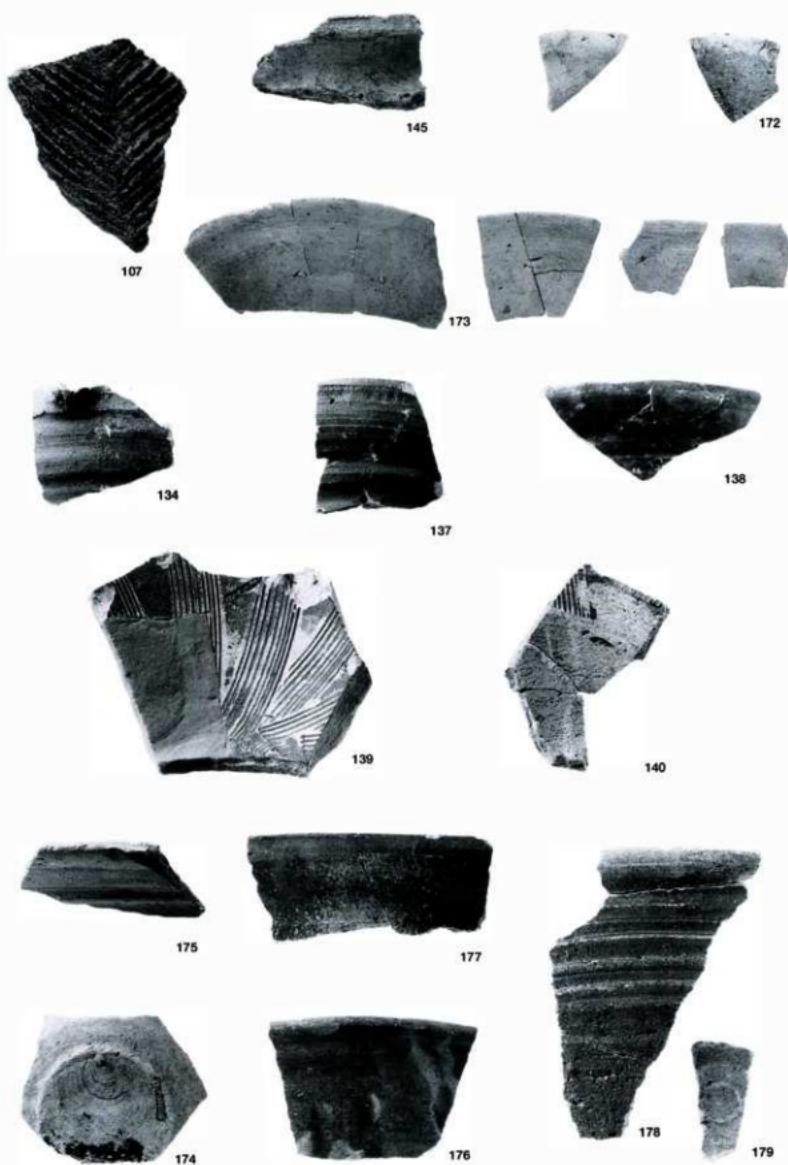
05溝・15溝出土遺物（1）

図版14



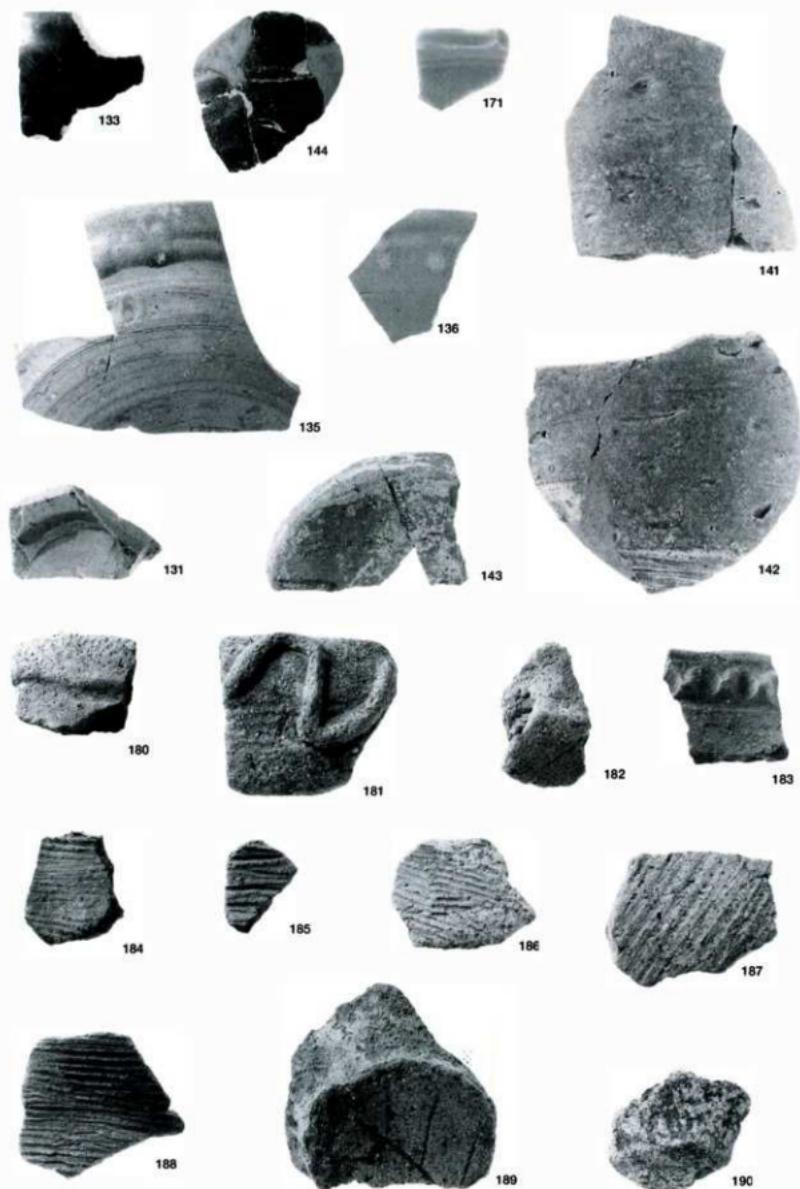
05溝・15溝出土遺物 (2)

図版15



05満・15満出土遺物（3）

図版16



05満・15満出土遺物 (4)、包含層出土遺物 (1)



自然流路

包含層出土遺物 (2)、01満・自然流路出土遺物

图版18



96



125



98



132



101

15溝出土



156



103

14溝出土



157



112

05溝出土



123

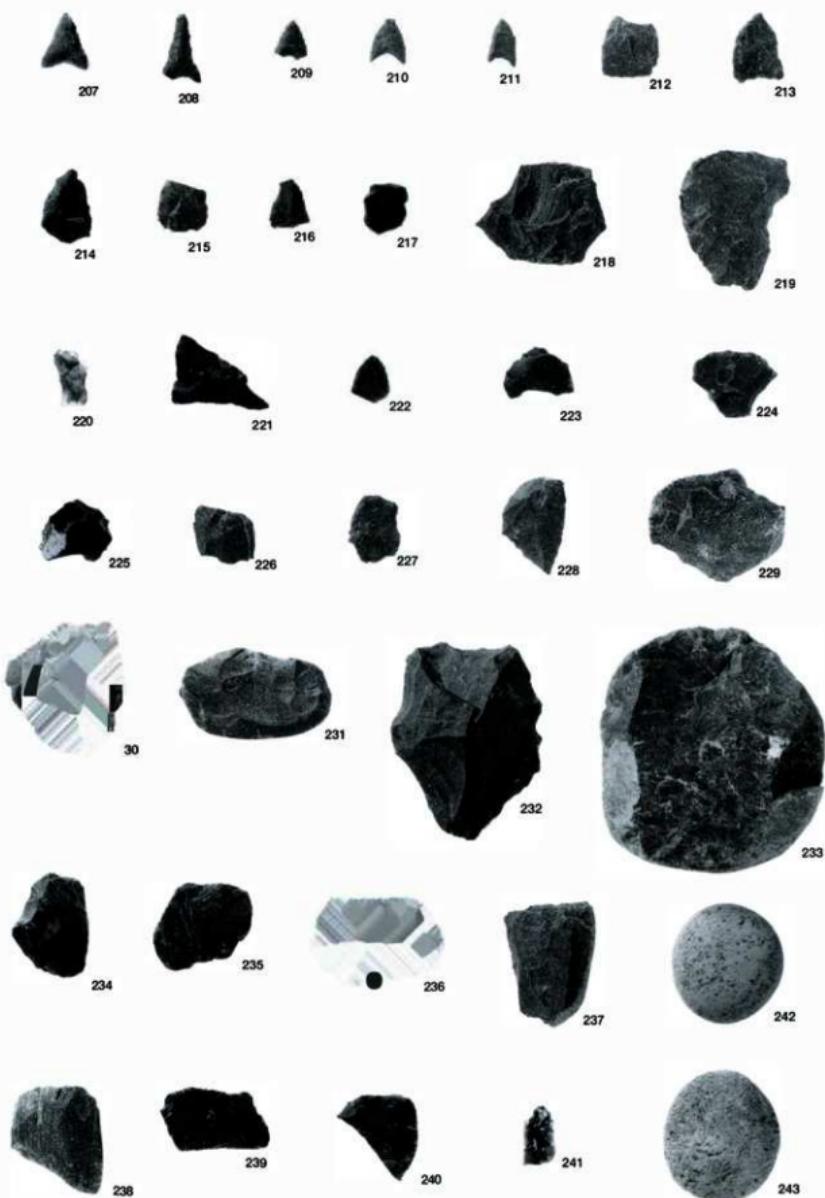
15溝出土



194

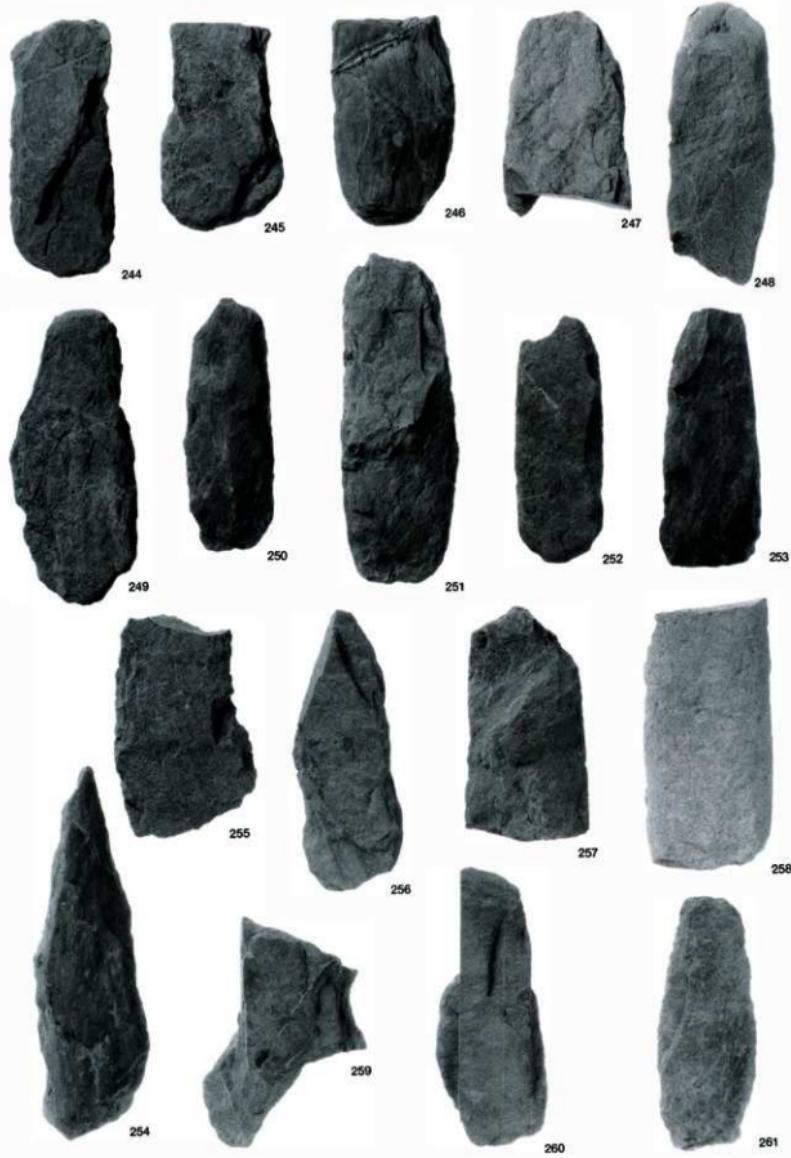
包含層出土

自然流路、14溝・15溝・05溝、包含層出土遺物



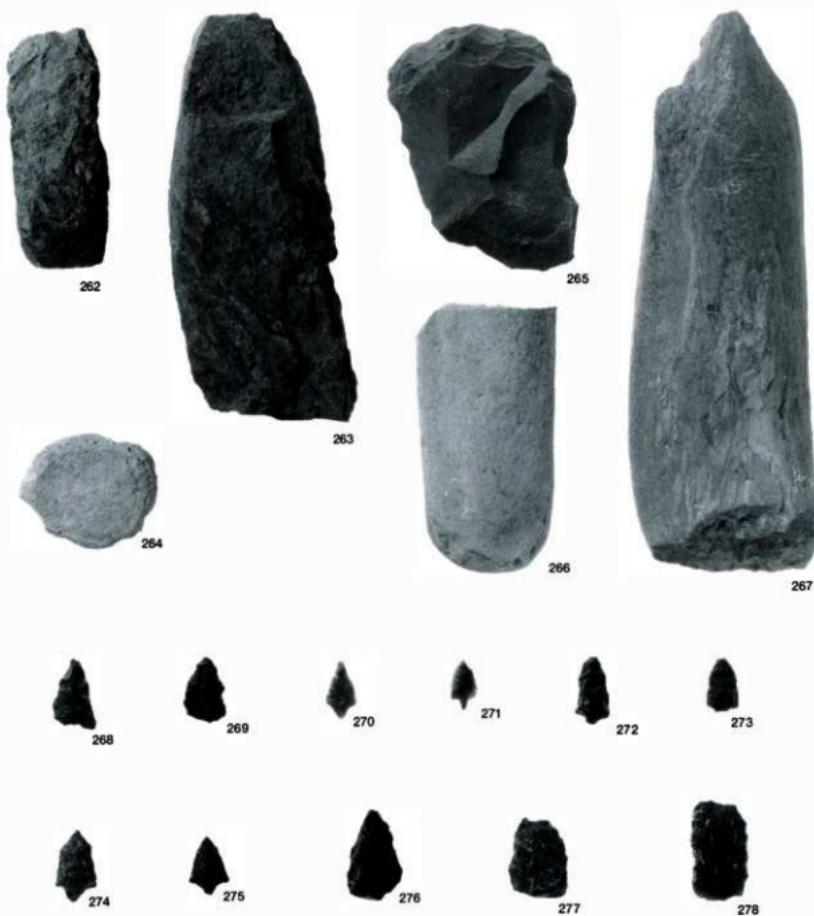
包含層出土石器（1）

図版20



包含層出土石器（2）

図版21



包含層出土石器 (3)

图版22



279



280



281



282



01满1层



C301满1层



01满1层



01满2层



01满2层



01满1层



C3Ⅲ

包含层出土石器 (4)、包含层出土剥片·石核

報告書抄録

ふりがな	のざさいせき 3							
書名	野籠遺跡Ⅲ							
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編著者名	近藤正枝 藤岡比呂志							
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550							
発行年月日	西暦2004年3月19日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所取遺跡名	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野籠遺跡	岐阜県美濃加茂市野籠町2丁目字紙屋	21211	08845	35° 26' 20"	137° 2' 27"	20020624 ~ 20020820	500m ²	一般国道 248号道 路改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
野籠遺跡	集落跡	中世	溝跡 6条 壙 1本 土坑 2基 ピット 3基	石器 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土師器皿 山茶碗 中国製磁器 中世陶器	野籠遺跡Ⅰで検出された 12世紀の大溝につながる 溝跡を確認。野籠遺跡Ⅰで も確認された壙を伴う。 I・II区で出土したものと 同一個体の可能性が高い 12世紀の青磁盤（龍泉窯 系）も出土している。			

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第87集

野 笹 遺 跡 Ⅲ

2004年3月19日

編集・発行 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 サンメッセ株式会社